

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第39集

県道大宮東京線関係

埋蔵文化財発掘調査報告

II

中原後・石御堂

1 9 8 4

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

県道大宮東京線関係

埋蔵文化財発掘調査報告

II

中原後・石御堂

1984

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県の国道・県道の新設・改良は、交通事情の変化に対応するため、地域開発を組み込みながら計画されております。

県道大宮・東京線は、第二の産業道路として計画され、大宮地区では、すでに一部が開通しております。浦和地区・川口地区の路線にかかる埋蔵文化財包蔵地の取扱いは、慎重に協議が重ねられてまいりましたが、その一部について記録保存を目的とした発掘調査を実施することになりました。そして浦和地区の2遺跡については、昭和57年度に発掘調査報告書が刊行されております。

今回の発掘調査は、昭和57年度に埼玉県の委託を受け、当事業団が実施し、大きな成果を納めることができました。そして、その成果を当事業団報告書第39集として本書に記録いたしました。

発掘から報告書刊行に至るまで御協力をいただきました、埼玉県土木部都市施設課・浦和土木事務所・浦和市教育委員会・川口市教育委員会及び地元関係者の方々に改めて深く感謝いたします。また、本書が教育・学術研究等に広く活用されることを希望いたします。

昭和59年3月

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 長 井 五 郎

例　　言

1. 本書は、県道大宮・東京線にかかる浦和市中原後遺跡・川口市石御堂遺跡の発掘調査報告書である。(昭和56年・委保第5の2281号、昭和57年・委保第5の991号)
2. 発掘調査は、埼玉県の委託により財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が、昭和56年2月8日から12月28日にわたりて実施し、整理報告書作成作業は昭和58年度に受託し、実施した。

なお、調査の組織は3ページに示したとおりである。

3. 出土品の整理及び図の作成は、浜野一重、小野美代子が主にあたった。
4. 発掘調査における写真および遺物写真は浜野が撮影した。
5. 本書の執筆は文末に記したとおりである。
6. 土層断面図における土壤の色、および遺物実測図における土器等の色の表示は、「新版標準土色帖」(小山正忠・竹原秀雄編著 1976)に基づくものである。
7. 本書の編集は、調査研究部第5課職員があたり、横川好富が監修した。
8. 本書を作成するにあたり、下記の方々から御教示、御助力を得た。(敬称略)

井上喜久男・仲野泰裕(愛知県陶磁資料館)

宮石宗弘(瀬戸市歴史民俗資料館)

盛田美典(常滑市民俗資料館)

加藤　縁(大田区立郷土博物館)

目 次

序	
例 言	
I 調査の概要	1
1 調査に至るまでの経過	1
2 調査の経過（日誌抄）	2
II 中原後遺跡発掘調査	4
1 遺跡の立地と環境	4
2 遺跡の概観	6
3 遺構と出土遺物	13
(1) 縄文時代	13
A 住居跡	13
B 土壌	20
C ピット群	24
D 出土遺物	25
(2) 奈良・平安時代	39
A 住居跡	39
B 土壌	47
(3) 近世	55
(4) 石製品	57
4 結語	58
III 石御堂遺跡発掘調査	61
1 遺跡の立地と環境	61
2 遺跡の概観	67
3 遺構と出土遺物	68

(1) 中・近世	68
A 溝	68
B 土壌	78
C 井戸状土壌	93
D 出土遺物	98
a 陶磁器	98
b 木製品	113
c 石製品	119
(2) 奈良・平安時代	126
(3) 古墳時代	128
(4) その他の遺物	130
4 結語	132
 IV 付篇	136
1 石御堂遺跡出土木材の樹種	136
2 石御堂遺跡出土の種実類	142
3 石御堂遺跡出土の椀形鍛冶滓の調査	145

挿 図 目 次

中原後遺跡	
第1図 遺跡位置図	5
第2図 周辺地形図	6
第3図 層序図(1)	8
第4図 層序図(2)	9
第5図 全測図(折込み)	11
第6図 3号住居跡	13
第7図 5号住居跡	14
第8図 6号住居跡	15
第9図 9号住居跡	16
第10図 6～9号住居跡(折込み)	17
第11図 10号住居跡	19
第12図 11号住居跡	20
第13図 繩文時代土壙(1)	22
第14図 繩文時代土壙(2)	23
第15図 ピット群	24
第16図 繩文土器拓影図(1)	27
第17図 繩文土器拓影図(2)	30
第18図 繩文土器拓影図(3)	32
第19図 繩文土器拓影図(4)	36
第20図 繩文土器拓影図(5)	38
第21図 1号住居跡出土遺物	40
第22図 2号住居跡出土遺物	42
第23図 1・2号住居跡(折込み)	43
第24図 4号住居跡	45
第25図 4号住居跡・竈	46
第26図 4号住居跡出土遺物	47
第27図 奈良・平安時代土壙(1)	49
第28図 奈良・平安時代土壙(2)	51
第29図 奈良・平安時代土壙(3)	52
第30図 奈良・平安時代土壙出土遺物	53
第31図 50号土壙出土鉄製品	54
第32図 1号溝	55
石御堂遺跡	
第33図 2号溝	56
第34図 石製品	57
第35図 遺跡位置図	62
第36図 周辺地形図	63
第37図 I区全測図	64
第38図 II区全測図	64
第39図 III区全測図(折込み)	65
第40図 調査区概念図	67
第41図 溝(I区全測図・部分)(1)	70
第42図 溝土層断面図(1)	71
第43図 溝(I区全測図・部分)(2)	72
第44図 溝土層断面図(2)	73
第45図 溝(I区全測図・部分)(3)	75
第46図 溝(II区全測図・部分)(4)	76
第47図 溝土層断面図(3)	77
第48図 土壙(1)	79
第49図 土壙(2)	81
第50図 土壙(3)	84
第51図 114号土壙	86
第52図 土壙(4)	88
第53図 土壙(5)	90
第54図 土壙(6)	92
第55図 井戸状土壙(1)	94
第56図 井戸状土壙(2)	96
第57図 井戸状土壙(3)	97
第58図 陶磁器(1)	99
第59図 陶磁器(2)	102
第60図 陶磁器(3)	105
第61図 常滑窯	107
第62図 押印文様	108
第63図 握り鉢(1)	109

第64図 摺り鉢(2).....	110	第74図 石製品(5).....	125
第65図 土鍋・焰烙.....	112	第75図 須恵器坏.....	127
第66図 木製品(1).....	114	第76図 116号土壤.....	128
第67図 木製品(2).....	116	第77図 土師器.....	129
第68図 木製品(3).....	117	第78図 石製模造品.....	130
第69図 木製品(4).....	118	第79図 土玉.....	130
第70図 石製品(1).....	119	第80図 繩文土器拓影図.....	131
第71図 石製品(2).....	120	第81図 瓦.....	131
第72図 石製品(3).....	121	第82図 古錢拓影図.....	131
第73図 石製品(4).....	123		

表 目 次

表1 大宮東京線関係遺跡一覧表.....	1	表13 土鍋・焰烙観察表.....	111
表2 中原後繩文土器観察表.....	25・26・28・29	表14 石製品(3)(4)観察表.....	122
	31・33～35・37	表15 石製品(5)観察表.....	125
表3 1号住居跡出土遺物観察表.....	41	表16 須恵器坏観察表.....	126
表4 2号住居跡出土遺物観察表.....	42	表17 土師器観察表.....	128
表5 4号住居跡出土遺物観察表.....	46	表18 用途別樹種・標本数一覧.....	141
表6 奈良・平安時代土壤出土遺物観察表.....	53	表19 石御堂遺跡出土種実類一覧表.....	144
表7 陶磁器(1)観察表.....	100	表20 石御堂遺跡出土モモ核計測値一覧表.....	144
表8 陶磁器(2)観察表.....	102	表21 供試材の履歴及び調査項目.....	145
表9 陶磁器(3)観察表.....	104	表22 石御堂鍛錬治溝と猿貝北製鍊溝 の成分比較.....	146
表10 常滑窯観察表.....	106	表23 埼玉県下古代製鐵遺跡出土の楕形 鍛冶溝・製鍊溝の化学分析結果.....	148
表11 摺り鉢(1)観察表.....	108		
表12 摺り鉢(2)観察表.....	111		

写真図版目次

- 中原後遺跡
- 図版1 遺跡遠景(東より) 遺跡遠景(西より)
- 図版2 I区全景 II区全景
- 図版3 III区全景 1号住居跡
- 図版4 2号住居跡 3号住居跡
- 図版5 4号住居跡 4号住居跡竪
- 図版6 5号住居跡 6号住居跡
- 図版7 7号住居跡 8号住居跡
- 図版8 9号住居跡 7・8・9号住居跡
- 図版9 11号住居跡 ピット群
- 図版10 8号土壤 27号土壤
- 図版11 50号土壤刀子出土状態 発掘作業風景
- 図版12 繩文土器(1) 繩文土器(2)
- 図版13 繩文土器(3) 繩文土器(4)
- 図版14 繩文土器(5) 繩文土器(6)
- 図版15 2号住居跡出土土鍤 4号住居跡竪内
出土土器 50号土壤出土鉄製品
- 石御堂遺跡
- 図版16 I区西側(西より) II区東側(北より)
- 図版17 1号溝 2号溝
- 図版18 47号土壤 215号土壤
- 図版19 209号土壤 11号溝下駄出土状態
- 図版20 11号溝遺物出土状態 11号溝杭出土状態
- 図版21 11号溝流木出土状態 16号溝椀出土状態
- 図版22 106号溝板石塔婆出土状態 106号溝掘り鉢出土状態
- 図版23 116号土壤遺物出土状態 発掘作業風景
- 図版24 陶磁器(1)
- 図版25 陶磁器(1X2)
- 図版26 陶磁器(3)
- 図版27 常滑窯
- 図版28 撥り鉢・土鍋・焙烙
- 図版29 木製品(1)
- 図版30 木製品(2X3)
- 図版31 木製品(4)
- 図版32 石製品(4X5)(6)
- 図版33 古錢 須恵器坏
- 図版34 土師器
- 図版35 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(1)
- 図版36 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(2)
- 図版37 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(3)
- 図版38 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(4)
- 図版39 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(5)
- 図版40 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(6)
- 図版41 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(7)
- 図版42 石御堂遺跡出土木材顕微鏡写真(8)
- 図版43 石御堂遺跡出土種実類
- 図版44 石御堂遺跡出土鉄滓顕微鏡写真(1)
- 図版45 石御堂遺跡出土鉄滓顕微鏡写真(2)
- 図版46 石御堂遺跡出土鉄滓顕微鏡写真(3)

I 調査の概要

1 調査に至るまでの経過

埼玉県では、増大する交通量に対処するため各種の道路建設工事を実施しているが、都市化の著しい県南では計画の基本となる都市計画道路の建設が特に進められている。都市計画道路大宮・東京線は大宮市・浦和市・川口市を結ぶ産業道路の東側を併走し、第2産業道路とも呼ばれている道路である。

県教育局文化財保護課では、開発関係部局と各種の協議を実施して文化財保護と開発事業との調整を図っている。今回の事業の担当課である県土木部都市施設課とも同様の調整を進めていた。

都市施設課長から昭和53年1月23日付け都施第580号をもって、「浦和及び川口都市計画道路大宮東京線建設予定地内の埋蔵文化財の所在等について」文化財保護課長あて照会がなされた。文化財保護課では、浦和市及び川口市教育委員会の協力を得て現地調査を実施した結果、路線内に5遺跡の所在を確認した。そして、昭和54年3月に都市施設課長あて照会文書に対する回答を行った。その内容はおおよそ下記のとおりである。

1. 文化財の所在

路線内にはNo.1～No.5の5遺跡が所在し、各遺跡は绳文～平安時代の集落跡として把握されている周知の遺跡であること。

2. 取扱い

これらの遺跡は現状保存することが望ましいが、やむを得ず現状を変更する場合には、文化財保護法第57条の3の規定に従い、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。また、所在の有無が明確でない区域については事前に確認調査を実施すること。

その後、文化財保護課と都市施設課と協議を重ねた結果、路線変更は不可能となつたためやむを得ず記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、公共事業の増大に対処するため昭和55年に設置された(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団がその実施に当たる事が決定した。文化財保護法に基づき埼玉県知事からは埋蔵文化財発掘通知、事業団からは埋蔵文化財発掘調査届を文化庁長官へ提出し、昭和55年度-No.2・No.4遺跡、56年度-No.1遺跡、57年度-No.5遺跡を発掘調査した。本書で報告するNo.1遺跡について、文化庁からは昭和56年12月15日付け委保第5の2281号、No.5遺跡について、昭和57年8月4日付け委保第5の991号をもつて調査届を受理した旨の通知があった。

(宮崎朝雄)

表1 大宮東京線関係遺跡一覧表

	遺跡名	所在地	時代	種別	備考
No.1	中原後遺跡	浦和市三室字中原後	绳文・平安	集落跡	本報告書
No.2	中原前遺跡	浦和市三室字中原前	绳文	散布地	埼玉文報告書第30集
No.3	西宿南遺跡	浦和市三室字西宿	古墳・平安	集落跡	埼玉文報告書第30集
No.4	駒前遺跡	浦和市中尾字駒前	绳文・平安	集落跡	埼玉文報告書第30集
No.5	石御堂遺跡	川口市東本郷字石御堂	中世・近世	散布地	本報告書

2 調査の経過（日誌抄）

中原後遺跡（昭和57年2月8日～6月30日）

2月 機材搬入等、調査態勢を整えI区より表土除去にかかる。排土集積場が確保されず、やむなくIII区の表土上に置く。I区より溝1、土壤4検出。続いてII区の表土除去を行なう。この作業中に、黒色土層中より焼土が検出され、1号住居跡を確認した。

表土除去後、道路センターに沿い 4×4 mのグリッドを設定し、調査を開始する。I区は遺構の測量・写真撮影を終え、先土器時代遺物包含層確認のため 2×2 mの規模で深掘りを行なったが遺物は検出されなかった。この段階でII区には住居跡3、溝1、土壤・ピット多数が確認された。1号住居跡ほか測量・写真撮影終了。

3月 II区精査の結果住居跡がさらに7、土壤多数が検出され調査を行なう。II区遺構よりの排土でI区埋め戻し。2～5号住居跡ほか測量・写真撮影終了。

4月 II区東側と南西側の遺構調査終了後、ローム面迄下げ、精査の結果住居跡1、土壤・ピット多数が検出された。6・7・10号住居跡ほか測量・写真撮影終了。

5月 8・9・11号住居跡ほかの測量・写真撮影を終了し、航空写真撮影を行なう。III区に集積してあった排土でII区を埋め戻し、III区の表土除去。精査の結果、土壤・ピット多数が検出された。

6月 III区の遺構の測量・写真撮影を終え、危険な部分の埋め戻しを行ない、全調査を終了した。

石御堂遺跡（昭和57年7月1日～12月28日）

7月 中原後遺跡より機材を搬入し、見沼代用水西側のI区より表土除去にはいる。すでに道路部分として砂利による仮舗装まで行なわれており、現地表より1m程は客土・ヘドロ・瓦礫等で埋まっていた。粘性のある暗褐色土層上面まで下げる時点で、国家座標に基づき 4×4 mのグリッドを設定し、東端より調査を開始する。遺物は少量出土するが、暗褐色土層中に遺構は検出されなかった。

8月 暗褐色土層を除去し、黄灰色粘土層迄下げるとき構が確認された。I区東側より溝3、土壤・ピット多数を検出。各遺構の調査に入る。

9月 この月に入ると台風の影響で雨がしぶしぶ降り、確認面が粘土層のために調査区全体が覆水して排水作業に追われる日々が続いた。排水後も1日経過させないと遺構確認ができず、調査に支障をきたした。

10月 I区西側の遺構確認。溝が縦横に走り、土壤・ピット多数が検出された。II区の表土除去開始。西側はひどく攪乱をうけ、瓦礫が埋められていた。東側より溝3、土壤数基が検出された。I区と併行して調査を行なう。

11月 見沼代用水東側のIII区の表土除去を行ない、土壤多数を検出する。この月も雨が多く、II区を除く各区に覆水し、排水に手間どる。特にI区は溝底面がもとより軟弱なこともあり調査は困難であったが、ベルトコンベアを投入し、16条の溝の全容が明らかにされた。

12月 初旬にI区・II区の測量・写真撮影・航空写真を終え、III区の調査にかかる。井戸状の深い土壤が多く、手間どったが、下旬には測量・写真撮影・航空写真を終え、年末に全調査を終了した。

発掘調査の組織

1. 発掘（昭和56年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	長 井 五 郎
副理事長	沼 尻 和 也
常務理事	渡 辺 康 夫

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	伊 藤 悅 光
	関 野 宗 一
	福 田 浩 人
	本 庄 朗

発 掘 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長	横 川 好 富
調査研究第二課長	小 久 保 重
	浜 野 一
調査研究第三課長	谷 井 康 子
	小 野 美 代 子

2. 発掘（昭和57年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	長 井 五 郎
副理事長	岩 上 進
常務理事	渡 辺 澄 夫

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	佐 野 長 二
主任	関 野 宗 一
	江 田 和 美 子
	福 田 啓 浩 人
	福 田 康 子
	本 庄 朗

発 掘 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長	横 川 好 富
調査研究副部長	小 川 良 祐
	谷 井 康 子
調査研究第三課長	小 野 美 代 子
	浜 野 一 重

3. 整理（昭和58年度）

主 体 者 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長	長 井 五 郎
副理事長	岩 上 進
常務理事	石 川 正 美

庶務管理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

管理部長	佐 野 長 二
主任	関 野 宗 一
	江 田 和 美 子
	福 田 啓 浩 人
	福 田 康 子
	本 庄 朗

整 理 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

調査研究部長	横 川 好 富
調査研究副部長	小 川 良 祐
(兼) 調査研究第五課長	小 野 美 代 子
	浜 野 一 重

4. 協 力 者

浦和市教育委員会
川口市教育委員会
地元区長及び地元住民

II 中原後遺跡発掘調査

1 遺跡の立地と環境

中原後遺跡は、浦和市大字三室字中原後に所在し、国鉄京浜東北線北浦和駅の北東約3kmの台地上に位置する。

現在では、台地上は宅地化が進み昔日の面影を留め得ないが、台地縁辺部には雜木林が連なっている。台地を下りた所の見沼低地は、古くは文字通り沼であったが、江戸時代初頭に八丁堤が築かれ、用水池として使用された。その後、沼は干拓され、新田が形成されるが、その際に排水用に見沼中悪水（現・芝川）が造られる。現在台地縁辺の肩部を巡る見沼代用水西線は、江戸中期に利根川よりひかれた灌漑用水路である。

遺跡の位置する台地は、大宮台地の一支台で、浦和支台と呼ばれている。当支台は三室から太田窪にかけて、丸みをおびて東の方向へ見沼低地にはり出しており、当遺跡はその北辺より北へ小さく舌状に伸びた部分に位置している。

台地の標高は約10~12mで、沖積低地との比高差は約4~6mである。

中原後遺跡では、縄文時代前期~中期の土器片と後・晚期のものも数片出土した。該期の遺跡についてごく簡単にふれておく。

前期の遺跡には、黒浜期・諸磯a期の住居跡が検出された大谷場貝塚（野上・三友ほか1958）、山崎貝塚（宮内1967）等があり、北宿遺跡（青木ほか1981）、大北遺跡（青木ほか1982）等にも破片が散見される。

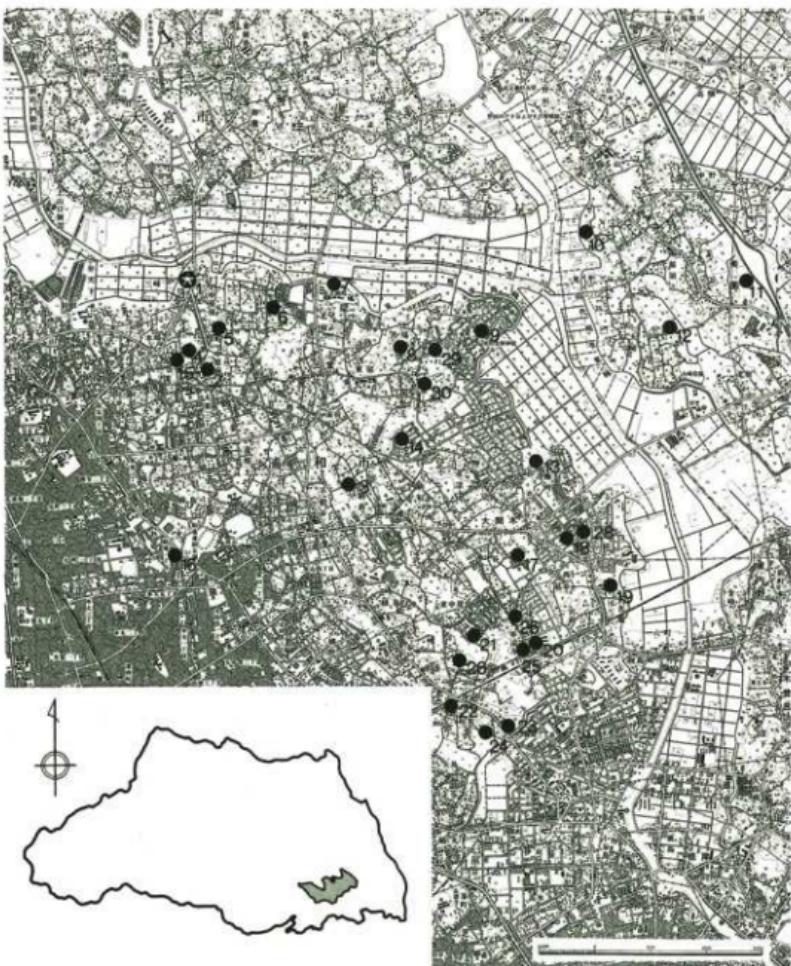
中期の遺跡は数多く発見されているが、五領ヶ台期のものは、根岸遺跡（浦和考古学会1964）、加曾利E期のものは、大北遺跡（前出）、三室遺跡（青木ほか1979）ほかで出土している。

後・晚期では、馬場遺跡（柳田ほか1971他）、前窪遺跡（青木ほか1977）等があげられる。

当遺跡周辺には、奈良・平安時代の遺跡は少ないが、4号住居跡の竈より出土した国分期の甕とほぼ同時期のものが、和田北遺跡（青木ほか1982）の第15号住居跡より出土している。

参考文献

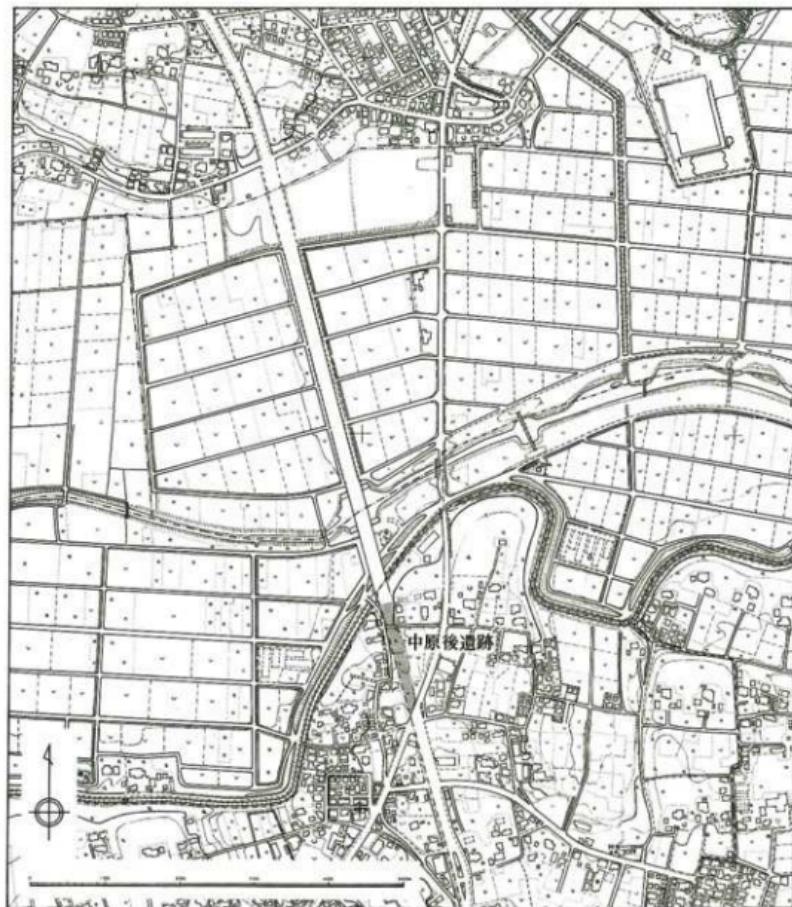
- | | | |
|------------------------|------|--|
| 野上有道・三友国五郎ほか | 1958 | 『大谷場貝塚』浦和市教育委員会 |
| 青木義脩 | 1964 | 『根岸遺跡』浦和考古学会 |
| 宮内正勝 | 1967 | 『浦和市三室山崎貝塚発掘概報』浦和第一女子高等学校郷土研究部 |
| 柳田敏司・青木義脩・宮内正勝 | 1971 | 『馬場遺跡第二次調査報告』浦和市教育委員会 |
| 堀口萬吉 | 1975 | 『日曜の地学〔1〕埼玉の地質をめぐって』築地書館 |
| 青木義脩・岩井重雄・高野博光 | 1977 | 『前窪遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第4集 |
| 青木義脩・岩井重雄 | 1979 | 『三室遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第11集 |
| 青木義脩・高山清司 | 1981 | 『北宿遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第16集 |
| 青木義脩・高山清司・小倉 均 | 1982 | 『井沼方・大北・和田北・西谷・吉場遺跡発掘調査報告書』浦和市遺跡調査会報告書第20集 |
| 宮崎朝雄・村田健二・鈴木秀雄
細田 勝 | 1983 | 『県道大宮東京線関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ 中原前・駒前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第30集 |



1 中原後遺跡 2 中原前遺跡 3 駒前遺跡 4 前窪遺跡 5 山崎貝塚 6 大古里遺跡 7 北宿遺跡 8 馬場遺跡 9 宮本遺跡
 10 植持院西遺跡 11 鶴巣遺跡 12 えんぎ山遺跡 13 梅所遺跡 14 松ノ木遺跡 15 前窪西遺跡 16 前耕地遺跡 17 大間木内谷遺跡 18 和田西遺跡 19 吉場遺跡 20 井沼方遺跡 21 東中尾遺跡 22 明花遺跡 23 明花向遺跡 24 明花上ノ台遺跡 25 井沼方馬場遺跡 26 とうのこし道跡 27 大北遺跡 28 和田遺跡 29 松木北遺跡 30 松木遺跡

第1図 遺跡位置図

2 遺跡の概観



第2図 中原後遺跡周辺地形図

中原後遺跡は、見沼の低地を臨む台地上に位置する。遺跡の標高は約10~12m、低地との比高差は4~6mで、落差は急である。その急に落ち込む台地の肩部を見沼代用水西線が巡っており、低地は田・畠として利用されている。

今回の調査区域は、すでにほぼ道路として形を成している見沼低地を渡る高架と、県道浦和岩槻線以南にはされた部分で、宅地・植木畠等として利用されていた。長さ約200m、幅約20mの南北に細長い範囲で、途中、東西に農道が横切っている。

調査の便宜上、農道より北側をI区、南側植木畠部分をII区、それより南の宅地部分をIII区とした。

調査は、バックホーによりローム層上面まで表土除去作業を行ない、道路のセンター杭を中心として4×4mのグリッドを設定して、西より東へアルファベット、北より南へ数字を付して呼称することとし、I区より調査を開始した。

I区は、深さ30~40cmで遺構確認面に達する。近世に入ってからのものと思われる溝1条と、時期不明の土壙4基が検出された。遺物は、縄文時代前期の土器片が数点みられたのみである。

II区は、北側は深さ40~50cmでローム層がのぞくが、中央部(17~19グリッド)では70~80cm程あり、この部分に堆積した黒色土層中より、平安時代のものと考えられる住居跡(1号住居跡)、土壙等が検出された。北側断面にあらわれた焼土の堆積は適であろうか。また、同時期の住居跡として4号住居跡がとらえられる。

1号住居跡と同一確認面で奈良時代初期の頃と思われる住居跡(2号住居跡)が検出されたが、遺物出土量が少なく、明確ではない。

土壙は、形状・覆土より縄文時代と思われるもの20基、奈良~平安時代と思われるもの18基がII区より検出されており、他は時期不明である。

20グリッドあたりより南側は徐々に標高を高め、II区南端ではローム面まで深さ20~30cmとなる。

II区北側からは縄文時代の住居跡が8軒検出されたが、11号住居跡を除いてはいずれも残存状態が悪く、遺物もほとんど出土していないため、時期の判定はむずかしい。

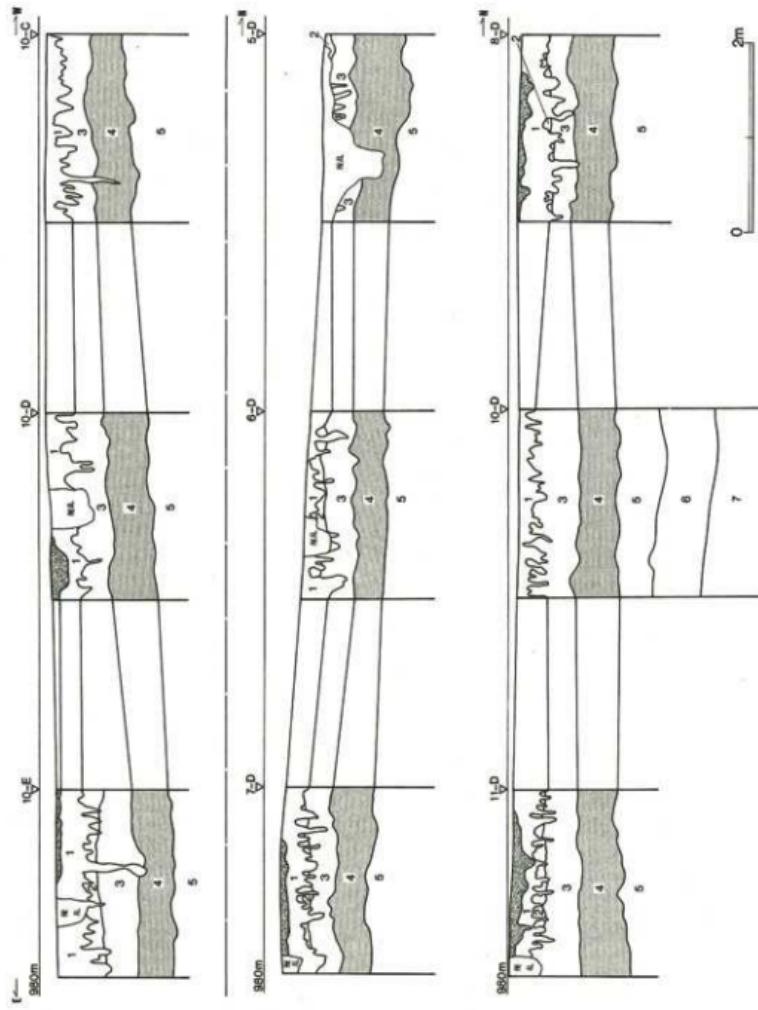
また、13・14-C・Dには縄文時代前期~中期の土器片が多數出土しており、堀り込みは確認できないが、ピットが円形に巡る中に特に土器が集中していることから住居跡の可能性も考えられた。

III区は、深さ30~40cmで遺構が確認できる。住宅地であったため、北側に一部搅乱をうけている部分もあった。土壙31基、ピット49基が検出されたが、調査区南端のピットから縄文土器が数片出土した他にはほとんど遺物の出土がなく、時期は不明である。

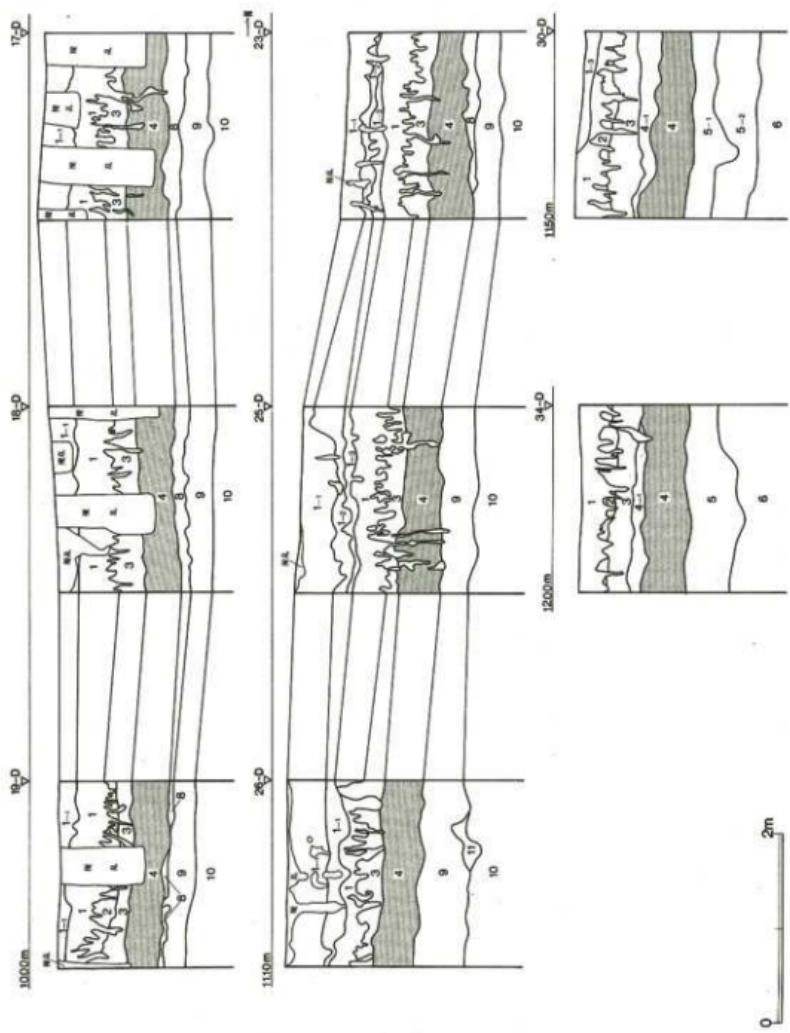
遺跡全体の遺構総数は、住居跡11軒・土壙92基・ピット258基・溝2条である。

遺構確認は、I・III区においてはローム面で行なったが、II区では3段階の面で行なうことことができた。II区の1段階は黒色土層で、17~19グリッドの特に西側に厚く堆積していた。2段階はその下に13~17-Fより16~22-Aにかけて堆積していた褐色土層。3段階がローム面である。

現地形はIII区→II区→I区へとなだらかに台地先端部へ向うが、ローム堆積時には、II区中央を北東から南西へ斜めに横切る形で比高差約1mのゆるやかな段があったものと思われる。また、段の下の部分も、Dグリッドあたりを頂点としてゆるやかに東西に傾斜をもっている。その低い部分



第3図 層序図 (1)



第4図 層序図 (2)

に褐色土が堆積し、さらに黒色土が堆積したのであろう。

8・9ページに、先土器遺物包含層の確認を行なった際に測量した層序図を載せる。8ページ最上段は10グリッドのラインの東西方向の断面で、それ以外はI~III区を通した南北方向の断面である。

層序図の土層説明を次に記しておく。

- 1-1 10YR₅/暗褐色土 粘性ほとんどなく砂質
1-2 10YR₅/暗褐色土 粘性なく1-3より色調が暗い
1-3 10YR₅/にぶい黄褐色土 粘性なく1より色調が暗い
1 7.5YR₅/褐色土 ソフトローム あまり粘性がない
2 7.5YR₅/褐色土 ハードローム 粘性が強く、きわめてしまりよし
3 7.5YR₅/褐色土 粘性あり
4-1 7.5YR₅/暗褐色土 4への漸移層
4 7.5YR₅/黒褐色土 ブラック・バンド 粘性が強く、密な土質 径2~3mmの赤褐色粒を含む
5-1 7.5YR₅/褐色土 しまりよし
5-2 7.5YR₅/褐色土 しまりなし
5 7.5YR₅/褐色土 粘性が強く、密な土質
6 7.5YR₅/褐色土 水分を含み、粘性が強く密な土質
7 7.5YR₅/褐色土 6より水分を多く含むが粘性は少ない
8 5YR₅/暗赤褐色土 水分を多く含み、粘性がある しまりなし
9 5YR₅/暗褐色土 水分を多く含み、粘性がある しまりよし
10 2.5YR₅/暗赤褐色土 水分を多く含み、粘性がある しまりよし
11 5YR₅/にぶい赤褐色土 粘性あり 密でしまりのよい土質

なお、17~19にかけての狭く深い擾乱は、長芋の歯によるものである。



第5圖 全剖面

3 遺構と出土遺物

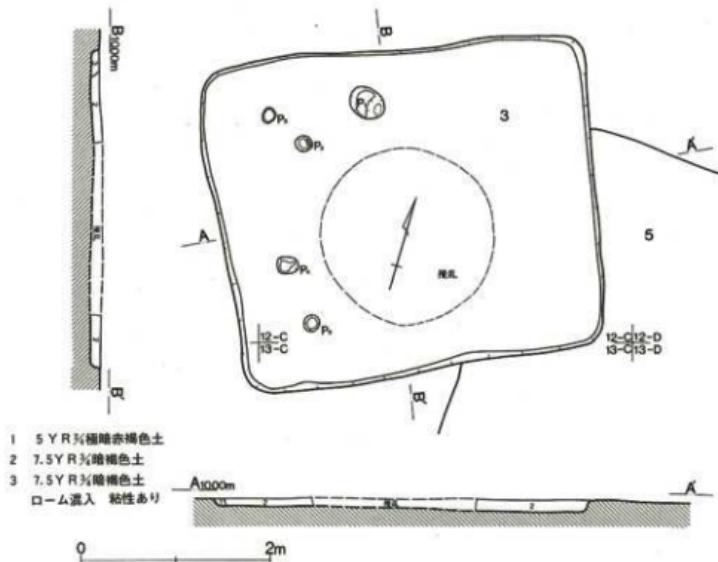
遺構についての記述を見易くするために、箇条書き型式をとり、
1 検出位置・規模・形状等
2 床面状態・柱穴(数値は柱穴数・深さ)・炉址等 3 他の遺構との関連 4 出土遺物 5
その他の特徴 を記す。記述のないものは、出土遺物・きわだつ特徴がないものである。

(1) 縄文時代

A 住居跡

3号住居跡 (第6図、図版4)

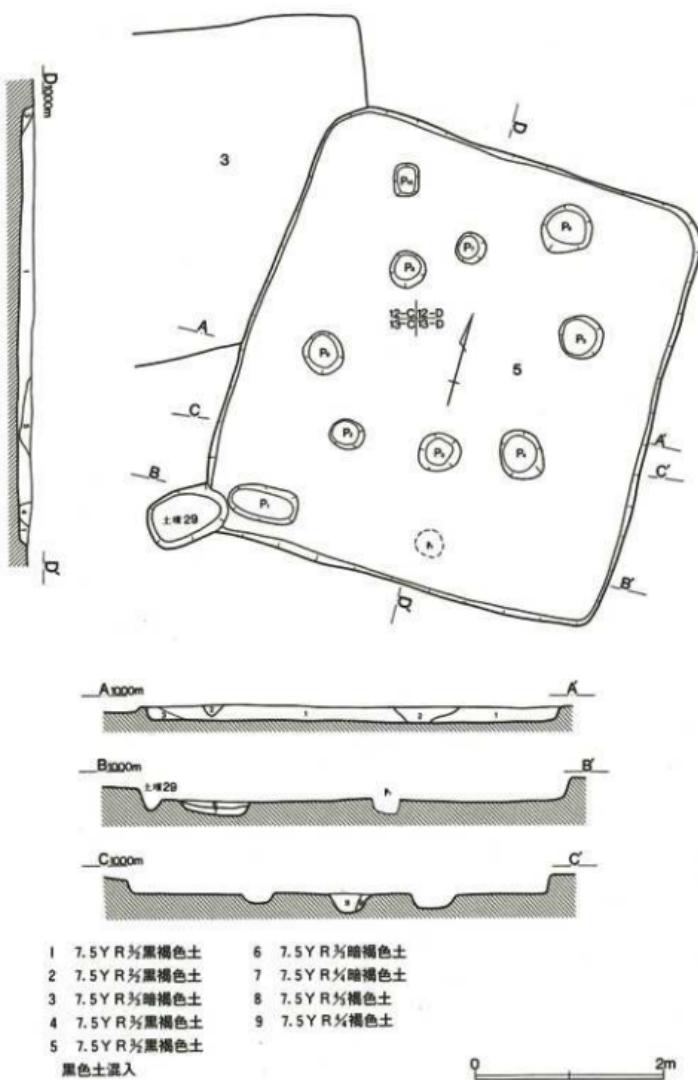
- 1 II区12-C 4.1×3.5mの長方形 壁高10cm
- 2 ほぼ平らで軟弱な床面 柱穴5 P₁-20cm 他は10cm前後 炉址検出されず
- 3 5号住居跡を切る
- 5 中央部に直径1.8mの攪乱



第6図 3号住居跡

5号住居跡 (第7図、図版6)

- 1 II区12-C・D、13-C・D 4.7×4.5mの長方形 壁高15cm
- 2 ほぼ平らで軟弱な床面 柱穴10 P₁・2・11-10cm前後 P₄・5・7・8-15cm前後 P₃・6・10-20cm前後 炉址検出されず
- 3 3号住居跡・第29号土壙に切られる

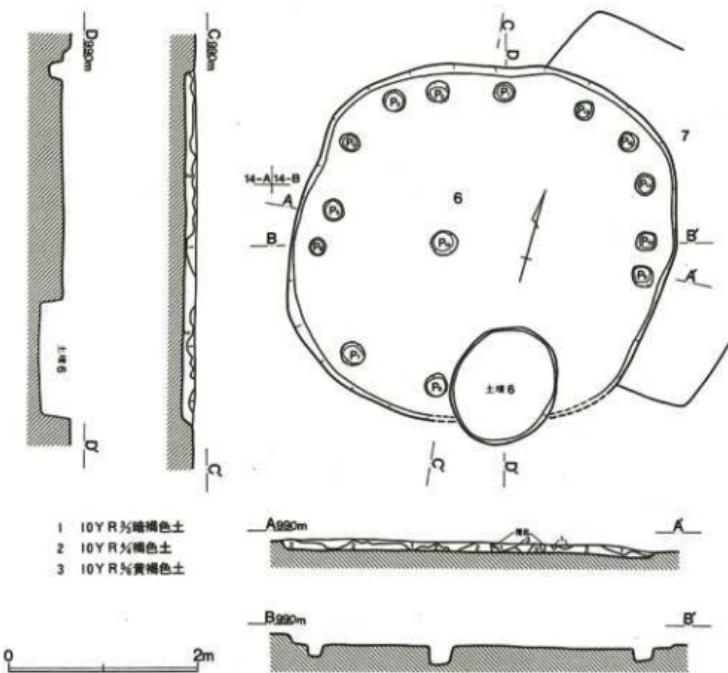


第7図 5号住居跡

4 縄文前期土器片 2

6号住居跡 (第8・10図、図版6)

- 1 II区14・15-B 径4.0~4.5mの不整円形 壁高10cm
- 2 ほぼ平らでややしまりのある床面 柱穴14 P2・7・9・12・13・14-20cm前後 他は10cm程度 炉址検出されず
- 3 7号住居跡を切る 6号土壤に切られる
- 5 東南部をのぞき柱穴が壁沿いに巡る



7号住居跡 (第10図、図版7・8)

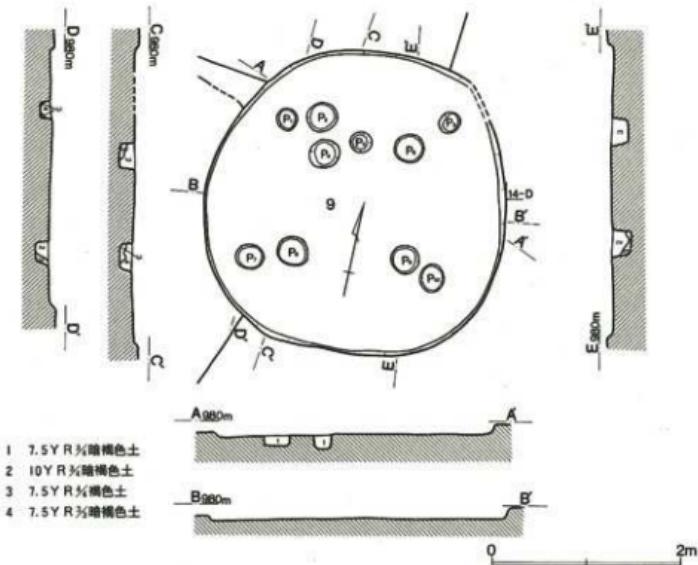
- 1 II区14・15-B・C 3.5×3.3mの長方形 壁高10cm
- 2 ほぼ平らでややしまりのある床面 柱穴30 P1-27cm P20-22-29-20cm前後 P8-9-11-19-26-30-15cm前後 他は10cm前後 炉址検出されず
- 3 6・9号住居跡、6号土壤に切られる
- 5 各辺5~7の柱穴が巡る

8号住居跡 (第10図、図版7・8)

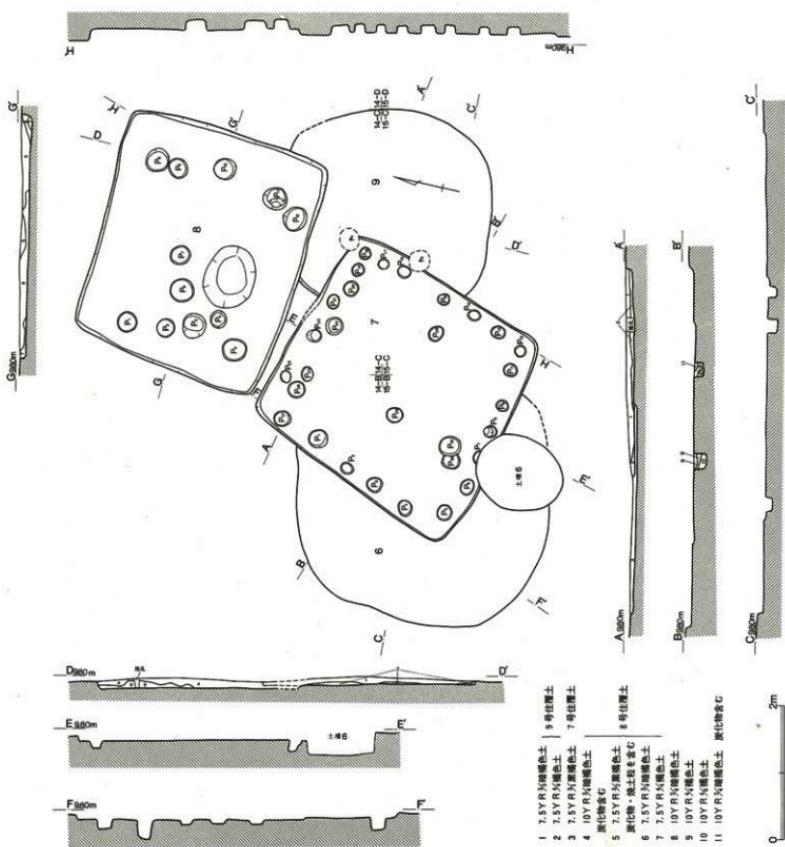
- 1 II区14-C 3.7×3.1mの長方形 壁高10~15cm
- 2 やや東南に傾斜する軟弱な床面 柱穴12 P 3.11~20cm前後 P 5.6.8.10~15cm前後 他は10cm前後 炉址と思われる20cm程度の掘り込みがあるが、焼土等は検出されない
- 3 9号住居跡に切られる
- 4 繩文前期土器片 3

9号住居跡 (第9・10図、図版8)

- 1 II区13・14-C 徑3.2mの円形 壁高10cm
- 2 ほぼ平らでしまりのある床面 柱穴10 P 9~20cm 他は10~15cm 炉址検出されず
- 3 7・8号住居跡を切る
- 4 繩文土器片 2
- 5 中央に不正四角形に並ぶ柱穴4 その対角線の延長上に各々柱穴1



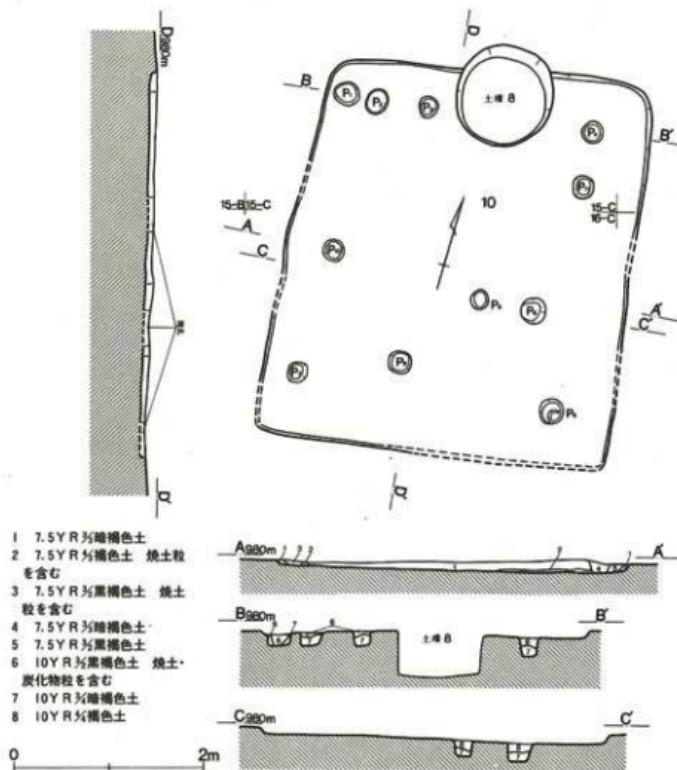
第9図 9号住居跡



第6图 6—9号柱剖面

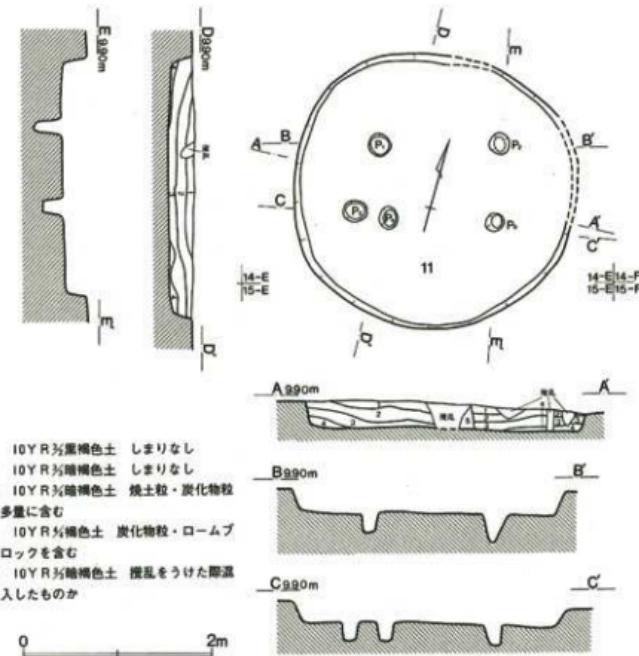
10号住居跡（第11図）

- 1 II区15・16-C 4.2×3.7mの長方形 壁高5~10cm
- 2 やや東に傾斜する軟弱な床面 柱穴11 P₈は28cm、他は12~19cm
- 3 8号土壤に切られる
- 4 繩文土器片 2
- 5 各辺に3つの柱穴が並ぶ 長芋歯が3列横断して攪乱をうける



11号住居跡（第12図、図版9）

- 1 II区14-E 径3mの円形 壁高20~25cm
- 2 ほぼ平らなしまりのある床面 柱穴5 P₂~27cm、他は17~21cm 炉址検出されず
- 3 床面下に94号土壌が検出された
- 5 中央に四角形に柱穴が並ぶ



第12図 11号住居跡

B 土 壌

縄文時代の土壌は、II区の北側、特に13・14-D・Eの8m四方内に集中している。

土壌からはほとんど遺物の出土がないため、形状・検出状況等から時期を定めた。

5号土壌（第13図）

- 1 II区11-D・E 径1.0×0.85mの楕円形 深さ15cm

29号土壌（第13図）

- 1 II区13-C 径0.9×0.6mの楕円形 深さ20cm

- 3 5号住居跡を切る

4 繩文前期土器片 2

40号土壤 (第13図)

1 II区13-B 径1.0×0.65mの楕円形 深さ15cm

47号土壤 (第13図)

1 II区13-E 径0.9×0.6mの楕円形 深さ30cm

48号土壤 (第13図)

1 II区14-E 径1.4×1.0mの楕円形 深さ35cm

51号土壤 (第13図)

1 II区11-E 径0.7×0.5mの楕円形 深さ20cm

54号土壤 (第13図)

1 II区11-D 径1.0×0.7mの楕円形 深さ15cm

57号土壤 (第13図)

1 II区13-C 径1.05×1.0mの円形 深さ20cm

58号土壤 (第14図)

1 II区13-D 径1.0×0.85mの楕円形 深さ20cm

4 繩文土器片 1

94号土壤 (第14図)

1 II区14-E 径1.0×0.95mの円形 深さ25cm

3 11号住居跡の床面下より検出された

5 確認面より15cmの所に三日月状の段をもつ

98号土壤 (第14図)

1 II区15-D 径0.65×0.5mの楕円形 深さ25cm

3 4号住居跡の床面下より検出された

5 確認面より10cmの所に段をもち、中央に深さ15cmの楕円形の掘り込みがある

99号土壤 (第14図)

1 II区14-D 径0.45×0.45mの円形 深さ20cm

100号土壤 (第14図)

1 II区14-D 径0.55×0.55mの円形 深さ20cm

102号土壤 (第14図)

1 II区14-D 径0.7×0.55mの楕円形 深さ35cm

5 確認面より15cmの所に段をもち、中央に深さ20cmの楕円形の掘り込みがある

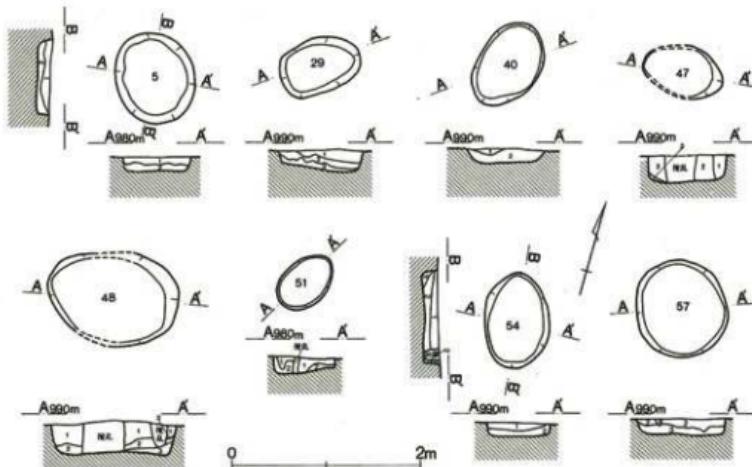
103号土壤 (第14図)

1 II区14-D 径0.75×0.65mの楕円形 深さ15cm

104号土壤 (第14図)

1 II区14-D 径0.45×0.45mの円形 深さ15cm

105号土壤 (第14図)



5号土壤

1 10Y R 5% 黒褐色土

2 10Y R 5% 棕色土 粘性・しまりあり

29号土壤

1 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒を多量に含む

2 10Y R 5% 棕色土 炭化物粒を含む

3 10Y R 5% 棕色土

40号土壤

1 7.5Y R 5% 黒褐色土 粘性・しまりあり

2 7.5Y R 5% 棕色土 粘性・しまりあり

47号土壤

1 7.5Y R 5% 極暗褐色土 ローム粒含む

2 7.5Y R 5% 暗褐色土

3 7.5Y R 5% 暗褐色土

48号土壤

1 10Y R 5% 黒褐色土 しまりなし

2 10Y R 5% 暗褐色土 ロームブロックを含む

3 10Y R 5% 棕色土 粘性・しまりあり

51号土壤

1 10Y R 5% 黒褐色土 ローム粒・炭化物粒含む

2 10Y R 5% 棕色土 しまりよし

54号土壤

1 10Y R 5% 暗褐色土 烧土粒・炭化物粒を含む

2 10Y R 5% 暗褐色土 烧土粒・ロームブロックを含む

3 10Y R 5% にびい黄褐色土 粘性・しまりあり

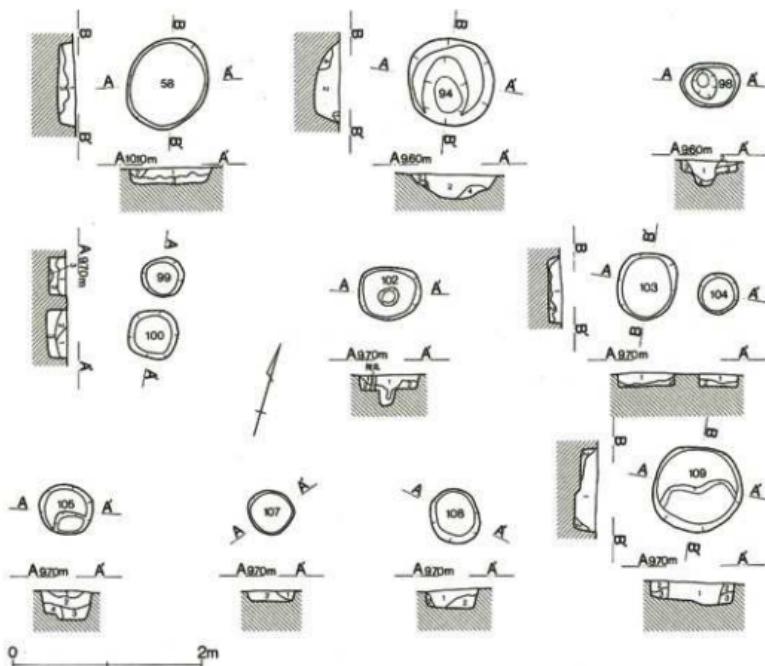
57号土壤

1 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒・ローム粒子を含む

2 10Y R 5% 暗褐色土 烧土粒・炭化物粒を含む

3 10Y R 5% 暗褐色土 烧土粒・ロームブロックを含む

第13図 縄文時代土壤(1)



58号土壤

- 1 7.5Y R 5% 黒褐色土
 - 2 7.5Y R 5% 黒褐色土 ローム粒を含む
 - 3 7.5Y R 5% 暗褐色土 粘性・しまりあり
- 94号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 黒褐色土 しまりなし
 - 3 10Y R 5% 暗褐色土 炭化物粒・焼土粒を含む しまりよし
 - 4 10Y R 5% 暗褐色土 炭化物粒を含む
- 98号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒・焼土粒を含む
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
 - 3 10Y R 5% ぶい 黄褐色土
 - 4 10Y R 5% 暗褐色土 炭化物粒を含む
- 99号土壤
- 1 10Y R 5% 暗褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
 - 3 10Y R 5% ぶい 黄褐色土 烧土粒・炭化物粒を含む しまりよし
- 100号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土 烧土・炭化物を多く含む しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 炭化物粒を含む しまりよし

102号土壤

- 1 10Y R 5% 黒褐色土
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 粘性・しまりあり
- 103号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 粘性・しまりあり
- 104号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 粘性・しまりあり
- 105号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
- 106号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
- 107号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
- 108号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土 しまりよし
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土
- 109号土壤
- 1 10Y R 5% 黑褐色土 炭化物粒を含む
 - 2 10Y R 5% 黑褐色土 炭化物粒を含む
 - 3 10Y R 5% 暗褐色土 しまりよし

第14図 繩文時代土壤(2)

1 II区14-E 径 0.6×0.55 mの円形 深さ30cm

5 確認面より25cmの所に三日月状の段をもつ

107号土壤 (第14図)

1 II区13-D 径 0.5×0.5 mの円形 深さ10cm

3 5号住居跡床面下より検出された

108号土壤 (第14図)

1 II区13-D 径 0.6×0.5 mの楕円形 深さ20cm

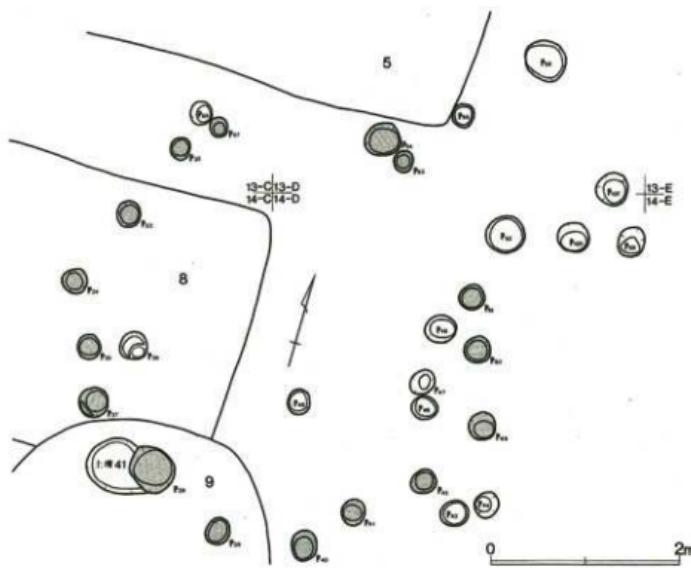
3 5号住居跡床面下より検出された

109号土壤 (第14図)

1 II区13-E 径 1.0×0.9 mの円形 深さ25cm

5 確認面より20cmの所に三日月状の段をもつ

C ピット群 (第15図、図版9)



第15図 ピット群

中原後遺跡では256のピットが検出されたが、その大部分はII区にあり、特に北側12~14-C~Eに集中している。

14-C・Dには、標高9.7~10.0mの黒色土層中に縄文時代中期の土器片が、他グリッドとは異なる密な分布をしていたため、住居跡の可能性も考えられた。

遺物出土層を除去すると、標高9.7m前後の面に、径20~40cm、深さ10~40cmのピットがほぼ円形に巡って検出された。第15図に黒く示してあるのが関連すると考えられるピットである。

(浜野一重)

D 出土遺物

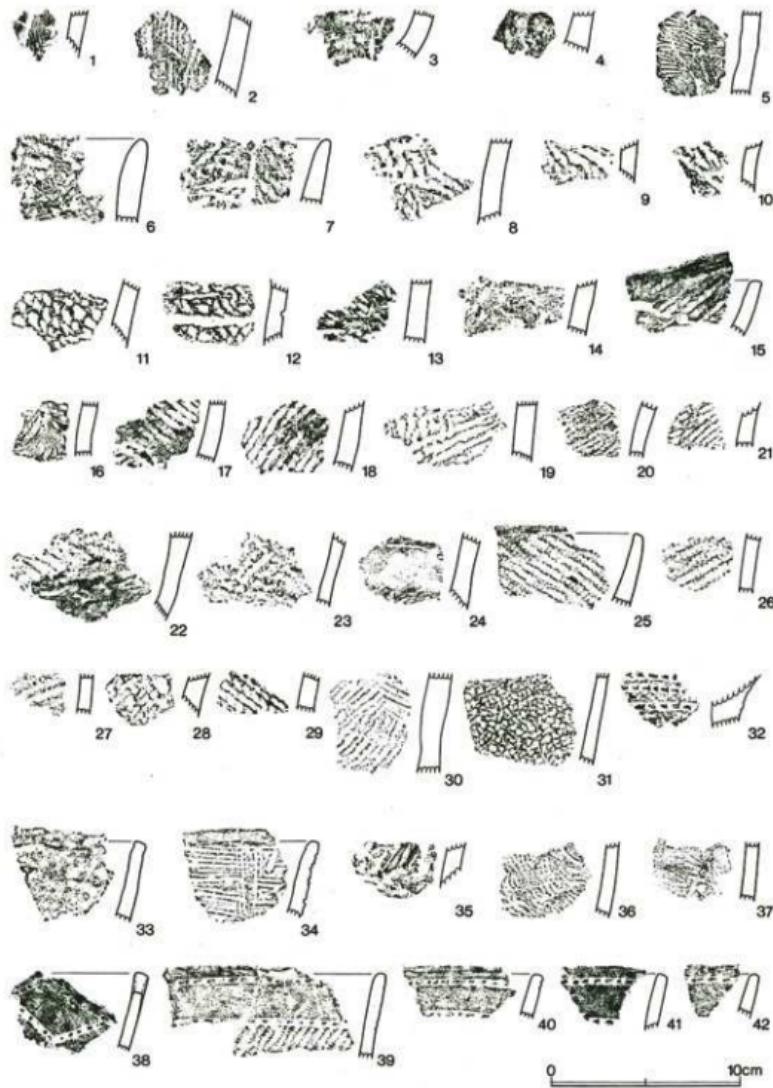
中原後遺跡では、総数251点の縄文土器片が出土している。このうち、文様や地文の判別可能なものを164点選んで観察表にまとめた。

尚、備考欄には、遺物の出土箇所を破片別に記した。

表2 中原後縄文土器(第16~20図)観察表

図版No	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第16図-1	深鉢の脚部破片 燐り糸を縦位に施している 燃り糸はR	胎土粒子は密 白色の砂粒を多く含む 焼成は良好 色調は暗赤褐色	溝-2、No.6
第16図-2	深鉢の脚部破片 表裏面に貝殻条痕が施されている	胎土粒子は粗 繊維を含む 白色砂粒をわずかに含む 焼成は悪く もろい 色調は明褐色	12 D 2 ローム直上
第16図-3・4	深鉢の底部に近い部分 表面に貝殻条痕が施されている この2片は同一個体と思われる	胎土・焼成は同上 色調は明赤褐色	3…11 E 6 4…13 E 1
第16図-5	深鉢の脚部破片 貝殻条痕が横方向に施されている 一回ごとの単位は小さい	胎土粒子は密 白色の砂粒が多く混入する 焼成は良好 色調は暗赤褐色	20 D 5
第16図-6・7	深鉢の口縁部破片。無節の縄文が回転している 6の縄はR 7の縄はLとRが交互に施され、縦位の羽状縄文になっている	胎土粒子は粗 繊維を含む 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は悪く もろい 色調は明灰黄褐色	6…22 C 8 7…22 C 9+ 22 C 10
第16図-8-14	深鉢の脚部破片 無節の縄文が回転している 8-13の縄はR 11は、拓本では単節のように見えるが、土器の観察によれば無節である 14の縄はL 12には、縄文の上から縄の先端らしきものを用いて、沈線が施されて	胎土・焼成は同上 色調は9を除いて同上 9はやや赤みがつよい	8…22 E 4 9…22 D 7 10…22 D 1 11…20 C 6 12…20 D 7

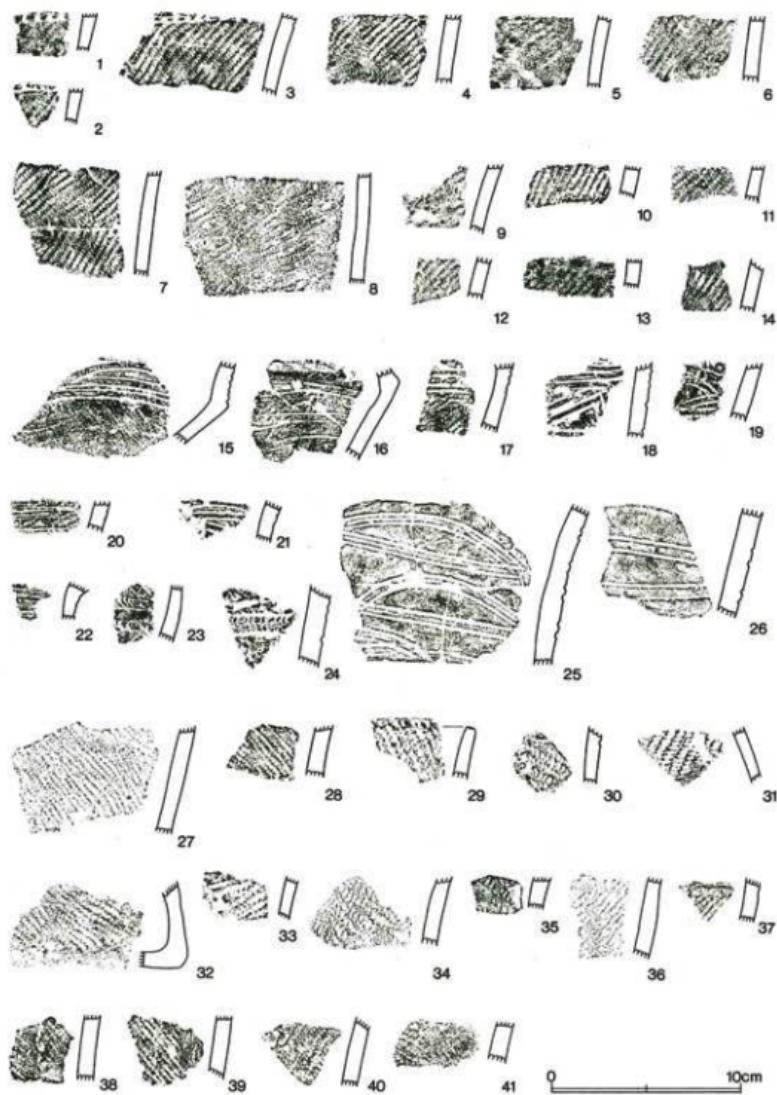
図版 No.	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
	いる		13…19E 7 14…22C 16
第16図-15	深鉢の口縁部破片 波状になるとと思われる無節の繩文が施されている 繩はL 内面はかなりていねいにナデられている	胎土粒子は密 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 色調は橙褐色	12F 2
第16図-16-18	深鉢の胴部破片 無節の繩文が施されている 16はLとRが交互に施されている継位の羽状繩文 17はR 内面はていねいにナデられている	胎土・焼成は同上 色調は明灰褐色	16…13E 2 17…12F 1 18…12F 2
第16図-19	深鉢の胴部破片 無節の繩文がL→Rの順に交互に施され、横位の羽状繩文になっている	胎土粒子は密 白色・黒色・褐色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 色調は黒褐色	15F 3
第16図-20・21	深鉢の胴部破片 無節の繩文しが施されている 20・21とも器壁はうすく、内面はていねいにナデられている	胎土粒子は密 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 ややもろい 色調は黒褐色	20…満1 No16 21…20C 1
第16図-22	深鉢の胴部破片 無節の繩文Rが施されている 器壁は厚く、つくりが粗雑	胎土粒子は粗 白色の砂粒・金雲母をわずかに含む 焼成はあまり良くない 色調は赤褐色	2号住-№55
第16図-23	深鉢の胴部破片 無節の繩文Lを継位及び横位に回転して、羽状繩文の効果を出している	胎土粒子は密 白色の砂粒を多く含む 焼成は良好 色調は赤褐色	22D 6
第16図-24	深鉢の胴部破片 無節の繩文しが施されている	胎土粒子は密 白色の砂粒・雲母を含む 焼成は良好 色調は赤褐色。	19B 7
第16図-25	深鉢の口縁部破片 口端部から、R Lの繩文が横位回転で施されている	胎土粒子は密 長石・雲母の粒子をわずかに含む 焼成は良好 色調は灰黄褐色	8 E 14
第16図-26	深鉢の胴部破片 L Rの繩文が施されている	胎土・焼成・色調は同上	28B 16
第16図-27	深鉢の胴部破片 L Rの繩文が施されている	胎土粒子は粗 長石・雲母の粒子をわずかに含む 焼成は悪く、もろい 色調は赤褐色	28D 2
第16図-28	深鉢の胴部破片 R Lの繩文が施されている	胎土粒子は密 長石・雲母の粒子をわずかに含む 焼成は良好 色調は灰黄褐色	16B 3



第16図 縄文土器拓影図(1)

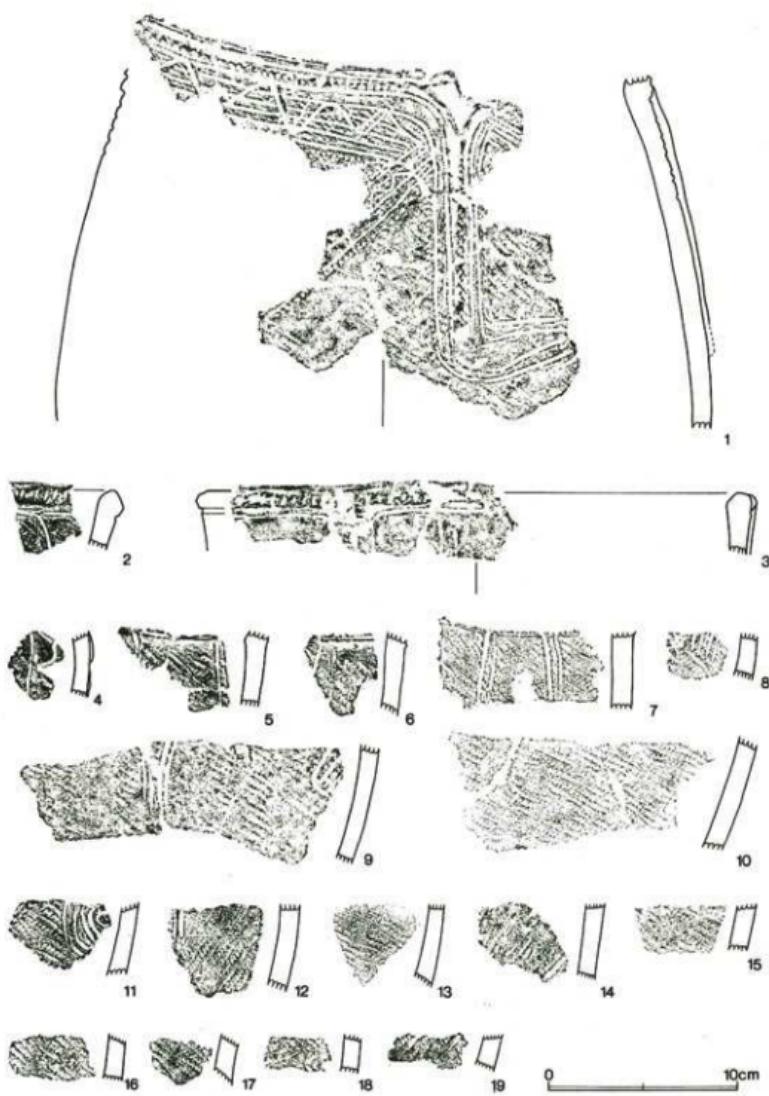
図版 No.	器 形・文 様 の 特 徴	胎 土・焼 成・色 調	備 考
第16図-29	深鉢の脚部破片 RL の縄文が施されている。	胎土・焼成は同上 色調は灰黒褐色	23E 5
第16図-30	深鉢の脚部破片 無筋の縄文をL→Rの順に交互に縱位回転し、羽状縄文が施されている	胎土粒子は密 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 色調は赤褐色	16-C No.1
第16図-31	深鉢の脚部破片 LRとRLを交互に横位回転した羽状縄文 LRの縄文にRLの縄の端をかぶせるようにして施文しているため、拓本での判別はむずかしい	胎土粒子は密 長石・雲母の粒子をわずかに含む 焼成は良好 色調は灰褐色	21D 3
第16図-32	深鉢の頸部破片 RLの縄文が地文として施され、半截竹管状のものによるC字状の連続刺突が、併行に施されている	胎土は同上 焼成は悪く、もろい 色調は暗灰褐色	Pit 126 No.1
第16図-33	深鉢の口縁部破片 無文	胎土粒子は粗 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は不良で、もろい 色調は黒褐色	36B 8
第16図-34	深鉢の口縁部破片 2本組の棒状工具を用いた口縁部から下重する沈線を2本併行して引いたのち、これを切るような形で、2本組の沈線が口縁部に併行して数条施されている	胎土・焼成は同上 色調は灰褐色	26F 3
第16図-35	深鉢の頸部破片 Rの燃り糸が2本組で押圧されている	胎土・焼成は同上 色調は黒褐色	13E 2
第16図-36・37	深鉢の脚部破片 貝殻の背部を押圧した文様が施されている	胎土粒子は粗 繊維を含む 白色の砂粒を多く含む 焼成は不良で、もろい 色調は黒褐色	36-21C 12 37-31B 10
第16図-38~42	深鉢の口縁部破片 38は波状口縁の一部 半截竹管によるC字形の連続刺突で口縁部文様帯を区画している 口縁部文様帯の下からは単節の縄文が施されているが、この縄文はこれに接する連続刺突文よりもさきに施されている 39の縄はLR	胎土粒子は密 白色・黒色の砂粒、長石・雲母などを含む 焼成は良好 色調は明るい橙褐色	38-14C 2 39-14C No.10 +No.12 40-8住No.6 41-14C 1 42-7住No.1
第17図-1~4	深鉢の頸部破片 口縁部を区画する連続刺突文をもち、口縁部文様帯の下からLRの縄文が施される 原体はかなりかたい繊維を使っていると思われる	胎土・焼成・色調は同上 3のみ 灰黄色	1-14C 2 2-9住No.1 3-14C 8 4-14C No.14
第17図-1	深鉢の脚部破片 すべてLRの縄文が施さ	胎土・焼成は同上 色調は11のみ	5-14C 5

図版 No	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
5・6 9~14	れているこれらはすべて同一個体と思われる	黒褐色 他は明るい橙褐色	6~14C No.6 9~9住No.2 10~12D 14 11~15C No.3 12~6住No.1 13~14B 14 14~14B 15
第17図-7	深鉢の脚部破片 LRの縦文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は黒褐色	14C No.2 + No.11 + No.17
第17図-8	深鉢の脚部破片 LRの縦文が施されている	胎土・焼成は同上。色調は黄褐色	13C 9
第17図-15	浅鉢の頸部破片 棘をもち、棘の部分まで外びらきに広がり、棘の上部は外反しながら立ち上がる この後に平行して、半截竹管により沈線がめぐらされ、その上部には弧線文が描かれる 棘の下部には、RL + 2Rの附加条縦文が施される	胎土粒子は密 白色・黒色の砂粒、長石・雲母・緑雲母片岩の粒子等を含む 色調は橙褐色	5住No.14
第17図-16 ・17・20	深鉢の脚部破片 16は頸部か 地文はLRの縦文で、その上に半截竹管を用いて平行線が施されている	胎土粒子は密 白色の砂粒、長石・雲母などを含む 焼成は良好 色調は灰黄褐色	16~14C No.23 + No.36 17~14D No.30 20~14C No.35
第17図-18	深鉢の頸部破片 半截竹管の平行線による区画内に、同じ竹管で三角形の文様が描かれている	胎土・焼成は同上 色調は明るい橙褐色	5住No.19
第17図-19 ・21・22	深鉢の頸部破片 19・22はLR、21はRLの地文をもち、半截竹管で平行線や弧線が描かれている	胎土粒子は密 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 色調は灰黄褐色	19~14C No.40 21~3住No.5 22~14C No.41
第17図-23	深鉢の脚部破片 半截竹管による平行沈線の中に、C字形の連続爪形文に入る	胎土・焼成は同上 色調は赤褐色	15C No.14
第17図-24	深鉢の脚部破片 半截竹管による平行沈線の中に、C字形の連続爪形文に入る	胎土粒子は粗 白色・黒色の砂粒、長石・雲母などを多く含む 色調は橙褐色	29土壤No.2
第17図- 25・26	深鉢の頸部破片 半截竹管により弧線が描かれる	胎土粒子密 白色・黒色の砂粒、長石・雲母・緑雲母片岩などを含む 色調は橙褐色で一部黒色。	25~14C 12 + 14C No.43 + 15C No.5 + No.6 26~14C No.44



第17図 條文土器拓影図(2)

図版No	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第17図-27 ・28・32	27・28は、深鉢の脇部破片 32は底部破片 R Lの繩文が全体に施されている	胎土粒子密 白色の砂粒 雲母を わずかに含む 焼成は良好 色調 は、黄褐色	27…5住No.6 28…8E14 32…5住No10
第17図-29	深鉢の口縁部破片 口唇部には、棒状工具に よるスリットが入る R Lの繩文が施される 内面は ていねいに磨かれている	胎土粒子は密 白色の砂粒 雲母 などを含む 焼成は良好 色調は 赤褐色	5F4
第17図-30	深鉢の頸部破片 地文はR Lの繩文 その上 に半截竹管で文様が描かれる	胎土・焼成・色調は同上	19B12
第17図- 31・33	深鉢の脇部破片 L R の繩文が施されて いる	胎土粒子は密 白色の砂粒 長石 などを含む 焼成は良好 色調は 明灰褐色	31…10F15 33…11F6
第17図- 34・35	深鉢の脇部破片 R L の繩文が施されて いる 34・35は 同一個体。	胎土粒子は密 白色の砂粒 雲母 をわずかに含む 焼成は良好 色 調は黒褐色	34…5住No.23 35…13E2
第17図- 36・37	深鉢の頸部破片 L R の繩文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は暗赤褐色	36…5住No.12 37…3住No.3
第17図-38	深鉢の脇部破片 L R の繩を左こま結びにし て結節をつくり、これを縱位に回転したもの	胎土粒子は密 白色の砂粒 長石・ 雲母などを多量に含む 色調は灰 褐色	13D16
第17図-39	同上	胎土粒子は粗 白色の砂粒 長石・ 雲母などを多量に含む 色調は赤 褐色	12F2
第17図-40	深鉢の脇部破片 L R の繩文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は灰褐色	3住No.7
第17図-41	深鉢の脇部破片 R L の繩文が施されている。	胎土・焼成・色調は同上	14C No.38
第18図-1	深鉢の脇上半部破片 脇中央部が最も膨ら み、口縁に向ってやや細くなり、口縁部は自 然に立ちあがると思われる 口縁に沿って沈 線がめぐり、その沈線にそって隆帯がつけら れる この隆帯は2方向からあります、下垂 して脇部中央で“し”の字状にまるる 隆帯 の口縁部と平行する部分には、細い竹管状の もので円形の刺突文がつけられ、下垂した部 分には繩文 (R L) が施されている この隆 帯がはりつけられる前の段階で R L の繩文が 器面全体に施されている この地文の上に隆	胎土粒子は密 白色の砂粒 長石・ 石英・雲母などの比較的大つぶの ものが多量に含まれている 色調 は暗褐色	14D No.6 + No.7 + No.14 + No.20 + 14D 2 + 14D 6 + 14D 10

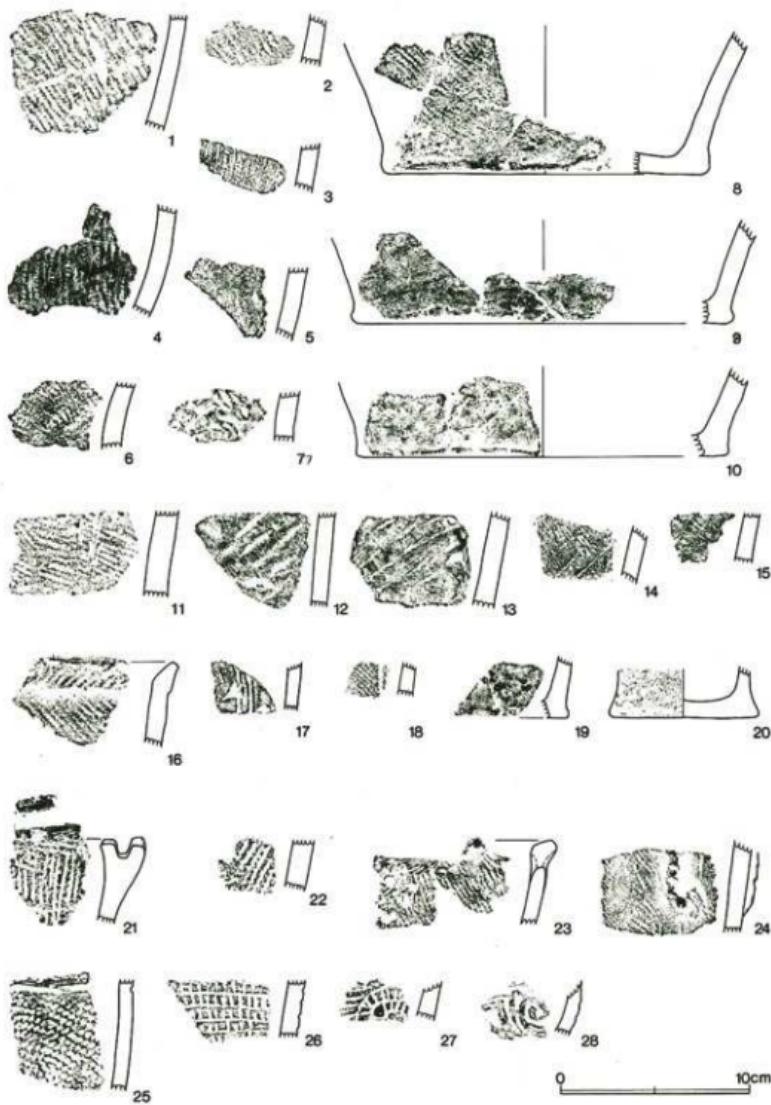


第18図 繩文土器拓影図(3)

図版No.	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
	帯にそって沈線が2本描かれ、さらに口縁に平行な沈線が4本ひかれ、その上に鋸歯状の沈線が描かれる。又、4本の平行沈線は斜め下方にも描かれ、これらの沈線にそって小さな三角形の刺突が施される。尚、隆帯の両側の沈線に沿った刺突は、下垂している部分までしか施されていない。		
第18図-1 2・3	深鉢の口縁部破片 3は推定口径約27.0cm 18-1と同時期のものと思われる やや外反した口端部には棒状工具によるスリットがあり、その一部からは隆帯が下垂する 器面にはRLの縄文が一面につけられ、その上に隆帯に沿って、又は独自に沈線が施される	胎土・焼成・色調は同上	2…14D No36 3…14D No45 +14D 2 +14D 3
第18図-4	深鉢の胴部 上記の土器と同じ隆帯の一部 隆帯の下にはRLの縄文が施されており、隆帯に沿って沈線が一本めぐる	同上	14D 2
第18図-5~7	深鉢の頭部破片 RLの縄文の上に口縁部を区画する沈線がめぐり、ここから下垂する沈線がほぼ等間隔で2本づつ施されている	同上	5…14D No15 14D 2 6…5住No13 7…Pit3No1 No.2
第18図-8~13 ・15~18	深鉢の胴部破片 すべて地文はRLの縄文で、沈線や刺突によって文様が描かれている	同上	8…14D No26 9…14C No29 14D No.9 Pit3No.3 10…14C No28 No34 11…14D No23 12…14D No37 13…14D No46 15…14C No34 16…14C 6 17…14D 2 18…2住No53
第18図-14~19	深鉢の胴部破片 LRの縄文が施されている	同上	14…15D 8 19…15C 7
第19図-1~4 ・6	深鉢の胴部破片 RLの縄文が施されている 3・4は附加条のように見えるが、良く観察すると単節の縄文である	同上	1…14D No19 No48 15C No.7

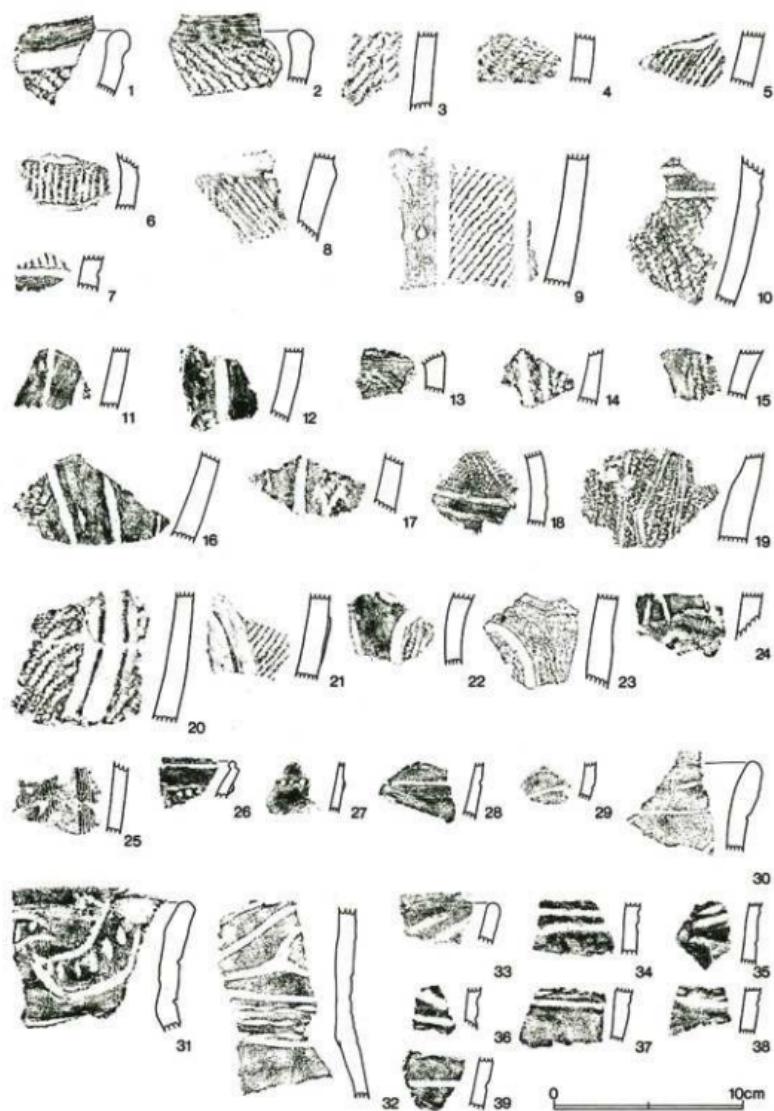
図版 No	文様・器形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
			No15 2…15C No.8 3…14C No.34 4…14D 2 6…14C 6
第19図-5	深鉢の胸部破片 LRの縄文が施されている	同上	14C No.39
第19図-7	深鉢の胸部破片 底部に近い部分 RLの縄文が施されている	同上	15C No.1
第19図-8~10	深鉢の底部破片 推定径は、8が17.8cm、9が20.4cm、10が20.0cm RLの縄文が施されている	同上	8…15C No.9 No.10 15D No.2 9…14D No.10 15C No.4 No.16 10…14C No.24 No.49
第19図-11	深鉢の胸部破片 かなり厚手 LRの縄文を縱方向に回転している	胎土粒子は密 白色の砂粒、雲母を多く含む 焼成は良好 色調は黒褐色	22F 8
第19図-12~15	深鉢の胸部破片 比較的厚手 RLの縄文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は12のみ 明褐色 他は黒褐色	12…13C 11 13…13C 11 14…14C No.46 15…14C 5
第19図-16	深鉢の口縁部破片 口端部はやや外反ぎみで、頸部との境い目に段をもつ この段を境にして口縁部はLR、頸部以下はRLの縄文が施され、羽状縄文の効果を出している	胎土粒子は密 白色の砂粒、長石、雲母などを多く含む 焼成は良好 色調は灰褐色	4住No.45 (土壌内)
第19図-17	深鉢の胸部破片 RLの縄文が施され、その上に沈線がつけられる 沈線上のキズは故意につけられたものか	胎土粒子は密 雲母・長石を多量に含む 焼成は良好 色調は暗赤褐色	14B 14
第19図-18	深鉢の胸部破片 RLの縄を縱方向に押圧したのち、同じ縄を回転してRLの縄文を施している	胎土粒子は密 長石をわずかに含む 焼成は良好 色調は灰黄褐色	48土壤No.2
第19図-19+20	深鉢の底部破片	胎土粒子は密 白色の砂粒、雲母などを多く含む 焼成は良好 色調は灰褐色	19…13B 12 20…表採

図版No.	文様・器形の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第19図-21	深鉢の口縁部破片 肥厚した口唇部の中央に深い溝状の沈線がめぐる 波状口縁か把手に近い部分と思われる 口端部ではRの燃り糸が横方向に回転されており、それより下はRの燃り糸が縱方向で回転されている	胎土粒子は密 長石・雲母などを多く含む 焼成は良いほうであるがもろい 色調は明褐色	22B12
第19図-22	深鉢の胴部破片 Rの燃り糸が縱方向で回転されている	同上	23B14
第19図-23	深鉢の口縁部破片 小さな三角形の突起をもつ 口端部にはLR、他の部分にはRLの綱が施されている	胎土は同上 焼成は良好 色調は暗褐色	3住No.2 No.6
第19図-24	深鉢の胴部破片 地文はRLの綱文 隆帯をはりつけたときに一部の綱文がつぶされている 隆帯の上には刻みが入り“し”的字状にまがった隆帯の先端は扇状にひらく この扇状の部分にも細かい刺突がみられる	胎土・焼成は同上 色調は黒褐色	
第19図-25	深鉢の胴部破片か 複節の綱文RLRが施されている 沈線とナデは綱文のあとからつけられたと思われる	胎土・焼成は同上 色調は赤褐色	17E14
第19図- 26・27	深鉢の頸部破片 横方向で部分的にカーブをもつ平行線を数条引いたのち、平行線の間に短い沈線を不規則に入れている	胎土粒子は密 白色の砂粒、長石・網雲母片岩などを多く含む 焼成は良好 色調は明るい赤褐色	26…16D14 27…16D No12
第19図-28	深鉢の頸部破片 沈線で鶴巻文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は明褐色	満2No.4
第20図- 1・2	深鉢の口縁部破片 1はRLの綱文を施してから口端部のすぐ下をナデしている 2は口端部までRLの綱文が施されている	胎土粒子は密 長石・雲母をわずかに含む 焼成は良好 色調は黄褐色	1…37土壤 No.1 2…16E8
第20図- 3・4	深鉢の胴部破片 LRの綱文が施されている	胎土・焼成は同上 色調は黒褐色	3…39B1 4…26F1
第20図-5	深鉢の胴部破片 Rの燃糸を縱方向に回転したのち沈線を入れている	胎土粒子は密 白色と褐色の砂粒を多く含む 焼成は良好 色調は暗褐色	20D15
第20図- 6・7	深鉢の口縁部の一部 Rの燃糸を縱方向に回転したのち、沈線で文様を区画している	胎土粒子は密 白色の砂粒をわずかに含む 焼成は良好 色調は黄褐色	6…22E3 7…22E10
第20図-8	深鉢の胴部破片 RLの綱文を施したのち、	胎土・焼成は同上 色調は明褐色	



第19図 繩文土器拓影図(4)

図版No	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
	ナデにより沈線を施している		
第20図-9	深鉢の胸部破片 無節のしの繩文を施したのち、けん重文の部分を磨り消している	胎土・焼成は同上 色調は黄褐色	Pit158No.1
第20図-10	深鉢の胸部破片 R Lの繩文を施したのち、平行な沈線を入れ、その間をナデしている	胎土・焼成は同上 色調は橙褐色	14D No.4
第20図-11-14	深鉢の胸部破片 単節の繩文を施したのち、沈線やナデで区画をしたもの 11-13はR L 14はL R	胎土・焼成・色調とも同上	11…14 D 7 12…36 A 16 13…11 D 15 14…16 D No.4
第20図-15-18	深鉢の胸部破片 磨り消しで区画したあとに L Rの繩文を施している	胎土・焼成は同上 色調は黄褐色	15…36 A 13 16…48 土壇 No.4 17… “ No.5 18…14 D No.5
第20図-19	深鉢の胸部破片 底部に近い L Rの繩文に半截竹管を用いて浅い沈線をつけている	胎土粒子は粗 白色の砂粒、雲母を含む 焼成は不良 色調は橙褐色	22B 2
第20図-20	深鉢の胸部破片 ナデによる微隆起で文様区画をしたのち、L Rの繩文を施している	胎土粒子は密 白色砂粒、雲母をわずかに含む 焼成は良好 色調は黄褐色	Pit184No.4 No.5
第20図-21	深鉢の胸部破片 ナデによる微隆起で文様区画をしたのち、L Rの繩文を施している	胎土・焼成は同上 色調は明褐色	Pit 184No.2
第20図-22・23	深鉢の胸部破片 沈線で文様区画をし、繩文を施してから、磨り消しの部分を磨いている 22の繩はL R 23の繩はR L どちらも内面も良く磨かれている	胎土・焼成は同上 色調は22が赤褐色、23が灰黃褐色	22…2住No.31 23…Pit184 No.1
第20図-24	深鉢の胸部破片 沈線で区画された磨り消し文の一部 わずかに磨かれている	胎土・焼成は同上 色調は明褐色	14D 9
第20図-25	深鉢の胸部破片 クシ状の工具による数条の沈線が多少の間隔をおいて施されている	同上	25C 6
第20図-26・27	浅鉢の口縁部の破片 口端部及び内面に、口唇部と併行した沈線が入る さらに口唇部と併行に隆帯がめぐり、隆帯上にはスリットが入る 27は口唇部がこわれているが、同様のものと思われる	胎土粒子は密 雲母と長石をわずかに含む 焼成は良好 色調は暗褐色	26…14 E 15 27…25 E 16



第20図 縄文土器拓影(5)

図版 No	器形・文様の特徴	胎土・焼成・色調	備考
第20図-28・29	浅鉢の脇部破片か 細くシャープな沈線が入る 28は丹塗りの痕跡有	胎土・焼成は同上 色調は暗褐色	28…12E 14 29…14D No27
第20図-30	深鉢の口縁部破片 脣部に沈線が一条めぐり、口唇部とこの沈線の中間に烈点文の一種とみられる文様がつけられている	胎土・焼成は同上 色調は黒褐色	II区表探
第20図-31	深鉢の口縁部破片 沈線で区画された文様の中に烈点文が施されている 土器のつくりはあらく、輪積度をのこす	胎土粒子は粗。長石・雲母などを多く含む 烧成は良好 色調は灰黄褐色	24C 11
第20図-32	深鉢の頸部破片 頚部上半に三叉状入組文がつけられ、頸部と脇部の境い目には、平行沈線で区画されたなかに烈点文が施されている 器面は良く調整されている	胎土・焼成は同上 色調は暗黄褐色	Pit 3 No. 4 + 14D 3
第20図-33-39	深鉢の口縁部及び頸部の破片 33-36は三叉状入組文の一部と思われ、37・38は烈点文の一部と思われる	胎土・焼成は同上 色調は明るい黄褐色	33…11住No 1 34…14D 8 35…14E 3 36…14D 7 37…14E 1 38…14E 6 39…14E 7

(小野美代子)

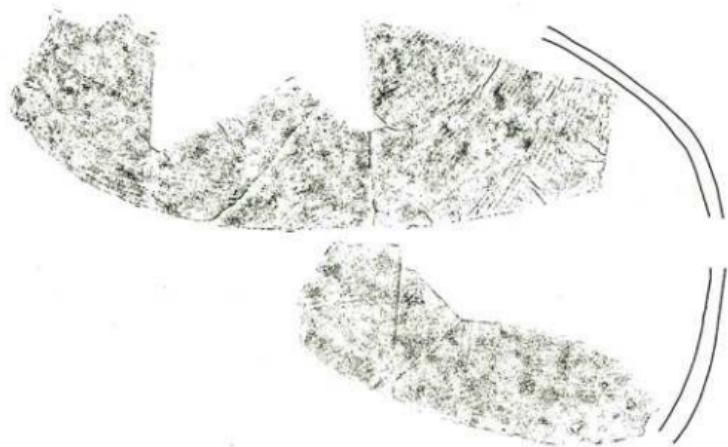
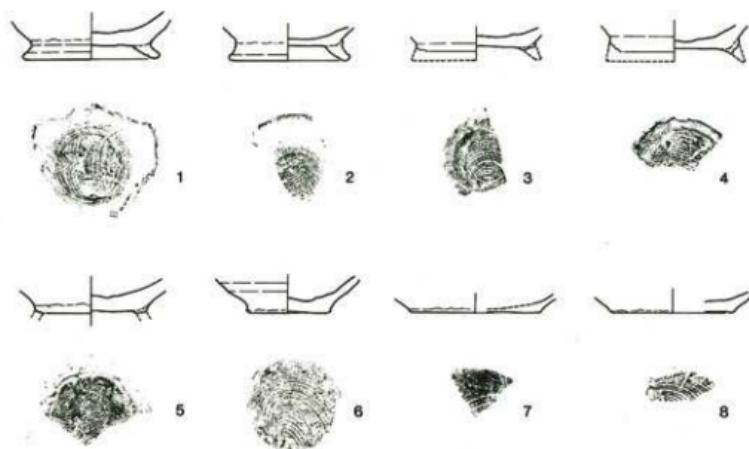
(2) 奈良・平安時代

A 住居跡

奈良・平安時代の住居跡はII区中央に2軒、北側に1軒検出された。II区中央西側は黒色土の堆積が厚く、これを除去してローム層上面まで下げる作業中に、第1号住居跡炉址断面が露出したため確認できたものである。

1号住居跡（第23図、図版3）

- II区19・20-C・D 4.0m×不明 (3.3m以上) の方形 壁高15cm
- ほぼ平らでかなり軟弱な床面 柱穴4 P₁-20cm P₂-14cm P₃-18cm P₄-30cm 炉址2
- 2号住居跡を切る
- 土師高台付坏、土師坏、塊片、須恵器片等
- 南辺に柱穴が3つ並ぶ 中央に径0.6mの円形で深さ10cmの炉址、北側に径0.9m×不明 (0.6m以上) のだ円形で深さ25cmの炉址(窓か)



0 10cm

9

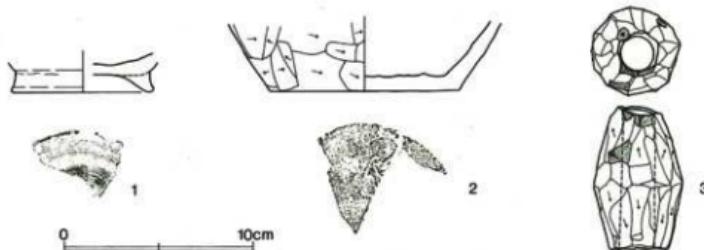
第21图 1号住居跡出土物

表3 1号住居跡出土遺物(第21回)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	土師環	底径 7.0	厚さ 0.7~0.9cm 高台付 ゆるやかな立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整 内面みがき	高台部より体部へ粘土のかぶさり 白色微細粒多量 乳白色粒・黒色砂粒を含む 7.5YR 4/6に近い褐色
2	土師環	底径 6.0	厚さ 0.3~0.4cm 高台付 外反気味の立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整	高台部より体部へ粘土のかぶさり 乳白色粒・白色微細粒を含む 5YR 4/6橙色
3	土師環	底径推定 6.6	厚さ 0.5cm 高台付 急な 立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整	赤褐色の径0.2~0.4cmの硬い粒子・白色微細粒・黒色砂粒を含む 5YR 4/6明赤褐色
4	土師環	底径推定 7.3	厚さ 0.4~0.6cm 高台付 外反気味の立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整	黒色砂粒・白色微細粒・赤褐色微細粒を含む 7.5YR 4/6~5/6橙色
5	土師環	底径推定 6.7	厚さ 0.7~0.9cm 高台付 ゆるやかな立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整	黒色砂粒・白色微細粒・赤褐色粒を含む 7.5YR 4/6橙色
6	土師環	底径 4.2	厚さ 0.4~0.7cm 中高の底 部からゆるやかな立上り	ろくろ水挽き整形 底部右 回転糸切り	乳白色粒・白色微細粒・黒色砂粒・赤褐色粒を含む 7.5YR 4/6橙色
7	土師環	底径推定 6.8	厚さ 0.3cm 外反気味の立 上り	ろくろ整形 底部回転糸切り後、縁辺部範囲調整 内面 みがき・黒色・一部剥離	白色微細粒・乳白色粒を含む 7.5YR 4/6に近い褐色
8	土師環	底径推定 6.4	厚さ 0.3~0.6cm 外反気味 の立上り	ろくろ整形 底部回転糸切り	黒色砂粒・褐色粒・白色微細粒を含む 7.5YR 4/6に近い橙色
9	須恵器		厚さ 0.8~1.0cm	外面は軽いタタキ目 内面 はおさえの痕わずかに残る	肩部~胴部にかけての破片

2号住居跡（第23図、図版4）

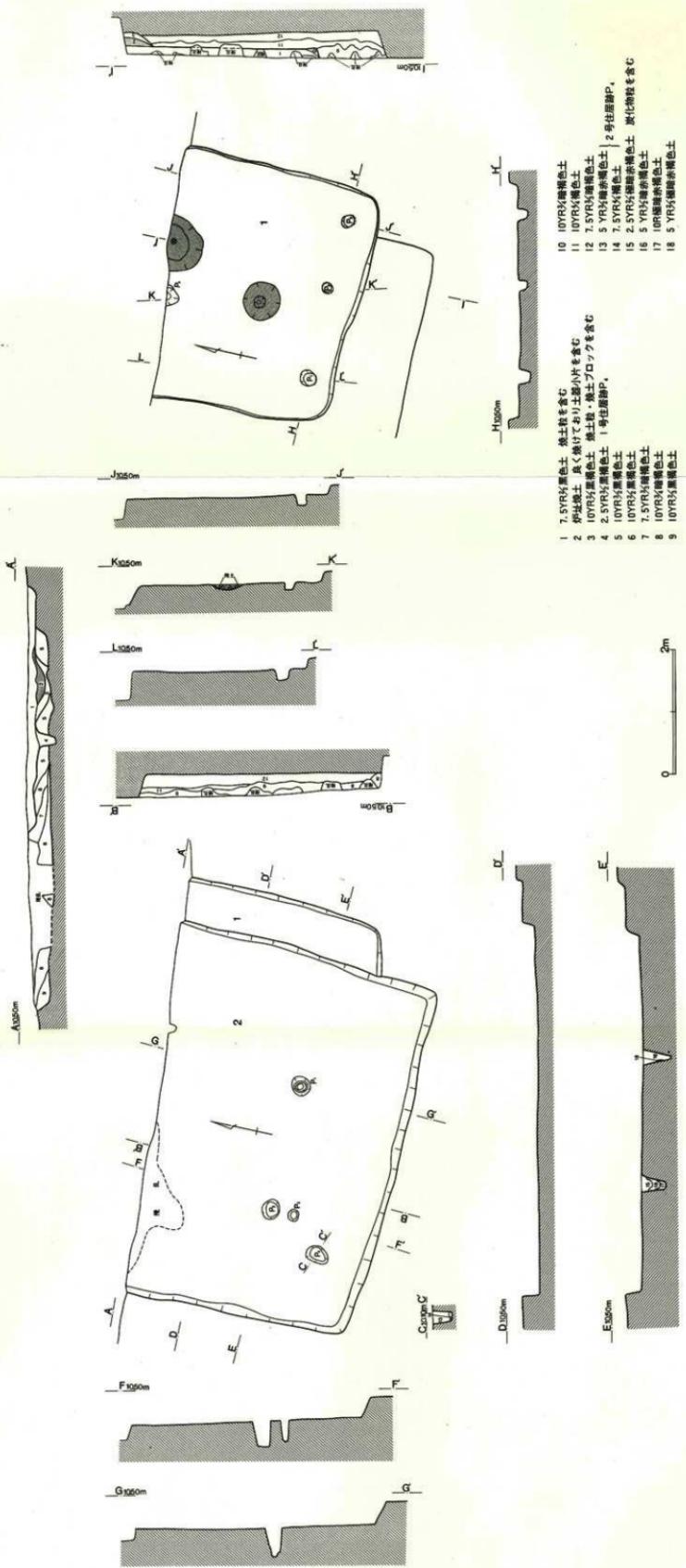
- 1 II区19・20-C・D 6.0m×不明(4.2m以上)の方形 壁高45cm
- 2 ほぼ平らでかなり軟弱な床面 柱穴4 P₁-38cm P₂-41cm P₃-33cm P₄-31cm 炉址検出されず
- 3 1号住居跡に切られる
- 4 土師高台付坏、土師甕、土鍤等



第22図 2号住居跡出土遺物

表4 2号住居跡出土遺物（第22図）観察表

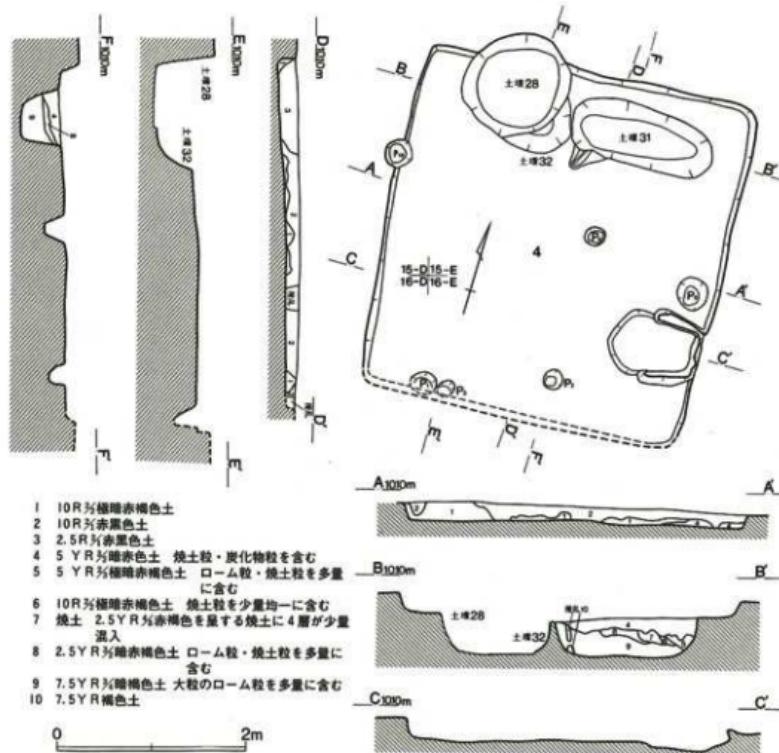
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	土師坏	底径推定 7.2	厚さ 0.5~0.6cm 高台付 急な立上り	ろくろ整形 高台貼付ろく ろ調整	高台部より体部へ粘土のか ぶさり 白色微細粒・乳白色 粒を含む 7.5YR 4/6にぶ い褐色
2	土師甕	底径推定 10.0	厚さ 0.6~0.9cm 平底よ り急な立上り	体部・底部とも外面はてい ねいな箝削り 体部内面箘 ナデ 底部内面荒い箘削り	白色微細粒・赤褐色・黒 色砂粒含む 7.5YR 4/6にぶ い褐色
3	土鍤	最大径 4.7 長さ 7.9	厚さ0.3~1.5cm 縦長の筋 鍤型 中心に径 1.8cmの貫 通孔	棒に粘土を巻きつけ、中央 から端部に向け箘削り 端 部も箘による切断	棱近くに中心に向い断面三 角形の棒状具による深さ1.7 cmの刺突 重さ 128g 白 色微細粒・赤褐色粒を含む 2.5YR 4/6にぶい赤褐色



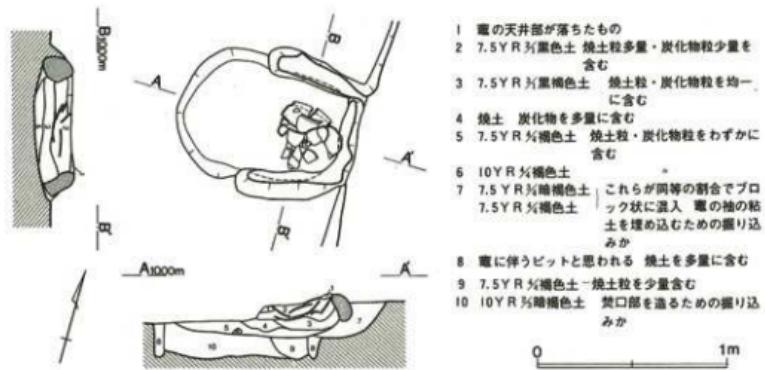
第2回図 1・2号柱同様

第4号住居跡 (第24図、図版5)

- 1 II区15・16-E 3.7×3.7mの正方形 壁高20cm
- 2 ほぼ平らで軟弱な床面 柱穴5 P₁-23cm P₂-16cm P₃-21cm P₄-21cm P₅-19cm 窯は東壁南寄りにある
- 3 28号土壌、19号ピットに切られる
第24図に31・32号土壌があるが、床面より検出されており、住居跡に伴う掘りこみである可能性も考えられる
- 4 土師坏片、窯より国分期のものと思われる甕がほぼ完形で出土 (第26図-4、図版15)
- 5 窯は、両袖部がよく焼けており天井部は甕とともに落ちこんだものと考えられる
南壁は、長芋鉢により攪乱されている



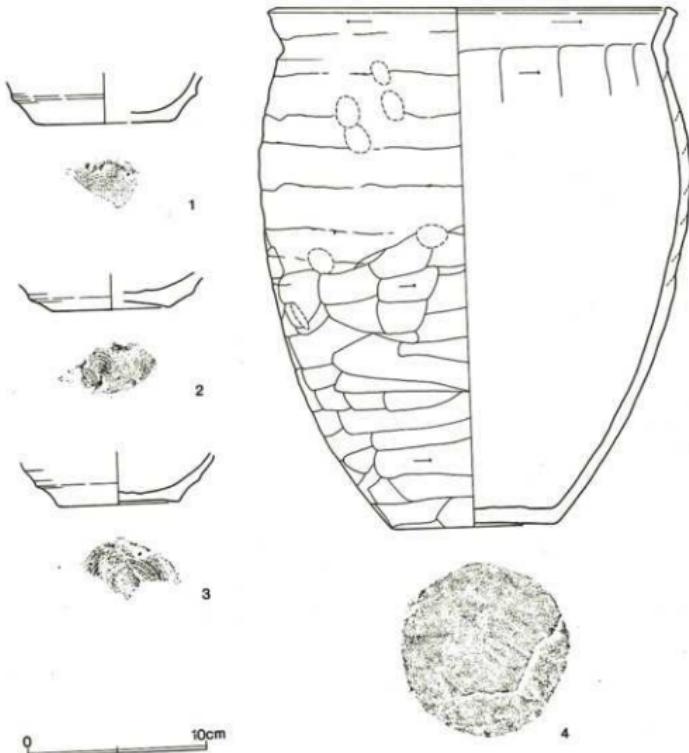
第24図 4号住居跡



第25図 4号住居跡図

表5 第4号住居跡出土遺物（第26図）観察表 第26表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	微手法の特徴	備考
1	土師壺	底径推定 7.8	厚さ0.4~0.6cm 外反気味 の急な立上り	ろくろ水挽き整形 底部回転糸切り	底部より体部へかかる部分に、とり上げ時の指痕3箇所 黒色砂粒・乳白色粒・白色微細粒・赤褐色粒を含む 5YR 5%橙色
2	土師壺	底径推定 6.6	厚さ 0.5~0.9cm 凹面気味 の底部よりゆるやかな立上り	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	白色微細粒・黒色砂粒・赤褐色粒を含む 5YR 5%橙色
3	土師壺	底径推定 6.6	厚さ0.3~0.5cm 凹面気味 の底部より外反して急に立上り、ゆるやかに内湾する	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	底部より体部へかかる部分に、とり上げ時の籠具痕1箇所 黒色砂粒・乳白色粒・白色微細粒を含む
4	土師甕	口径 23.2 胴径 24.5 底径 9.4	厚さ0.5~1.0cm 凹面気味 の底部より急に立上り、胴上半よりゆるやかに内傾して、くの字の頸部をもって外傾 口縁は内・外とも棱をもち直下がややくびれる	底部は静止糸切り後、縁辺部を範調整 胴下半は横向き削り 胴上半は横ナデ、指痕・粘土接合痕を残す 頸部-口縁部は内外面とも横ナデ 内面はていねいな範ナデ	黒色砂粒・乳白色石粒・透明白石粒（石英か）を含む



第26図 4号住居跡出土遺物

B 土壌

奈良・平安時代の土壤は、II区の北側4号住居跡の付近と、南側1・2号住居跡の付近に分布している。

6号土壤 (第27図)

- 1 II区15-B 程1.25×1.1mの楕円形 深さ45cm
- 2 やや凹状で非常に硬い底面 (ハードローム中)
- 3 6号住居跡を切る

4 灰釉壺片、土師坏片

5 地山を直に掘りこんであり、短時間に埋まったものと思われ、土層は1層のみ観察できる

7号土壤 (第27図)

1 II区14-D 径1.2×0.95mの楕円形 深さ45cm

2 やや西に傾きよくしまった底面

4 繩文晚期土器片 2

8号土壤 (第27図、図版10)

1 II区15-C 径1.1×1.1mの円形 深さ80cm

2 ほぼ平らで非常に硬い底面 (ハードローム中)

3 10号住居跡を切る

4 高台付壺底部、墨書き土器(土師坏片)、土師碗口縁部、灰釉陶器片 (6月土壤出土遺物とほぼ同時期のものと思われる)、土師坏片等

5 地山を直に掘りこんである 短時間に埋まったものと考えられる

9号土壤 (第27図)

1 II区17・18-D 径0.85×0.75mの楕円形 深さ35cm

4 土師坏片 2

10号土壤 (第27図)

1 II区21-D 径1.3×1.1mの楕円形 深さ75cm

2 ほぼ平らでしまりのある底面

4 土師坏片等

5 地山を直に掘りこんでいる

13号土壤 (第27図)

1 II区21-B 径1.0×1.0mの円形 深さ60cm

2 ほぼ平らでしまりのある底面

4 土師壺片等

5 地山を直に掘りこんでいる

14号土壤 (第28図)

1 II区20-B 径1.1×0.95mの楕円形 深さ40cm

2 ほぼ平らでしまりのある底面

15号土壤 (第28図)

1 II区21・22-A 2.1×0.85mの長楕円形 深さ20cm

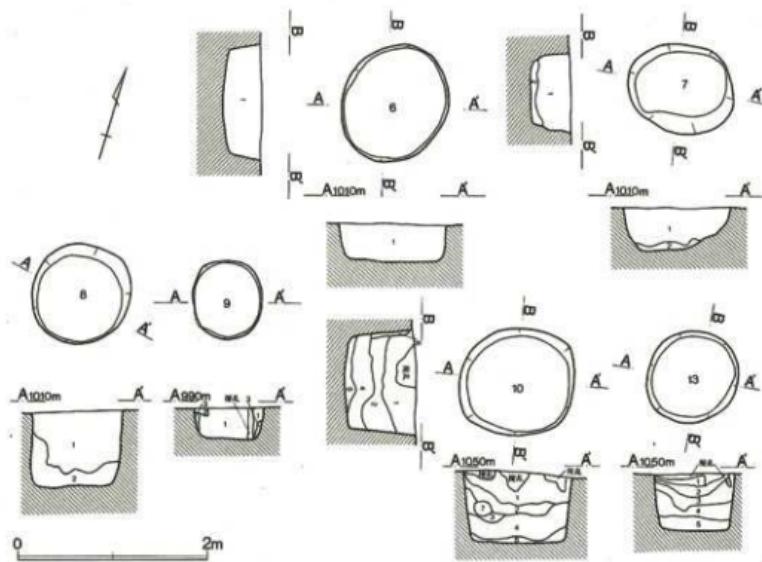
3 16号土壤に切られる

4 灰釉陶器片 1

5 時期不明であるが16号土壤との関連でとりあげた

16号土壤 (第28図)

1 II区21・22-A 1.1×1.1mの円形 深さ45cm



6号土壤

1 7.5Y R 5% 黑褐色土 ローム粒が均等に混ざる
しまりよし

1 7.5Y R 5% 暗褐色土 粘性強くしまりよし

2 10Y R 5% 暗褐色土 しまりよし

8号土壤

1 10Y R 5% 黑色土 ローム粒多量に含む 径0.5
~1cm程度の炭化物を含む
粘性・しまりあり

2 10Y R 5% 黑褐色土 ローム粒多量に含む
9号土壤

1 7.5Y R 5% 黑褐色土 ローム粒多量に含む 粘
性・しまりあり

2 10Y R 5% 黑褐色土 粘性強く、硬い

3 10Y R 5% 黑褐色土 ローム混入 粘土粒を含
む

10号土壤

1 10Y R 5% 黑褐色土 ローム粒を含む

2 7.5Y R 5% 黑色土 ローム粒・炭化物粒を含
む

3 10Y R 5% 黑色土 炭化物粒を含む

4 2.5Y R 5% 黑褐色土 ローム粒多量に含む

5 10Y R 5% 黑色土

6 7.5Y R 5% 黑褐色土

7 10Y R 5% 黑褐色土 ロームブロックを含む

13号土壤

1 7.5Y R 5% 黑色土 しまりなし

2 10Y R 5% 黑褐色土

3 10Y R 5% 暗褐色土 ローム粒多量に含む

4 10Y R 5% 黑褐色土 炭化物粒多量に含む

5 10Y R 5% 黑褐色土 炭化物粒少量含む

第27図 奈良・平安時代土壤(1)

2 ほぼ平らでしまりのよい底面

3 15号土壤を切る

4 土師甕片 1

5 地山を直に掘りこんでいる

21号土壤 (第28図)

1 II区24-B 径0.9×0.9mの円形 深さ40cm

2 ほぼ平らでしまりのよい底面

4 土師甕片 1

22号土壤 (第28図)

1 II区25-A・B 径1.15×1.0mの楕円形 深さ55cm

2 ほぼ平らでしまりのよい底面

4 土師坏片 1

24号土壤 (第28図)

1 II区15-E 径1.0×0.8mの楕円形 深さ35cm

2 やや凹凸がありしまりのよい底面

4 土師坏片 2 土師甕片 1

25号土壤 (第29図)

1 II区15-D 径1.3×1.25mの円形 深さ70cm

2 ほぼ平らで非常に硬い底面

3 26号土壤と形態・覆土が同じことから、同時に造られたものと考えられる

4 土師坏片 6 土師甕片 3

5 覆土は1層で、短時間に埋まったものと思われる

26号土壤 (第29図)

1 II区15-D 径1.0×1.0mの円形 深さ65cm

2 ほぼ平らで非常に硬い底面

3 25号土壤参照

4 土師坏片、土師甕片等

5 覆土は1層で、短時間に埋まったものと思われる

27号土壤 (第28図、図版10)

1 II区16-D 1.15×1.1mの方向 深さ40cm

2 ほぼ平らでしまりのある底面

4 土師坏片

28号土壤 (第28図)

1 II区15-E 1.2×1.05mの楕円形 深さ65cm

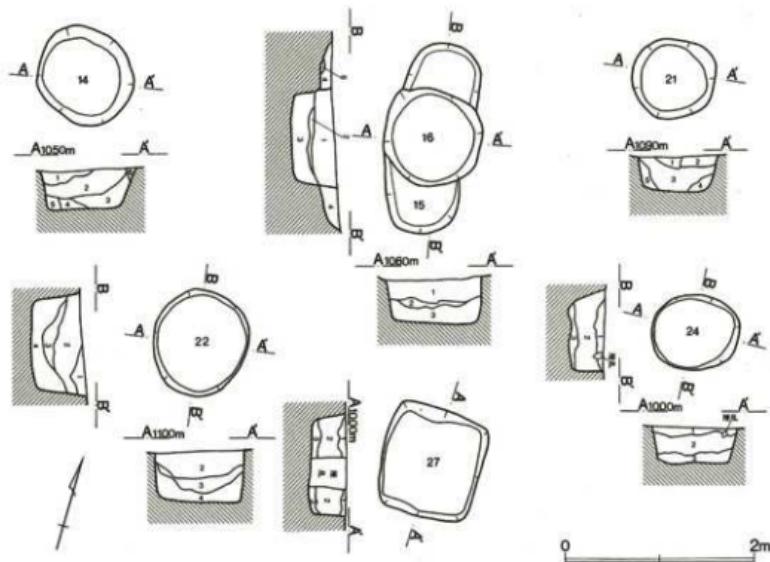
2 ほぼ平らで非常に硬い底面

3 4号住居跡、32号土壤を切る

5 地山を直に掘り込んでいる

44号土壤 (第29図)

1 II区21-B 径0.9×0.9mの円形 深さ45cm



14号土壤

- 1 10Y R 5% 黒褐色土
 - 2 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物を多く含む
 - 3 10Y R 5% 暗褐色土
 - 4 10Y R 5% 黒褐色土
 - 5 10Y R 5% 暗褐色土 粘性・しまりあり
 - 6 10Y R 5% 暗褐色土
- 15・16号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 ロームブロックを含む
 - 3 10Y R 5% 黒褐色土
 - 4 10Y R 5% 黒褐色土
 - 5 10Y R 5% 暗褐色土
 - 6 10Y R 5% 黒褐色土 しまりよし
- 21号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土
 - 2 10Y R 5% 黒褐色土

3 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒を多く含む

- 4 10Y R 5% 暗褐色土
- 5 10Y R 5% 暗褐色土

22号土壤

- 1 10Y R 5% 黒褐色土
- 2 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒を少量含む
- 3 10Y R 5% 暗褐色土

24号土壤

- 1 2.5 Y R 5% 赤褐色土 炭化物粒子を含む
- 2 5 Y R 5% 暗赤褐色土 しまりよし
- 3 2.5 Y R 5% 暗赤褐色土 しまりよし

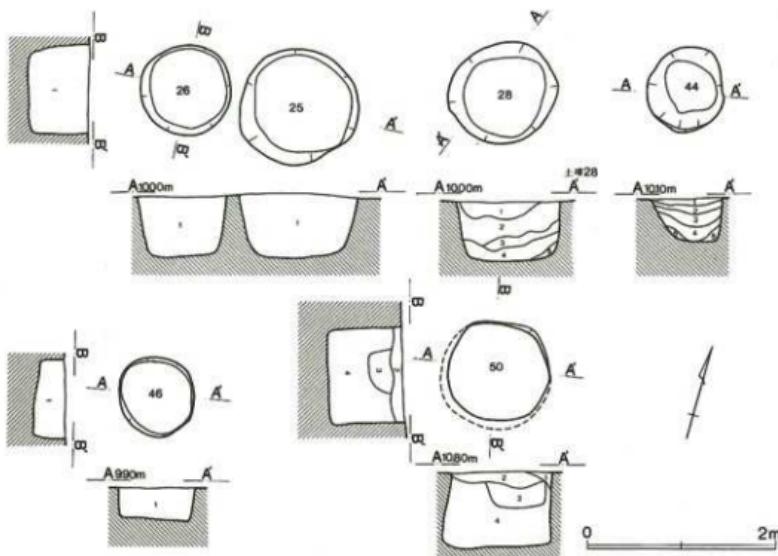
27号土壤

- 1 7.5 Y R 5% 黒褐色土 しまりよし
- 2 5 Y R 5% 黒褐色土 しまりよし
- 3 7.5 Y R 5% 暗褐色土 しまり極よし

第28図 奈良・平安時代土壤(2)

46号土壤(第29図)

- 1 II区13-E 径0.85×0.8mの円形 深さ35cm
- 2 やや傾斜をもち、しまりのよい底面



25号土壤

- 1 7.5Y R 5% 黒褐色土 炭化物の小片・焼土粒を含む
- 26号土壤
- 1 7.5Y R 5% 黒褐色土
- 28号土壤
- 1 10Y R 5% 黒褐色土
- 2 7.5Y R 5% 黒褐色土
- 3 7.5Y R 5% 黒褐色土 炭化物を含む
- 4 7.5Y R 5% 黒褐色土
- 5 10Y R 5% 褐色土

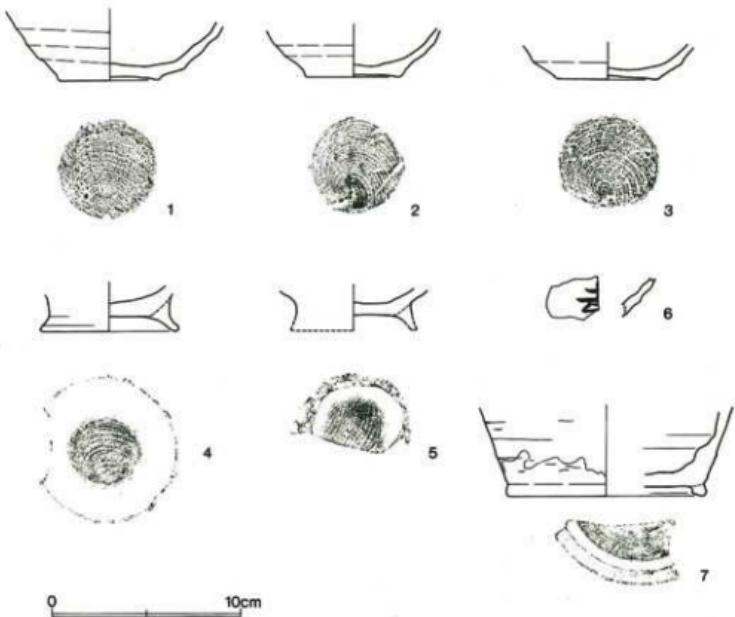
44号土壤

- 1 10Y R 5% 黒褐色土 炭化物を多く含む
 - 2 10Y R 5% 暗褐色土 炭化物を多く含む
 - 3 10Y R 5% 褐色土
 - 4 10Y R 5% 暗褐色土
 - 5 10Y R 5% 褐色土
- 46号土壤
- 1 10Y R 5% 暗赤褐色土
- 50号土壤
- 1 7.5Y R 5% 黒褐色土
 - 2 5Y R 5% 黒褐色土
 - 3 5Y R 5% 黒褐色土
 - 4 5Y R 5% 黒褐色土 炭化物粒を含む

第29図 奈良・平安時代土壤(3)

50号土壤 (第29図)

- 1 II区24-E 径1.1×1.1mの円形 深さ80cm
- 2 ほぼ平らで非常に硬い底面
- 4 土師壺片、土師椀片等 刀子・刺股状鉄製品(第31図)
- 5 底面からの立上りがやや内傾する部分がある



第30図 奈良・平安時代土壤出土遺物

表6 奈良・平安時代土壤出土遺物(第30図)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	土師環	底径 5.2	厚さ 0.4~0.7cm ひずみが大きい 凹面気味の底部より外反して立上り、ゆるやかに内湾する	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	黒色砂粒・乳白色石粒・赤褐色粒を含む 7.5YR 4/6 橙色 26号土壤
2	土師環	底径 5.0	厚さ 0.3~0.5cm 凹面気味の底部より外反して立上り、ゆるやかに内湾する	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	暗赤褐色粒・褐色粒・灰色石粒・白色微細粒を含む 7.5YR 4/6 にぶい橙色 10号土壤
3	土師環	底径 5.1	厚さ 0.3~0.5cm 凹面気味の底部より外反して立上る	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	白色微細粒・黒色砂粒を含む 7.5YR 4/6 橙色 6号土壤
4	土師環	底径 7.1	厚さ 0.5~0.9cm 高台付 ゆるやかな立上り	ろくろ水挽き整形 底部回転糸切り後、高台貼りつけろくろ調整	赤褐色粒・白色砂粒・灰色砂粒・黒色砂粒を含む 7.5YR 4/6 橙色 50号土壤

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	土師壺	底径推定 6.6	厚さ 0.5~0.7cm 高台付 ゆるやかな立上り	ろくろ水挽き整形 底部回 転糸切り後、高台貼りつけ ろくろ調整 内面みがき、 黒色	白色微細粒・赤褐色粒を含む 7.5YR 3/4 橙色 8号土壺
6	土師壺		厚さ 0.3~0.4cm	ろくろ整形	白色微細粒を多量に含む 墨書き土器 文字は「去」か 「吉」であろう 8号土壺
7	灰釉壺	底径推定 10.4	厚さ 0.4~1.0cm 高台付 急な立上り	ろくろ整形 高台貼付後で いねいなろくろ調整	外面に灰釉、緑色・黒色の 吹き出し釉あり 外面は焼 成により割れを生じている 部分もある 6号土壺

50号土壺出土鉄製品（第31図）

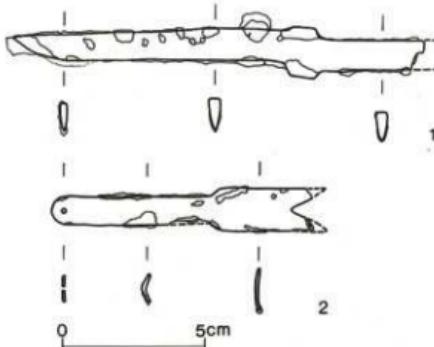
1 刀子

4層最上部より出土した。残存部長14.8cm、幅は刀身部1.0~1.1cm、柄部1.1cm。厚さは背部で0.2~0.4cm。切先より10cmのところに両側に台形の張り出しがもつ。断面は各所ともやや丸みをおびた鋭角二等辺三角形。鋸のうき出しがはげしい。

2 刺枝状鉄製品

2層最上部より出土した。残存部長9.4cm。二肢の両端部が欠損している。幅は、段より二肢部にかけては1.5cm、丸みをおびた端部にかけては1.0cm。厚さは0.1~0.15cm。断面は両端部付近はやや湾曲し、丸い端部から1.8cmの部分より段までは強い湾曲。丸い端部に径0.1cmの穿孔をもつ。用途は不明。

造りが非常に薄いこと、穿孔がきれいに行なわれていること、残存状態が良いことなどから、表土攪乱時に落ち込んだものである可能性も考えられる。



第31図 50号土壺出土鉄製品

(3) 近世

調査区のI区北西と、II区北西に溝が2条検出された。

1号溝の南端が攪乱をうけており、2号溝の北は農道下になるため不明ではあるが、方向・形態より見て、2つの溝はつながる可能性が考えられる。

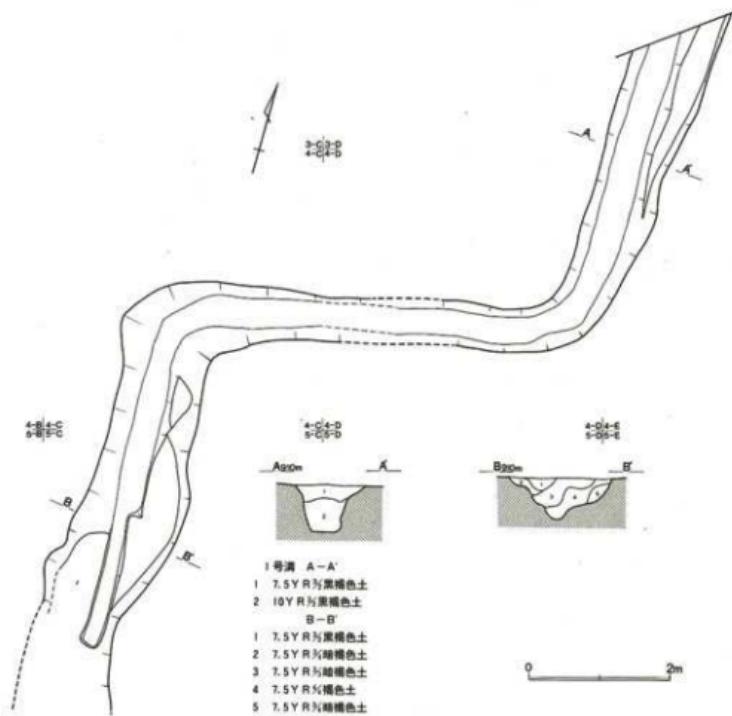
1号溝（第32図）

I区北端3-Eより、南へ延びて4-Dで西へ曲がり、4-Cで南へ曲がって5-B・Cにかかる攪乱によって途切れている。

北端部は、いわゆる箱葉研掘りに近いしっかりとした掘り込みであるが、攪乱近くではそれがくずれてくる。A-A'部で幅は上端75cm・底面30cm、深さ50cm、B-B'部で幅は上端115cm・底面15cm、深さ45cmである。

底面はほぼ平坦であるが、やや北へ流れるように傾いている。

遺物は、土師器片、近世陶磁器片、焰烙片、チャート質の剝片（第34図）等が出土している。



第32図 1号溝

2号溝（第33図）

II区北西端10-Bより、
ほぼまっすぐ南へ延びて
14-Aで調査区外に出る。

A-A'部で、幅は上端
35cm・底面10cm、深さ25
cm、B-B'部で、幅は上
端45cm・底面10cm、深さ
30cmである。

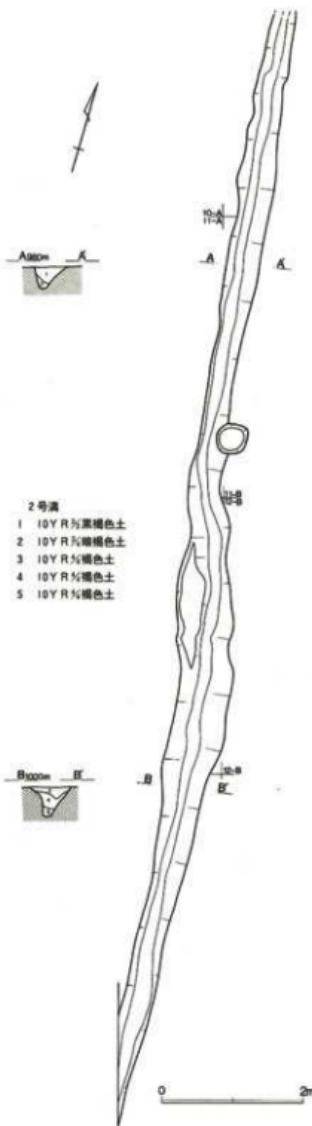
1号溝と同じく、底面
はほぼ平坦であり、やや
北へ流れるように傾いて
いる。

遺物は、撋文土器片、
土師器片、陶器片等が出
土している。

溝が造られる目的は、
排水・灌漑・区画・根切
り等が考えられる。

本遺跡の1・2号溝と
も流れはやや北へ傾いて
見沼代用水に向ってい、
水路である可能性もある
が、1号溝が屈折してい
ることは、土地による制
約を推察させる。

溝の掘り方が雑であり、
近世の根切り溝と考えた
方がよいだろう。



第33図 2号溝

(4) 石製品

中原後遺跡からは、加工痕のある石製品が4点出土した。

1 剥片

1号溝4-Dより出土した。石質はチャート。片面はほぼ自然面を残す。

2 磨り石

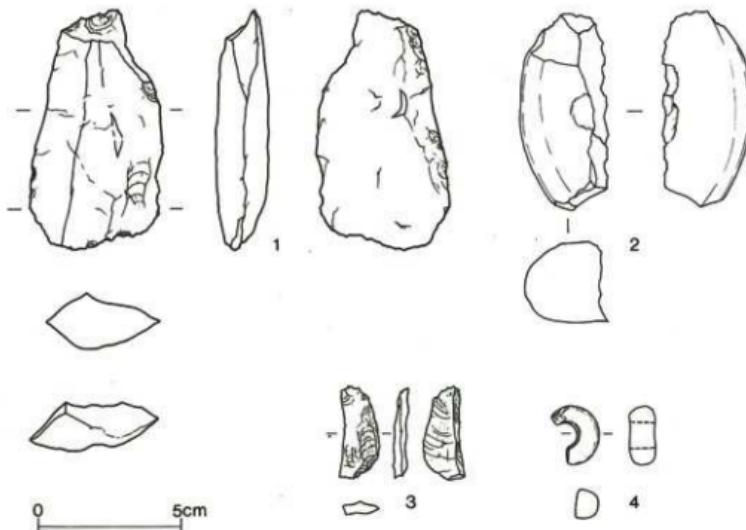
II区14-Cより出土した。石質は多孔質安山岩。

3 剥片

III区33-Dより出土した。石質は黒曜石。

4 扇状石製品

III区29-B、149号ピットより出土した。石質は滑石。4割程度欠損している。端部はよく磨つて整形してある。



第34図 石製品

4 結語

1 繩文時代の遺構について

中原後遺跡においては、繩文時代のものと思われる8軒の住居跡が検出されている。3・5・7・8・10号住居跡は、方形または長方形のプランを持ち、6・9・11号住居跡は、円形のプランを持っている。いずれも浅く、炉址も検出されていない。しかし、柱穴はそれぞれに検出されており、住居跡と考えてさしつかえないように思う。いずれの住居跡も遺物の出土が少なく、各々の時期を同定することは出来なかった。しかし、住居跡の内・外を問わず、一時期のものが一地点に集中する傾向を見せていくことは注目してよい。

土壙は20基ほど見つかっているが、住居跡同様遺物の出土量は少なく、時期を同定することは不可能であった。

ピットは多數見つかっているが、13・14-C・D区内で、円形にまわるピット群が確認できた。

13・14-C・D区からは繩文土器が集中して出土しており、特にこの円形のピット群内からは、第III群b類とした土器が集中して出土している。

繩文時代の遺構は、全体的に見ると貧弱なものであるが、遺構の集中する地点に遺物も集中する傾向を認めることが出来る。

又、調査区最南端からピットが1基単独で見つかっているが、この中からは加曾利E式の土器片が出土しており、調査区外の南側一帯にも遺構が存在する可能性を考えることが出来る。

2 繩文時代の遺物について

中原後遺跡において出土している251点の繩文土器片のうち、約164点が分類可能なものであり、これらについて出土地点の傾向などを加えながら簡単にまとめてみたいと思う。

出土土器は、繩文時代早期から晩期の各時期にわたるが、早期と後期及び晩期の土器片の出土はわずかであり、前期中葉から中期初頭のものが多数を占めた。

便宜上、早期から晩期の各時期のものを各々I群からV群とし、各群をさらにいくつかに分類した。

I群

a類（第16図-1）

燃り糸文をもつ土器である。

b類（第16図-2～5）

貝殻条痕文をもつ土器である。

II群

a類（第16図6～37）

6～24は無節の繩文が施される。25～28は単節の繩文。29はR L  の繩文が施される。30と31はそれぞれ無節と単節の羽状繩文。32・34は竹管による施文。33は無文。35は燃り糸の圧痕文。36・37は貝殻圧痕文である。

b類（第16図38～第17図26）

第16図38～第17図14は、胴部にL・Rの縄文が施され、口縁部には半截竹管による連続刺突文が施される。15～17・20は、地文の縄文上に半截竹管により文様が施される。18・19・21～26は、半截竹管により爪形文・平行沈線・弧線などが施される。

c類（第18図27～37）

27～30・32・36・37は単節の縄文。31・33～35は、多條の縄である。

III群

a類（第17図38～41）

38・39は結節をもつ縄文、40・41は単節の縄文である。

b類（第18図・第19図1～10）

単節の縄文による地文の上に、隆帯・沈線文・刺突文などが施される土器で、口端部には棒状工具によるスリットなどが施されることが多い。

c類（第19図11～28、第20図1～4）

第19図11～18は単節の縄文。21と22はRの燃糸の縱方向の回転。23・24は細かい単節の縄。25は複節の縄。26～28は沈線による文様が施される。

d類（第20図5～25）

5～7は燃糸を縱方向に回転したもの。8～14は、縄文を施したのち沈線や磨り消しが施されたもの。15～24は、沈線やナデによる文様区画の後に縄文が施されたもの。

IV群（第20図26～29）

後期初頭の土器で、器壁がうすく、沈線や円形のスリットが入る隆帯で施文される。

V群

a類（第20図30、31）

平行沈線で区画された口縁部に、烈点文が施される。

b類（第20図32～39）

三叉状入組文と平行沈線で区画された頸部以下に烈点文が施される。

さて、以上の土器の分布状況について触れておきたい。

I群の土器は出土数も少なく、これといった傾向をつかむことはできない。

II群a類の土器は、20-C・D・E区以内に多く、20～22-C・D・E区からは特に多く出土している。

II群b類の土器は、ほとんどが14-C・D区から出土している。他には、3・5・6・7・8・9号住居跡などからわずかに出土している。

II群とc類の土器は、13-E・F区以北に多く、3・5号住居跡などからも出土している。

III群a類は破片数が少ないが、次のIV群b類と同じ傾向を示す。

III群b類はほとんどが14-C・D区から集中して出土し、一部15-C・D区や2・5号住などから出土する。特に円形にめぐるピット群内からの出土が多い。

III群c類は特別の傾向を示さず、13-C区から39-B区までまばらに出土している。

III群d類も11-D区から最南端の84号ピットまでまばらな状態で出土する。

IV群の土器は数が少なく傾向をつかみにくいが、土壤やピットの集中する範囲とその周辺からの出土が多い。

V群a類は、1片は表採品であるため傾向がつかみにくいが、他の1片はV群b類の集中地点からはかなり離れた24-C区で出土している。

V群b類は14-D・Eに集中している。3号ピットや11号住居跡からも出土しているが、どちらも同区内の遺構である。

以上のことから、中原前遺跡では、遺構や土器の集中地点が2箇所あることが判った。

まず1箇所は、11~15-C・D・E区である。この地点には、縄文時代の住居跡・土壙・ピット群と代表的な遺構のほとんどが集中する。土器も、II群b類、III群b類、V群b類のほとんどがここから出土している。

もう1箇所は19~22-B・C・D区であるが、この地点の縄文時代遺構としては、ピットが多数検出されているだけである。この地点からは、II群a類の土器が多く出土している。

分類別の破片数では、II群a類・b類、III群b類が特に多くみられた。

II群の類に関しては、大谷場貝塚（野上・三友ほか1958）、II群b類、III類b類に関しては、駒前遺跡（宮崎ほか1983）などに同じような土器がみられる。
(小野美代子)

参考文献

野上有道・三友謙五郎ほか 1958 『大谷場貝塚』浦和市教育委員会

宮崎朝雄・村田健二・鈴木秀雄 1983 『県道大宮東京線関係埋蔵文化財発掘調査報告 I 中原前・駒前』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第30集
細田 勝

Ⅲ 石御堂遺跡発掘調査

1 遺跡の立地と環境

石御堂遺跡は、川口市東本郷字石御堂に所在し、国鉄京浜東北線川口駅の北東約3.5kmの地点に位置する。

現在では、宅地造成・区画整理が進み、原地形を推察するのが困難なほどに大きく環境は変化している。

大きな地形区分によれば、当遺跡は北足立台地鳩ヶ谷支台（大宮台地と総称されていた）の南端を下りた地点にあり、荒川の沼澤原である川口低地と、中川・綾瀬川によって開拓された中川低地との境界に、南西から北東へ細く延びる自然堤防上に位置している。

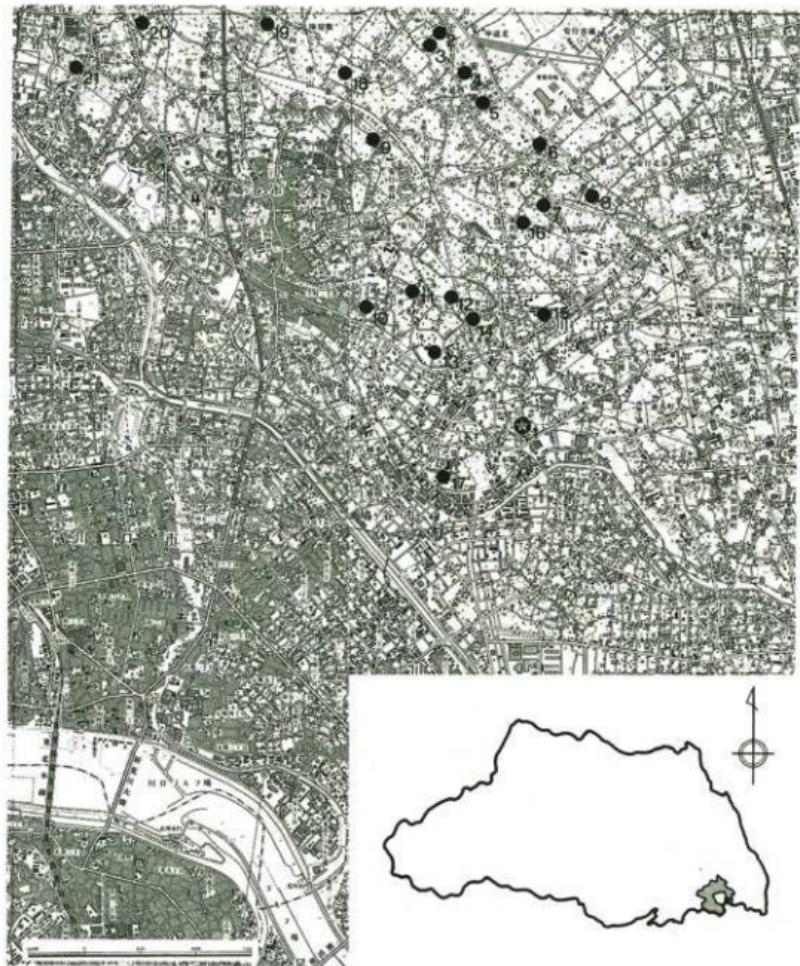
海退後の低地の自然堤防や後背湿地には、古墳時代以降継続的に集落が営まれている。当遺跡もその1つであろう。II区からは鬼高窓のものと考えられる壺や环が出土しており、西側へ徐々に高くなるため、古墳時代の集落が存在した可能性は大であるが、大きく攪乱されており不明である。しかし、当遺跡が古墳時代集落の一端を含むとすれば、西垣隆雄・鈴木敏弘両氏が『武藏伊興遺跡』（大場ほか1975）の中で指摘している、江戸袋の自然堤防上にはほぼ等間隔に分布する古墳時代の集落の1つとしてとらえることができ、当遺跡の南北に間延びした間隔の穴をうめるものといえる。

石御堂遺跡の中心となる時代は、中世-近世の初頭にかけてであるが、川口市内および付近の毛長川流域にも該期の遺跡は数少ない。

しかし、平安時代頃迄は猿投産の灰釉陶器等が東海道を通じて海から毛長川流域に運ばれ、旧入間川によって各地に送られたとし、毛長川流域が東海道より北武藏への入口として港的性格を有していたとする高橋一夫氏の説（高橋1982）をうければ、中世に入ってもなお、そういった流通形態が存続していたと考えてもよいのではないだろうか。

参考文献

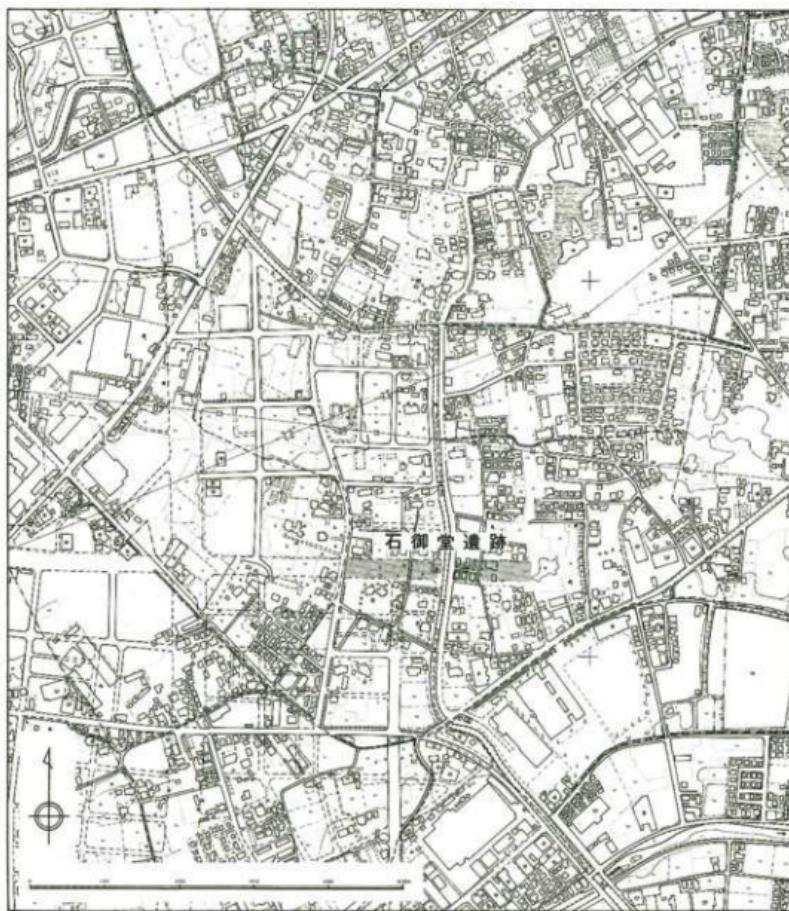
- | | |
|----------------|---|
| 貝塚実平 | 1964 「東京の自然史」紀伊国屋新書 |
| 大場繁雄・鈴木敏弘ほか | 1975 「武藏伊興遺跡」伊興遺跡調査団 |
| 川口市教育委員会 | 1976 「川口市文化財調査報告書第五集」 |
| " | 1980 「川口市文化財調査報告書第十三集」 |
| 埼玉県 | 1980 「土地分類基本調査 水海道・東京東北部・東京西北部(埼玉県内)」国土
調査 |
| 小野文雄・吉本富男・大村 進 | 1980 「角川日本地名大辞典11 埼玉」角川書店 |
| 高橋一夫 | 1982 「草加の遺跡(1)-毛長川流域を中心として-」『草加市史研究』第2号 |



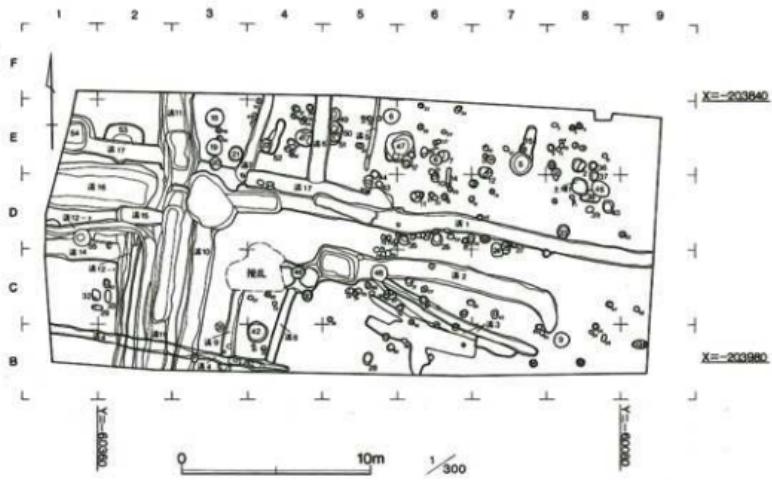
- 1 石御堂遺跡 2 猿貝北遺跡 3 猿貝貝塚 4 橋山遺跡 5 高河岸坂遺跡 6 半岡坂遺跡 7 峯後遺跡 8 東光寺遺跡 9 石臼福荷貝塚 10 浅間山遺跡 11 天神山遺跡 12 前野宿貝塚 13 文化放送中繼敷地内遺跡 14 懿伝寺境内遺跡 15 新郷古墳群 16 新堀貝塚 17 江戸続貝塚 18 赤山貝塚 19 石神貝塚 20 道合遺跡 21 横岸台遺跡

第35図 遺跡位置図

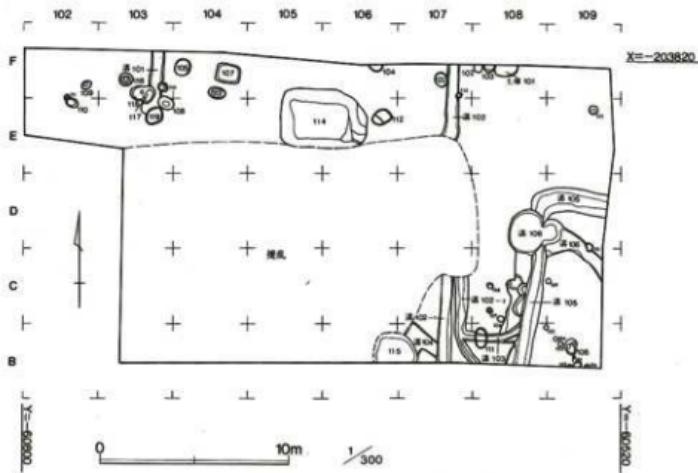
2 遺跡の概観



第36図 周辺地形図

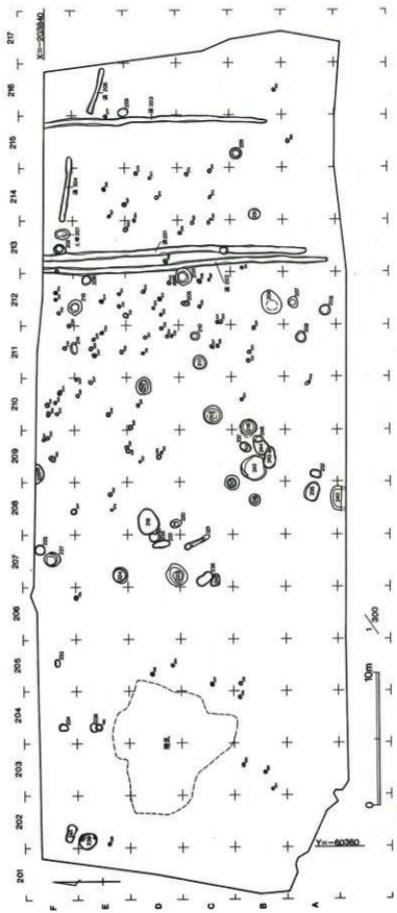


第37図 I区全測図



第38図 II区全測図

第39图 III区全图



石御堂遺跡は、中川低地西端の自然堤防上に位置する。遺跡の標高は約4.0～4.5mである。

今回の調査区域は、長さ約200m、幅約24m（部分的に約16m）の東西に長い範囲で、中央を南北に見沼代用水東線と市道が平行して横切っている。調査の便宜上、見沼代用水より西側をI・II区、東側をIII区とした。

以前は畠地・宅地として利用されていたようであるが、すでに県道予定地としてかなりの盛土がされており、現地表面から遺構確認面までは、I・II区で約80～120cm、III区で約30～50cmである。なおII・III区とも西側は大きく攪乱をうけており、遺構は確認できない。

調査は、バックホーにより客土を除去し、上よりの攪乱をうけていない暗褐色土面を露出させ、国家座標に基づき4×4mのグリッドを設定した。グリッド呼称は、南より北へアルファベット、西より東へ数字を付すこととし、その数字と遺構の番号については、I区-0番台、II区-100番台、III区-200番台を用いて区別した。

I・II区の間と、南側には水道管が埋没されており、また生活道路の確保のために調査範囲を狭めざるを得なかった。

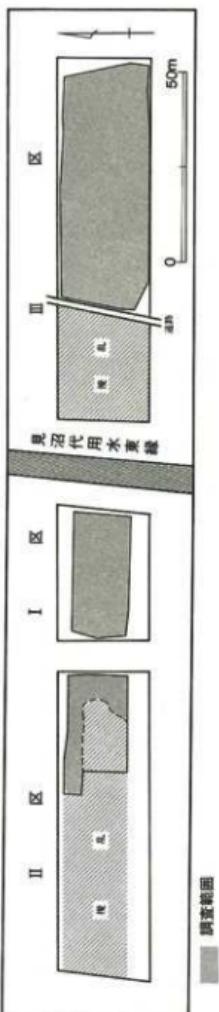
前述の暗褐色土層中には、遺物も少なく遺構も確認されないため、その層を除去すると、黄褐色粘土面より遺構が検出された。

I区では、溝16条・土壙55基・ピット94基が検出された。遺物は中世末～近世初頭の陶磁器類が多く、椀・下駄等の木製品も出土した。

II区からは、溝6条・土壙20基・ピット15基が検出された。遺物は、擂り鉢・板石塔婆・須恵器・土師器等が出されている。

III区からは、溝5条・土壙46基・ピット91基が検出された。遺物は須恵器壺・中・近世陶器等が出土している。

I～III区を合わせた遺構総数は、溝27条・土壙121基・ピット200基である。



第40図 調査区概念図

3 遺構と出土遺物

遺構についての記述は、中原後遺跡の記述で行なったのと同様の形式をとる。ただし、石御堂遺跡では住居跡の検出がないので、次の通りの箇条書きとする。

- 1 検出位置・規模・形状等
- 2 底面状態等
- 3 他の遺構との関連
- 4 出土遺物
- 5 その他の特徴

(1) 中・近世

A 溝

石御堂遺跡からは、I区に16条、II区に6条、III区に5条の溝が検出されている。

特にI区には溝が縦横に走り、出土遺物も多い。青灰色粘土層まで掘りこんだ溝からは、水を含んでいたために遺存状態のよい木製品や流木等も出土した。

1号溝（第41・43～45図、図版17）

- 1 I区3-D～9-Cで調査区外に出る 長さ約25m 幅0.8～1.1m 深さ30cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水を含むしまりのある底面 3-Dでは青灰色粘土層を深く掘りこんで溜り状になっている。
- 3 10・17号溝、43・44号土壤に切られる
- 4 香炉・擂り鉢・灯明皿・かわらけ・砥石等
- 5 東西の高低差なくほとんど平担

2号溝（第43・45図、図版17）

- 1 I区5-C～8-B 長さ約14m 幅1.0～1.2m 深さ22cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりのある底面 5-Cでは青色粘土層まで掘りこんで溜り状になっている
- 3 46・48号土壤に切られる
- 4 5-C溜り状の部分底面より桃の種4 土師器・須恵器片、砥石等
- 5 東西の高低差なくほとんど平担

3号溝（第43・45図）

- 1 I区5-C～7-B 長さ約10m 幅0.7～1.1m 深さ15cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりのある底面
- 3 48・49・59・89号ピット、48号土壤に切られる
- 4 土師器片
- 5 底面は、やや南東に流れるように傾斜している

4号溝（第41・43図）

- 1 調査区外よりI区1-Bに入り、4-Bに至る 長さ約13m 幅40～50cm 深さ15cm

- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりのある底面
- 3 8・9・10・11・12号溝を切る
- 4 土師器片・かわらけ・砥石等
- 5 底面は凹凸がはげしく、やや南東に流れるように傾斜している

5号溝（第38・43図）

- 1 調査区外よりI区5-Fに入り、5-Eに至る 長さ約4m 幅20~25cm 深さ5cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりある底面

6号溝（第38・43・44図）

- 1 調査区外よりI区5-Fに入り、4-Dに至る 長さ約4.6m 幅0.9~1.0m 深さ20cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりのある底面
- 3 17号溝に切られる 1号溝より新しいものと考えられる 41・49・50・51号土壤を切る
- 4 土師器・施釉陶器片

7号溝（第41・43・44図）

- 1 調査区外よりI区4-Fに入り、3-Dに至る 長さ約5m 幅0.5~0.7m 深さ30cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水分を含むしまりはある底面
- 3 17号溝に切られる 1号溝より新しいものと考えられる
- 4 施釉陶器皿・土師器片

8号溝（第43・44図）

- 1 I区4-B-4-C 長さ約4m 幅0.5~0.55m 深さ10cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、しまりのある底面
- 3 4号溝、46号土壤に切られる
- 4 土師器片

9号溝（第41・42図）

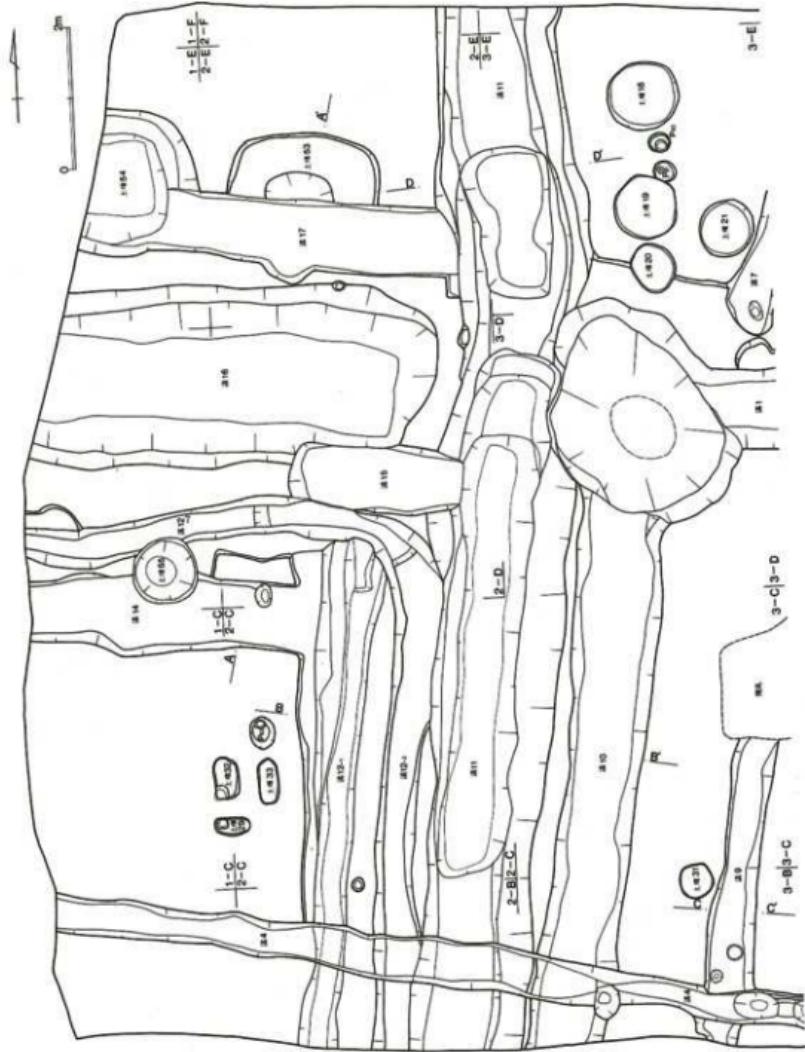
- 1 調査区外よりI区3-Bに入り、3-Cに至る 長さ約4.4m 幅0.5~0.7m 深さ20cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、しまりのある底面
- 3 4号溝に切られる 3-Cで擾乱をうける
- 4 摺り鉢、焰烙片

10号溝（第41・42図）

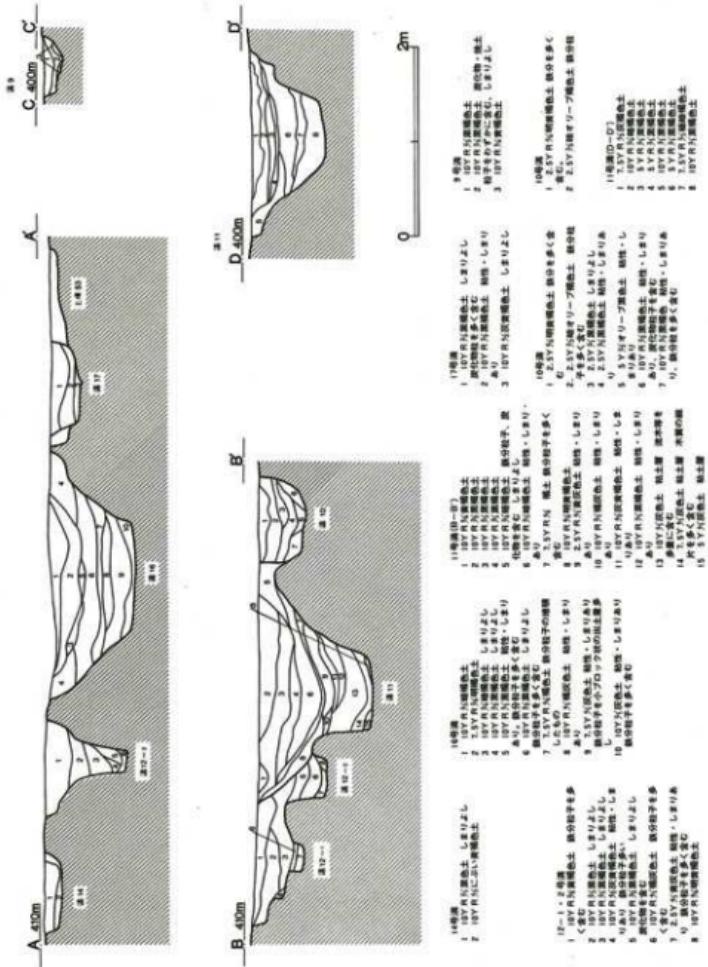
- 1 調査区外よりI区3-Bに入り、3-Dに至る 長さ約7.6m 幅1.0~1.1m 深さ50cm
- 2 確認面と同じ粘土層中の、水を含んだしまりのある底面
- 3 11号溝を切る 4号溝に切られる 3-Dで1号溝西端の溜り状の部分にかかる
- 4 土師器片、軒平瓦片

11号溝（第41・42図）

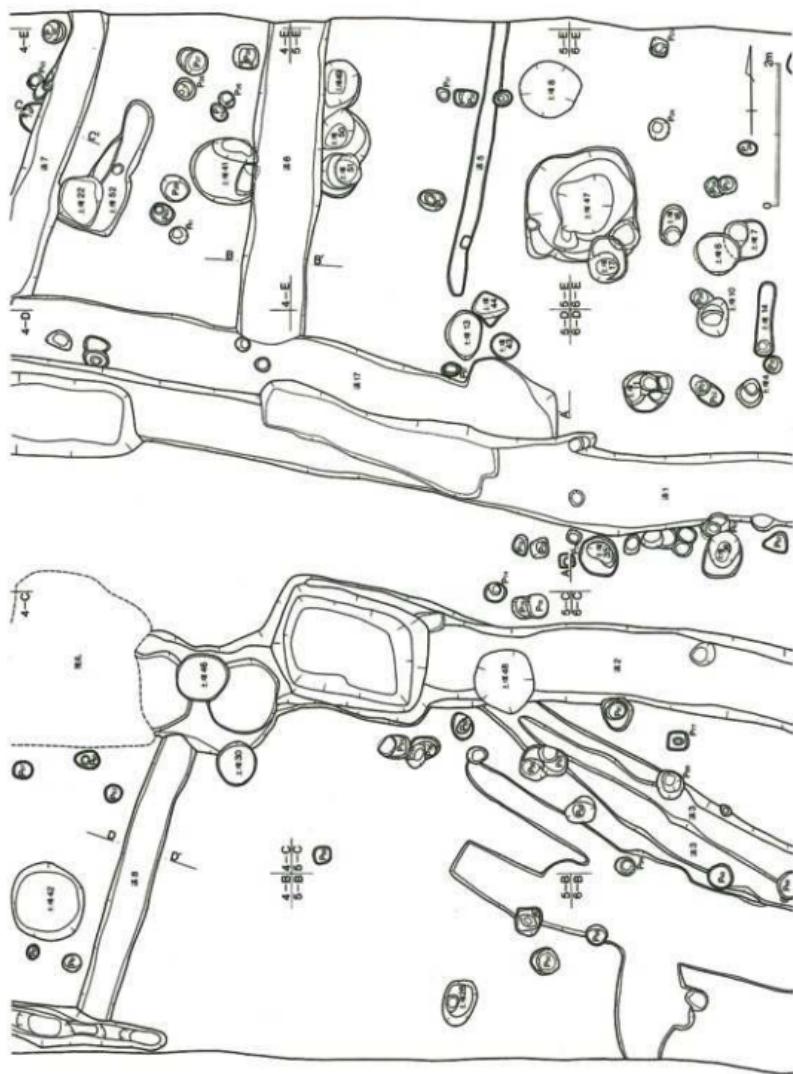
- 1 調査区外よりI区2-Bに入り、2・3-Eで調査区外へ出る 長さ約14.8m 幅1.8m 深さ1.2m
- 2 北側は、確認面と同じ粘土層中のしまりのある底面をもつが、南側は青灰色粘土層まで掘りこ



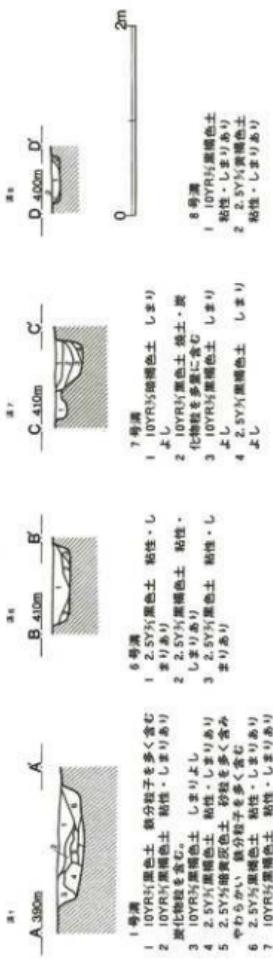
第41図 溝(I区全測図・部分)(1)



第42図 溝土層断面図(1)



第43図 溝(I区全測図・部分)(2)



第44図 溝土層断面図(2)

み非常に軟弱な床面

- 3 12・15号溝を切る 17号溝に切られる
- 4 施釉陶器類、染付磁器、かわらけ、焰烙、須恵環片、下駄、椀、杭、板材、角材、丸材、流木、モモ・センダンの種、鉄滓、砥石等

12-1・2号溝 (第41・42図)

- 1 調査区外より I 区 2-B に入り、2-D に至って 12-1 号溝が、西へ曲がる 12-2 号溝により途切れる 長さは、12-1 号溝が約 7.2 m、12-2 号溝が約 12.7 m 幅は合わせて 1.6 m 深さは 12-1 号溝 50cm、12-2 号溝 75cm
- 2 確認面の粘土層より青灰色粘土層への漸移層中に、水分を含むしまりのある底面をもつ
- 3 15号溝を切る 4・11・14号溝に切られる
- 4 施釉陶器、土師器片等
- 5 2-B より 2-D までは断面が W 字状を呈する。12-2 号溝は 2-D より西へ曲がり、1-D から一度調査区外に出るが、II 区 109-D で 106 号溝につながる可能性がある

14号溝 (第41・42図)

- 1 調査区外より I 区 1-C・D に入り 2-C・D に至る 長さ約 4.1 m 幅 0.9~1.2 m 深さ 20cm
- 2 確認面と同じ粘土層中のしまりのよい底面
- 3 12号溝を切る 55号土壤に切られる
- 4 施釉陶器、土師器片等

15号溝 (第41図)

- 1 I 区 2-D 長さ約 2.5 m 幅 0.8~1.0 m 深さ 60cm
- 2 青色粘土層まで掘りこんだ、水分を多量に含む軟弱な底面
- 3 16号溝を切る 11・12-2 号溝に切られる
- 4 砥石等

16号溝 (第41・42図)

- 1 調査区外より、I 区 1-C・D に入り 2-D に至る 長さ約 5.6 m 幅 2.5 m 深さ 90cm

2 青灰色粘土層まで掘りこんだ、水分を多量に含む軟弱な底面

3 15号溝に切られる

4 施釉陶器、擂り鉢、焙烙、土師器片、砥石等

17号溝 (第41~43図)

1 I区1-E~5-D 長さ約17m 幅1.0m 深さ35cm

2 確認面と同じ粘土層中の、しまりのある床面

3 1・6・7・11号溝、53・54号土壤を切る 20号土壤に切られる

4 擂り鉢、焙烙、施釉陶器等

101号溝 (第38図)

1 調査区外よりII区103-Fに入り、103-Eに至る 長さ約3.5m 幅0.7~1.0m 深さ15cm

2 凹凸がはげしくしまりのよい底面

3 117~119号土壤に切られる

4 土師器片

102号溝 (第38・46・47図)

1 調査区外よりII区107-Fに入り、107-Eに至る

2 ほぼ平らでしまりのある底面

3 112号ビットに切られる 107-Eで攪乱をうける この攪乱中で分岐して、102-1・102-2号溝となるものと思われる

4 土師器片

102-1号溝 (第38・46・47図)

1 調査区外よりII区107-Bに入り、107-Cに至る 長さ約5m 幅0.6~0.8m 深さ30cm

2 ほぼ平らでしまりのある底面

3 104号溝を切る 107-Cで攪乱をうける

4 土師器片

102-2号溝 (第38・46・47図)

1 調査区外より108-Bに入り107-Cに至る 長さ約4.8m 幅0.5~0.7m 深さ45cm

2 丸みをおびた、しまりのある底面

3 103号溝に切られる。107-Cで攪乱をうける

4 土師器片

103号溝 (第38・46・47図)

1 II区107-B~108-C 長さ約3.0m 幅0.4~0.45m 深さ40cm

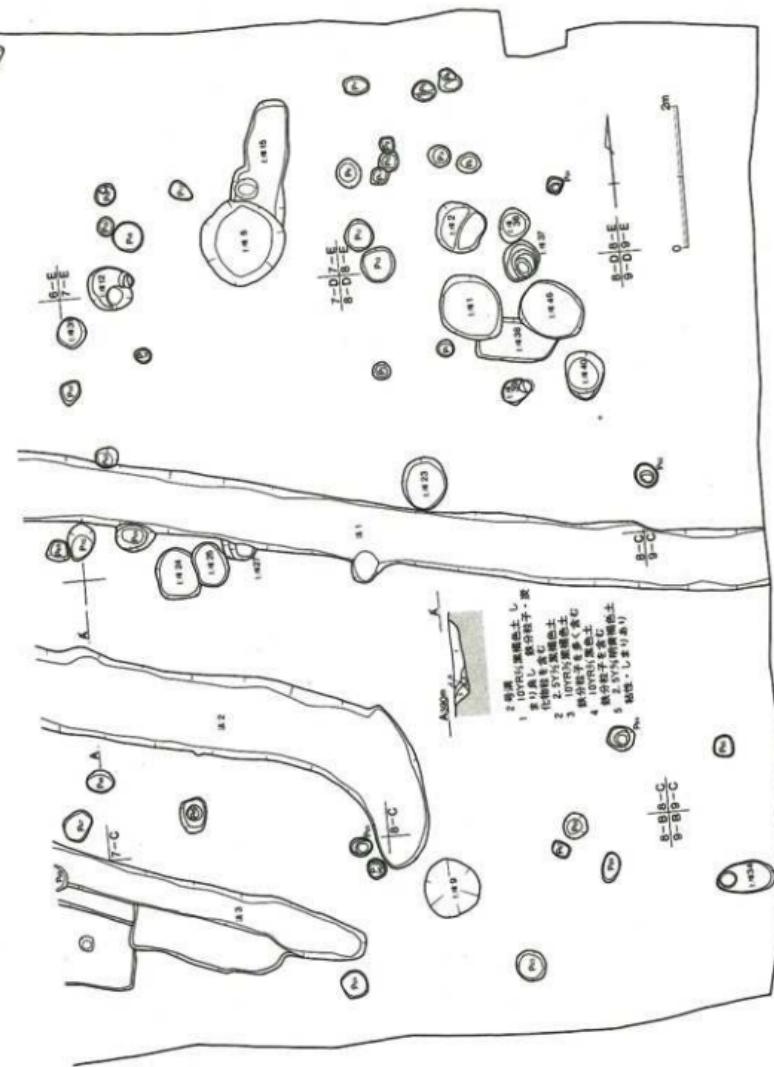
2 丸みをおびた、しまりのある床面

3 102-2・105号溝を切る 111号土壤に切られる

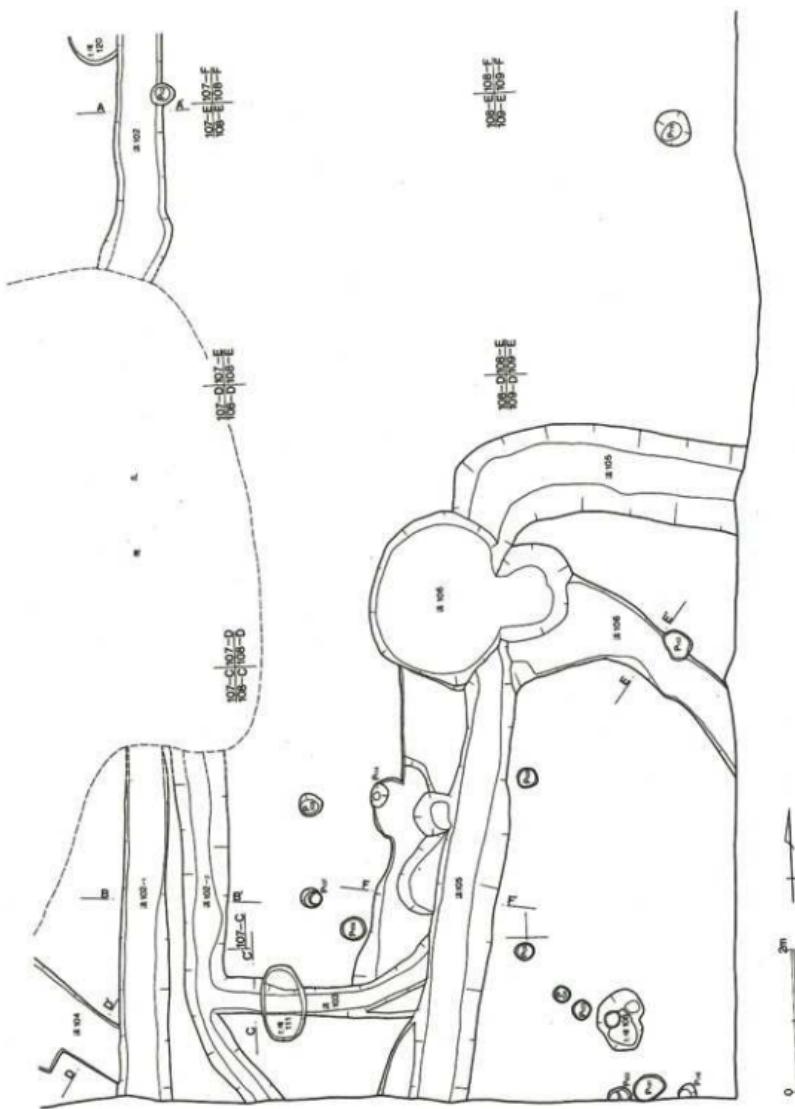
4 土師器片

104号溝 (第39・46・47図)

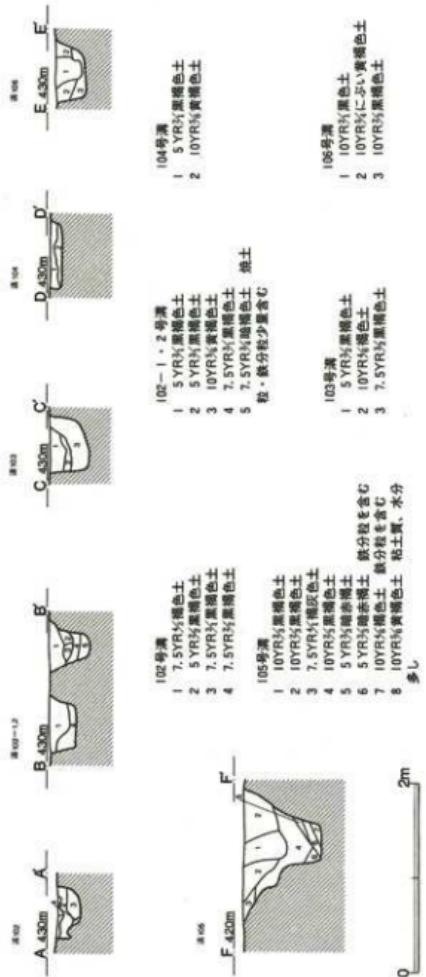
1 II区107-B 長さ約2m 幅0.6~0.8m 深さ15cm



第45図 溝(I区全測図・部分)(3)



第46図 溝(II区全測図・部分)(4)



第47図 溝土層断面図(3)

- 2 平らでしまりのある底面
- 3 102-1号溝、115号土壤に切られる 107-Bで攪乱をうける

105号溝 (第38・46・47図)

- 1 調査区外よりII区 108-Bに入り、108-Dで東へほぼ90度に曲がり、調査区外へ出る
- 2 ほぼ平らで非常に硬い底面
- 3 103・106号構に切られる
- 4 土鍋、土師器片
- 5 108-Dで調査区外に出て、西へ延びI区1-Dで12-2号溝につながるものと思われる

106号溝 (第38・46・47図)

- 1 調査区外よりII区109-Cに入り108-Dに至り溜り状となる 長さ約5.6m 幅0.6~1.2m 深さ85cm 溜り部分は長径3.0m、短径1.2mと2.4mの瓢箪形 深さ95cm
- 2 ほぼ平らで非常に硬い底面、溜り部分は粘土層を掘りこんでいるため軟弱
- 3 105号溝を切る 113号ピットに切られる

B 土壌

井戸状土壌をのぞいた土壌について記す。

I・III区に検出された土壌はすべて、確認面と同一層中の粘土層に底面をもち、水分を含んでしまっている。II区に検出された土壌はロームに近い土層中に底面をもち、しまりがよい。

この項では、箇条書きの5に土層注記も含む。

1号土壌 (第45・48図)

- 1 I区 8-D 径1.1×0.9mの楕円形 深さ25cm
- 3 38号土壌を切る
- 5 1-7.5 YR 1/2黑色土 2-7.5 YR 1/2黑褐色土 3-7.5 YR 1/2黑色土

2号土壌 (第45・48図)

- 1 I区 8-E 径0.8×0.7mの不整円形 深さ15cm
- 5 1-10 YR 1/2黑褐色土 2-7.5 YR 1/2黑褐色土 3-7.5 YR 1/2黑色土

6号土壌 (第43・48図)

- 1 I区 6-E 径1.15×1.1mの円形 深さ45cm
- 3 7号土壌に切られる
- 5 1-10 YR 1/2暗褐色土 2-10 YR 1/2黑褐色土 3-2.5 YR 1/2黑褐色土 4-2.5 YR 1/2黑褐色土
5-5 YR 1/2オリーブ黒色土 6-10 YR 1/2黑褐色土

7号土壌 (第43・48図)

- 1 I区 6-E 径1.1×1.0mの円形 深さ15cm
- 3 6号土壌を切る
- 5 1-10 YR 1/2黑褐色土 2-2.5 YR 1/2黄褐色土

12号土壌 (第45・48図)

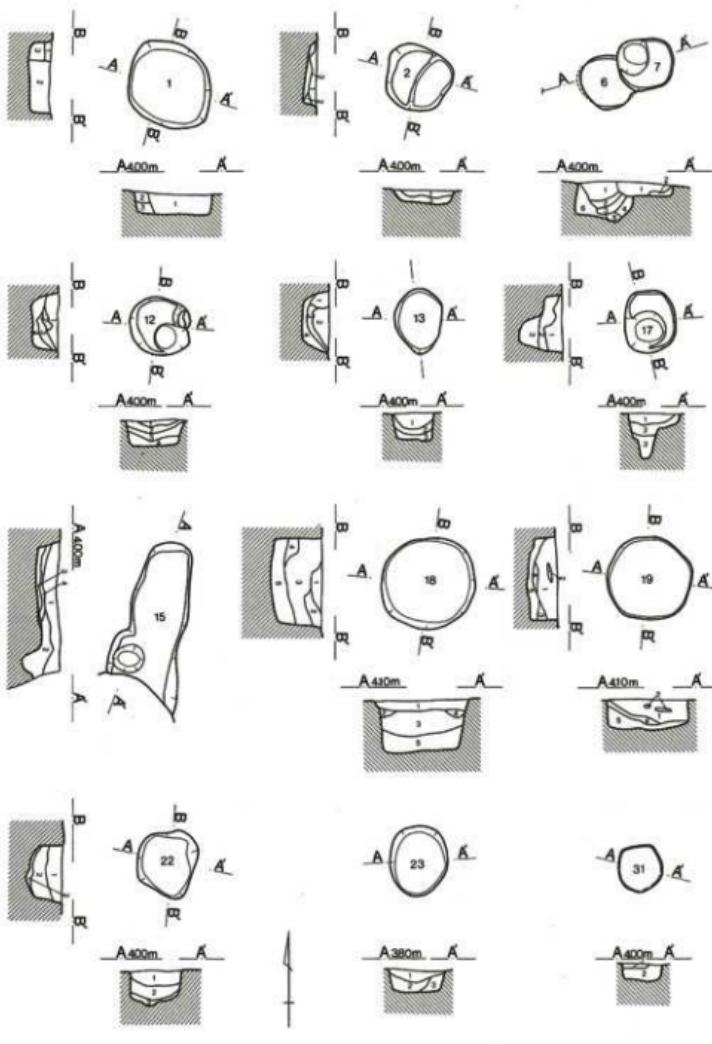
- 1 I区 7-D・E 径0.65×0.6mの円形 深さ30cm
- 5 1-7.5 YR 1/2褐灰色土 2-7.5 YR 1/2黑褐色土 鉄分粒子を含む 3-7.5 YR 黑褐色土
4-5 YR 1/2褐色土

13号土壌 (第43・48図)

- 1 I区 5-D 径0.7×0.5mの楕円形 深さ30cm
- 4 土師器片
- 5 1-10 YR 1/2黑褐色土 2-10 YR 1/2黑色土 鉄分粒子を含む 3-7.5 YR 1/2黑褐色土 4-
7.5 YR 1/2黑色土 鉄分粒子を含む

15号土壌 (第45・48図)

- 1 I区 7-E 径1.5×0.6mの長楕円形 深さ25cm
- 3 5号土壌に切られる
- 4 土師器片



第48図 土壌(1)

- 5 南西端に深さ20cmの掘り込みをもつ 1-2.5 YR%暗灰黄色土 しまりよく炭化物を含む 2-10 YR%黒褐色土 3-10 YR%黒褐色土 4-2.5 YR%黒褐色土 5-10 YR%黒褐色土

17号土壤 (第43・48図)

- 1 I区 6-E 径0.7×0.55 mの隅丸方形 深さ50cm

3 47号土壤を切る

- 5 1-10 YR%暗褐色土 鉄分粒子を含む 2-10 YR%黒褐色土 3-10 YR%黒褐色土 4-2.5 YR%黄褐色土

18号土壤 (第41・48図)

- 1 I区 3-E 径1.0×1.0 mの円形 深さ60cm

- 5 1-10 YR%黒色土 炭化物を多く含む 2-10 YR%黒褐色土 鉄分粒子を含む 3-2.5 YR%黄灰色土 鉄分粒子を多く含む 4-10 YR%褐色土 5-2.5 YR%黒褐色土 しまりよし

19号土壤 (第41・48図)

- 1 I区 3-E 径0.9×0.9 mの円形 深さ30cm

4 土師器片

- 5 1-10 YR%黒褐色土 炭化物を含む 2-10 YR%黄褐色土 3-7.5 YR%黒褐色土 4-10 YR%にぶい黄褐色土 鉄分を多く含む 5-7.5 YR%黒褐色土

22号土壤 (第43・48図)

- 1 I区 4-E 径0.8×0.7 mの不整円形 深さ40cm

3 52号土壤を切る

4 土師器片

- 5 1-10 YR%黒褐色土 2-10 YR%黒色土 3-10 YR%黄褐色土

23号土壤 (第45・48図)

- 1 I区 8-D 径0.8×0.6 mの楕円形 深さ25cm

- 5 1-7.5 YR%暗褐色土 鉄分粒子を含む 2-10 YR%黒褐色土 鉄分粒子を多量に含む 3-10 YR%黒褐色土 鉄分粒子を含む

31号土壤 (第45・48図)

- 1 I区 3-B 径0.5×0.5 mの円形 深さ40cm

- 5 1-2.5 YR%黒褐色土 2-2.5 YR%黒褐色土

34号土壤 (第45・49図)

- 1 I区 9-B 径0.85×0.45 mの楕円形 深さ15cm

- 5 1-2.5 YR%暗オリーブ褐色土 鉄分粒子・炭化物粒子を多く含む

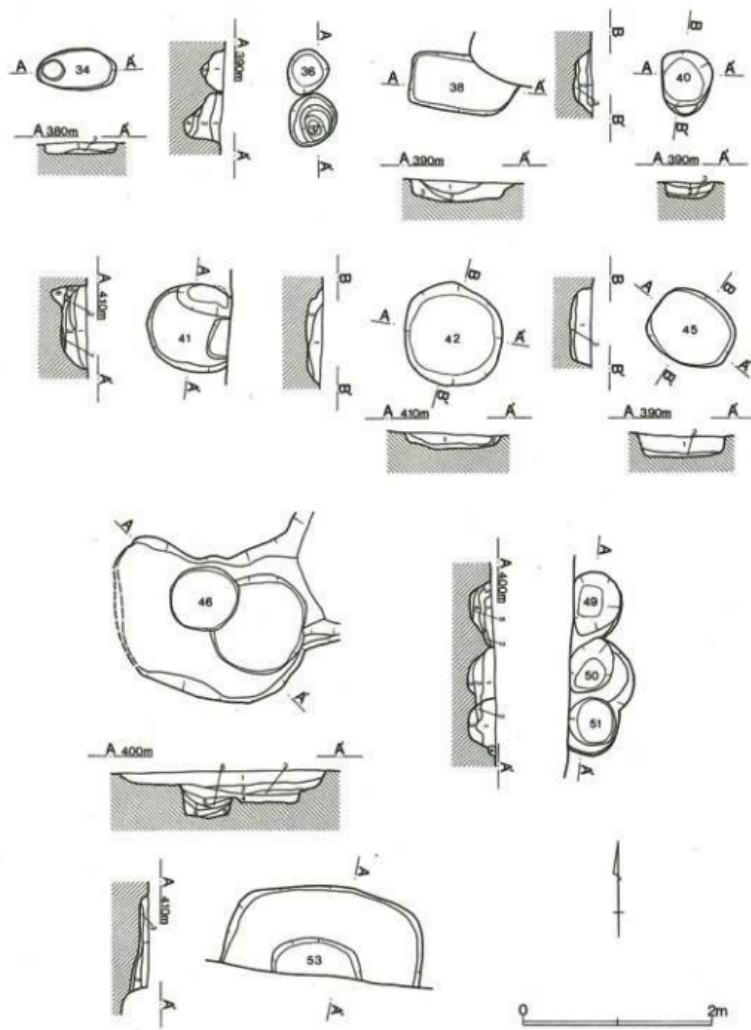
36号土壤 (第45・49図)

- 1 I区 8-E 径0.5×0.4 mの不整円形 深さ25cm

- 5 1-2.5 YR%黒褐色土 鉄分を含む 2-5 YR%オリーブ黑色土

37号土壤 (第45・49図)

- 1 I区 8-D-E 径0.6×0.5 mの不整円形 深さ45cm



第49図 土壌(2)

4 土師器片

- 5 1 - 10 Y R 3% 黒褐色土 2 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 3 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 4 - 5 Y 3% オリーブ黒色土 各層とも鉄分粒子を多く含む

38号土壤 (第45・49図)

- 1 I 区 8 - D 径 1.2×0.6 m の長方形 深さ25cm

- 3 1・45号土壤に切られる

- 5 1 - 10 Y R 3% 黒褐色土 2 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 鉄分粒子を含む 3 - 10 Y R 3% 黒褐色土 鉄分粒子を多く含む

40号土壤 (第45・49図)

- 1 I 区 8 - D 径 0.7×0.55 m の不整円形 深さ20cm

- 5 1 - 10 Y R 3% 黒褐色土 2 - 10 Y R 3% 黒褐色土 3 - 10 Y R 3% 黒褐色土 各層とも鉄分粒子を多く含む

41号土壤 (43・49図)

- 1 I 区 4 - E 径 0.95×0.9 m の円形 深さ25cm

- 3 6号溝に切られる

- 4 須恵器坏、土師器片

- 5 1 - 5 Y 3% オリーブ黒褐色土 鉄分粒子を多く含む 2 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 3 - 10 Y R 3% 黒褐色土 4 - 10 Y R 3% 黒褐色土 5 - 2.5 Y R 3% にぶい黄褐色土 6 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 7 - 2.5 Y 3% にぶい黄色土

42号土壤 (第43・49図)

- 1 I 区 4 - B 径 1.1×1.1 m の円形 深さ20cm

- 5 1 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 2 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 各層とも鉄分粒子を含む

45号土壤 (第45・49図)

- 1 I 区 8 - D 径 1.0×0.8 m の楕円形 深さ25cm

- 3 38号土壤を切る

- 4 焙烙片

- 5 1 - 10 Y R 3% 黒褐色土 2 - 10 Y R 3% 黒褐色土

46号土壤 (第43・49図)

- 1 I 区 4 - C 径 2.2×1.5 m の不整円形 深さ50cm

- 2 底面の凹凸がはげしいが、2号溝に関連する浅い掘り込みから、さらに2箇所に円形の土壤が掘りこまれているものであろう

- 3 2号溝を切る 30号土壤に切られる

- 4 土師器・焙烙片

- 5 1 - 10 Y R 3% 黒褐色土 2 - 10 Y R 3% 黒褐色土 鉄分粒子を多く含む 3 - 10 Y R 3% 黒褐色土 4 - 10 Y R 3% 黒褐色土 鉄分粒子を含む 5 - 2.5 Y 3% 黒褐色土 6 - 10 Y R 3% 黒褐色土 7 - 10 Y R 3% 黒褐色土 8 - 5 Y 3% オリーブ黒褐色土 鉄分粒・灰黄色粘土が混入 9 - 2.5 Y 3% 暗オリーブ

褐色土

49号土壤 (第43・49図)

- 1 I区 5-E 径0.7×0.55mの橢円形 深さ25cm
- 3 6号溝、50号土壤に切られる
- 5 1-7.5YR 5/2黑褐色土 2-2.5YR 5/2黑褐色土 3-10YR 5/2黑褐色土 4-10YR 5/2黑褐色土 5-2.5YR 5/2黑色土

50号土壤 (第43・49図)

- 1 I区 5-E 径0.7×0.7mの円形 深さ30cm
- 3 49号土壤を切る 6号溝、51号土壤に切られる
- 4 土師器片
- 5 1-10YR 5/2黑褐色土 2-10YR 5/2黑褐色土 3-10YR 5/2黑色土

51号土壤 (第43・49図)

- 1 I区 5-E 径0.6×0.6mの円形 深さ30cm
- 3 50号土壤を切る 6号溝に切られる
- 5 1-2.5YR 5/2黑褐色土 2-10YR 5/2黑褐色土 3-2.5YR 5/2黑色土 4-2.5YR 5/2暗オリーブ褐色土

53号土壤 (第41・49図)

- 1 I区 2-E 径2.15m×不明 (1.0m以上) の隅丸方形 深さ15cm
- 3 17号溝に切られる
- 4 土師器・須恵器・陶器片・鉄滓等
- 5 1-10YR 5/2暗褐色土 2-10YR 5/2黑褐色土 3-2.5YR 5/2暗灰黄色土 炭化物粒を多く含む 各層とも鉄分粒子を多く含む

101号土壤 (第50図)

- 1 II区108-F 径0.25m×不明 (一部調査区外、0.7m以上) の橢円形 深さ15cm
- 4 須恵器坏・土師器片
- 5 1-5YR 5/2黑褐色土 焼土粒を含む 2-5YR 5/2黑褐色土

102号土壤 (第50図)

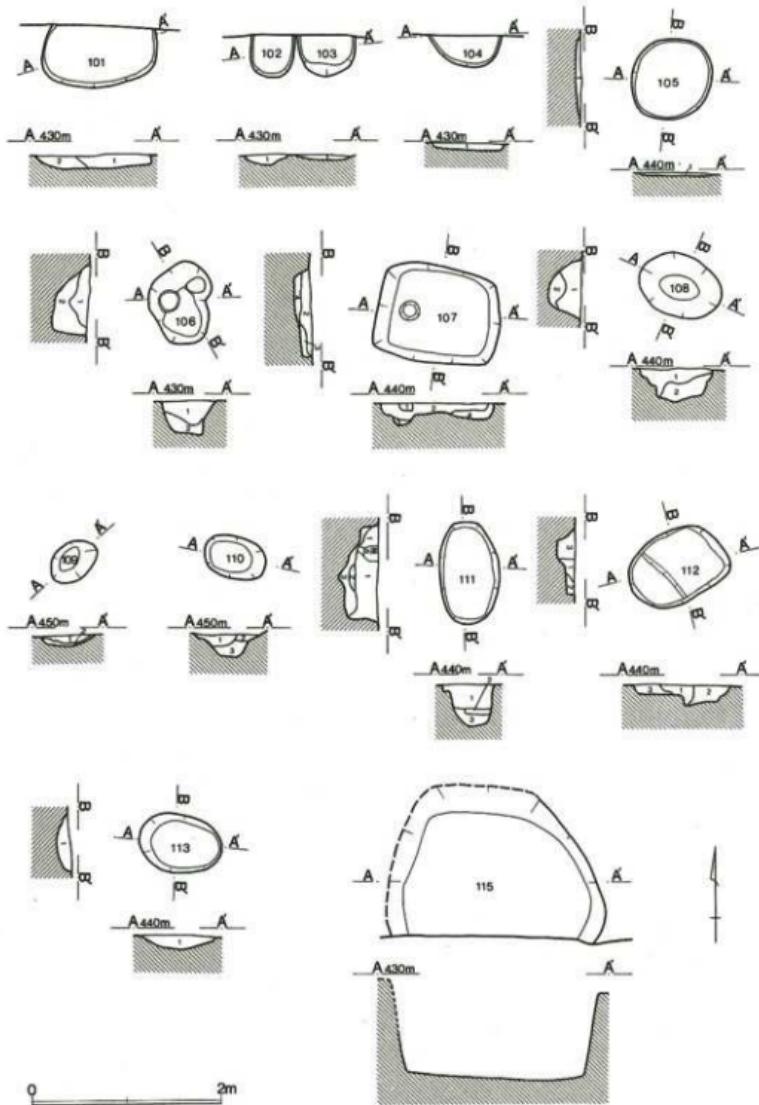
- 1 II区108-F 径0.5m×不明 (一部調査区外、0.5m以上) の橢円形 深さ10cm
- 4 土師器片
- 5 1-5YR 5/2黑褐色土

103号土壤 (第50図)

- 1 II区108-F 径0.65m×不明 (一部調査区外、0.4m以上) の円形 深さ5cm
- 4 土師器片
- 5 1-5YR 5/2黑褐色土

104号土壤 (第50図)

- 1 II区106-F 径0.8m×不明 (一部調査区外、0.3m以上) の橢円形 深さ10cm



第50図 土壌(3)

5 1 - 5 Y R % 黒褐色土

105号土壤 (第50図)

1 II区104-F 径1.0×0.9 mの円形 深さ 5 cm

4 土師器环

5 1 - 7.5 Y R % 黒褐色土

106号土壤 (第50図)

1 II区104-F 径0.9×0.6 mの不整円形 深さ 35cm

107号土壤 (第50図)

1 II区104-F 1.3×1.0 mの隅丸長方形 深さ 20cm 東隅に深さ10cmの掘りこみをもつ

4 土師器片

5 1 - 7.5 Y R % 褐色土 2 - 10 Y R % 黒褐色土 3 - 10 Y R % 黄褐色土 4 - 7.5 Y R % 極暗褐色土

108号土壤 (第50図)

1 II区103-E 径0.9×0.65 mの楕円形 深さ 35cm

3 101号溝を切る

4 土師器片

5 1 - 10 Y R % 黒褐色土 2 - 7.5 Y R % 黒褐色土

109号土壤 (第50図)

1 II区102-F 径0.55×0.4 mの楕円形 深さ 10cm

5 1 - 7.5 Y R % 黒褐色土 2 - 10 Y R % 黄褐色土

110号土壤 (第50図)

1 II区102-E 径0.7×0.45 mの楕円形 深さ 25cm

3 土師器片

5 1 - 7.5 Y R % 黒褐色土 燃土粒を含む 2 - 10 Y R % 黒褐色土 燃土粒・炭化物粒を含む
3 - 5 Y R % 黑褐色土

111号土壤 (第46・50図)

1 II区108-B 径1.1×0.65 mの楕円形 深さ 45cm

3 103号溝を切る

4 土師器片

5 1 - 10 Y R % 黒褐色土 2 - 10 Y R % 黄褐色土 3 - 10 Y R % 黑褐色土

112号土壤 (第50図)

1 II区106-E 径1.0×0.75 mの隅丸長方形 深さ 20cm

4 土師器片

5 1 - 7.5 Y R % 暗褐色土 2 - 7.5 Y R % 黑褐色土 3 - 7.5 Y R % 黑色土

113号土壤 (第50図)

1 II区104-F 径 0.9×0.65 mの橢円形 深さ15cm

4 須恵器坏、土師器片

5 1-7.5 Y R 黒褐色土

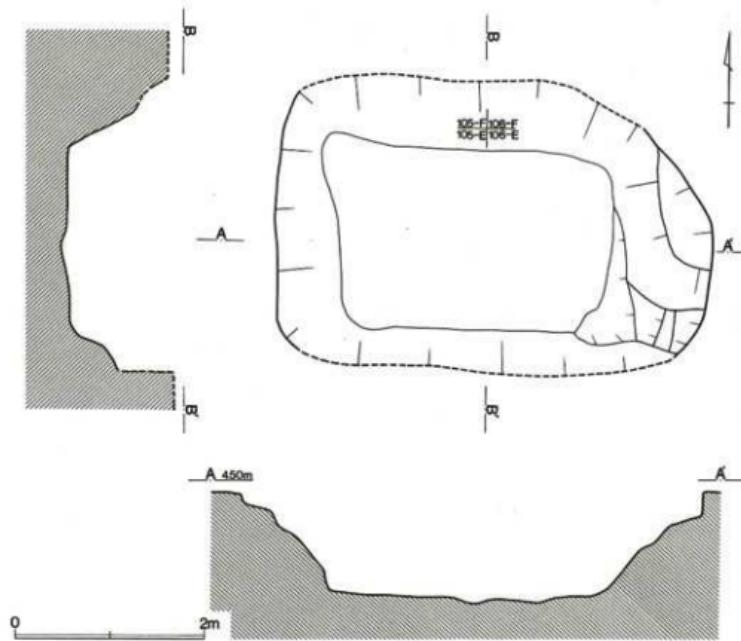
115土壤 (第50図)

1 II区106・107-B 径 $2.4m \times$ 不明 (一部調査区外、1.6m以上) の不整円形 深さ1.0m

3 104号溝を切る

4 陶器皿、土師器片

5 土層断面が降雨のため崩壊し、計測できなかったが、自然堆積であることが観察された



第51図 114号土壤

114号土壤 (第51図)

1 II区105・106-E・F 4.7m×不明 (3m前後) の隅丸長方形 深さ1.2m

2 凹凸の多い、粘土質でしまりのよい底面

4 常滑窯、土師器片、石皿

5 東南隅に、幅50cm前後の階段状の段をもち、ゆるやかに底面へ下る。底面直上の土層は粘性が強く水分を多く含んだうすい粘土層で、その層を剝がすと、ほぼ一面に炭化物が見られた。水分を含むため海苔状であるが、薄い繊維質のものが炭化したものであることが数箇所で観察された。炭化材も少量ではあるが検出されている。

炭化物の下は、黄灰色粘土層で厚さ4cm前後。この面が底面と思われる。さらに下層には鉄分を多量に含んだ黄褐色の砂層が見られた。

この遺構の使用目的は不明確であるが、底面より出土した常滑甕に鉄が付着し錆びていること、I区の遺構から鉄滓が出土していること、鉄分を含んだ土層が観察できたこと等から、製鉄に関連する目的が推察される。

なお、土層断面は降雨のため崩壊し、計測できなかったが、自然堆積であることが観察された。

201号土壌（第52図）

1 III区213-F 径1.1×0.8mの橢円形 深さ30cm

4 須恵器环片

5 1-7.5YR%黒色土 焼土粒を含む 2-7.5YR%黒褐色土 3-10YR%明黄褐色土

202号土壌（第52図）

1 III区213-F 径0.9×0.8mの不整円形 深さ45cm

4 須恵器片

5 1-7.5YR%黒色土 焼土粒を含む 2-10YR%明黄褐色土 3-7.5YR%黒褐色土

203号土壌（第52図）

1 III区212-C 径1.3×1.25mの円形 深さ65cm

3 202号溝を切る

5 1-7.5YR%黒褐色土・焼土粒を含む 2-7.5YR%黒褐色土 3-7.5YR%黒褐色土

206号土壌（第52図）

1 III区212-E 径0.75×0.7mの円形 深さ30cm

5 1-7.5YR%黒褐色土 2-5YR%黒褐色土 3-7.5YR%黒褐色土

207号土壌（第52図）

1 III区212-A 径0.8×0.8mの円形 深さ80cm

4 土師器片

5 1-7.5YR%黒色土 焼土粒を含む 2-7.5YR%黒褐色土 3-7.5YR%黒褐色土

209号土壌（第52図）

1 III区211-A 径0.9×0.75mの円形 深さ50cm

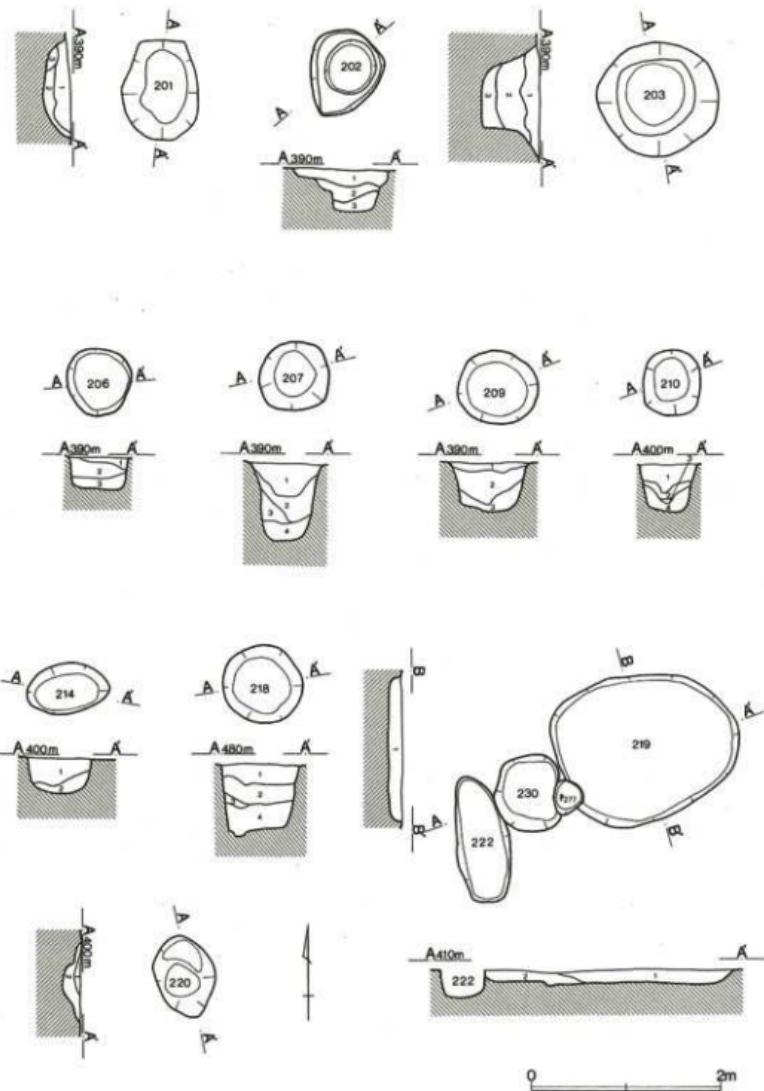
4 土師器片

5 1-7.5YR%黒色土 焼土粒を含む 2-7.5YR%黒褐色土 3-5YR%黒褐色土

210号土壌（第52図）

1 III区211-C 径0.7×0.6mの橢円形 深さ50cm

5 7.5YR%黒色土 焼土粒を含む 2-7.5YR%黒褐色土 3-7.5YR%黒褐色土 4-7.5



第52図 土壌(4)

Y R 1/2 黒褐色土

214号土壤 (第52図)

- 1 III区211-E・F 径0.9×0.55mの楕円形 深さ40cm
5 1-7.5 Y R 1/2 黒色土 焼土粒を含む 2-7.5 Y R 1/2 黒褐色土 3-5 Y R 1/2 黒褐色土

218号土壤 (第52図)

- 1 III区208-B 径0.9×0.8mの円形 深さ70cm
4 土師器片
5 1-7.5 Y R 1/2 黒褐色土 焼土粒を含む 2-10 Y R 1/2 黑褐色土 3-7.5 Y R 1/2 黑褐色土 4-10 Y R 1/2 黑褐色土

219号土壤 (第52図)

- 1 III区208-D 径2.0×1.6mの楕円形 深さ15cm
3 217号ピットに切られる
4 土師器片
5 1-10 Y R 1/2 黒褐色土

220号土壤 (第52図)

- 1 III区208-D 径0.9×0.65mの楕円形 深さ20cm
5 1-5 Y R 1/2 黒褐色土 2-10 Y R 1/2 黑褐色土

221号土壤 (第53図)

- 1 III区207-C 径2.1×0.3mの長楕円形 深さ35cm
5 1-10 Y R 1/2 黒色土 2-10 Y R 1/2 黄褐色土

222号土壤 (第52・53図)

- 1 III区207-D 径1.35×0.6mの長楕円形 深さ30cm
3 230号土壤と接する
5 1-10 Y R 1/2 黒褐色土 2-10 Y R 1/2 黄褐色土

225号土壤 (第53図)

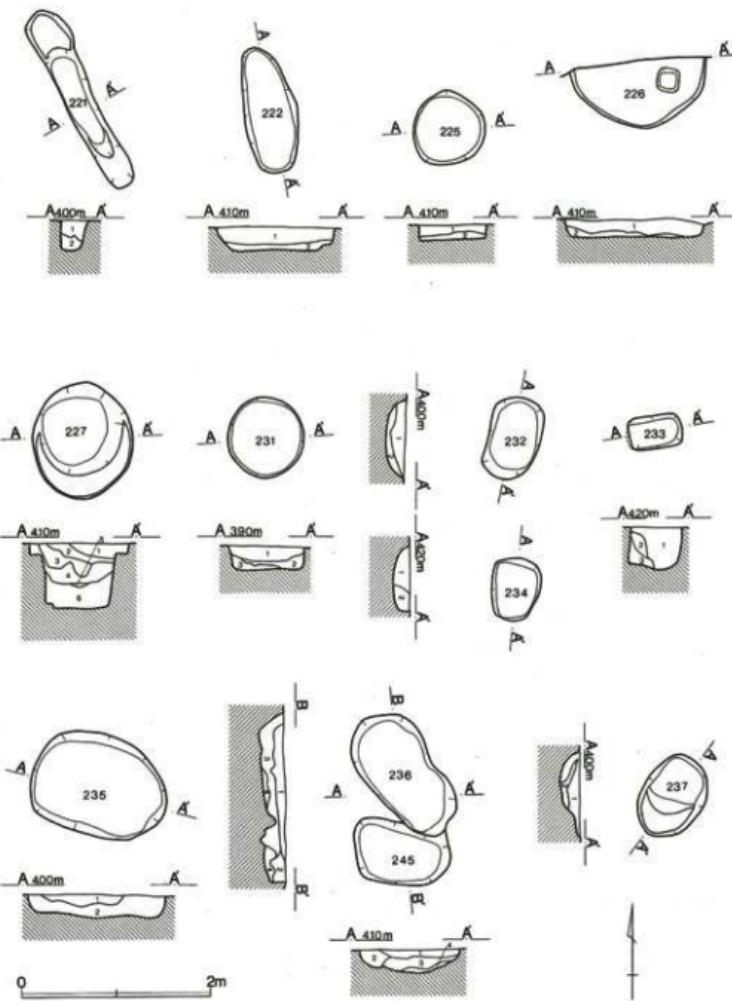
- 1 III区207-F 径0.8×0.8mの円形 深さ15cm
4 土師器片
5 1-7.5 Y R 1/2 黒色土 2-7.5 Y R 1/2 黑褐色土 焼土粒を含む

226号土壤 (第53図)

- 1 III区209-F 径1.5m×不明 (一部調査区外、0.7m以上) の円形 深さ20cm
5 1-7.5 Y R 1/2 褐色土 2-7.5 Y R 1/2 黑褐色土 焼土粒を含む

227号土壤 (第53図)

- 1 III区207-F 径1.2×1.1mの円形 深さ75cm
4 土師器・須恵器片
5 確認面より10cmの部分に三日月状の段をもつ 1-5 Y R 1/2 黑褐色土 2-10 Y R 1/2 褐色土
3-7.5 Y R 1/2 黑色土 4-5 Y R 1/2 黑褐色土 5-5 Y R 1/2 黑褐色土 焼土粒を含む 6-7.5



第53図 土壌(5)

Y R 3/4 黒褐色土

230号土壤 (第52図)

- 1 III区207-D 径0.8×0.8mの不整円形 深さ15cm

- 5 1-10 Y R 3/4 黒褐色土

231号土壤 (第53図)

- 1 III区214-B 径0.9×0.8mの円形 深さ30cm

- 5 1-7.5 Y R 3/4 黒褐色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土 3-10 Y R 3/4 黄褐色土

232号土壤 (第53図)

- 1 III区209-A 径0.9×0.6mの楕円形 深さ20cm

- 5 1-10 Y R 3/4 黒褐色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土

233号土壤 (第53図)

- 1 III区205-F 0.6×0.35mの長方形 深さ45cm

- 5 1-10 Y R 3/4 黒褐色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土 3-5 Y R 3/4 黒褐色土

234号土壤 (第53図)

- 1 III区204-F 径0.7×0.5mの不整楕円形 深さ15cm

- 4 須恵器片

- 5 1-10 Y R 3/4 黒褐色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土

235号土壤 (第53図)

- 1 III区208-A 径1.5×1.1mの楕円形 深さ25cm

- 4 土師器坏、土師器片

- 5 1-10 Y R 3/4 黒褐色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土

236号土壤 (第53図)

- 1 III区207-C 径1.4×0.8mの不整楕円形 深さ25cm

- 3 245号土壤に接する

- 4 須恵器坏、土師高环脚部

- 5 1-5 Y R 1/2 黒色土 2-5 Y R 3/4 黒褐色土 3-5 Y R 3/4 黒褐色土 4-10 Y R 3/4 黄褐色土

237号土壤 (第53図)

- 1 III区209-B 径0.9×0.7mの楕円形 深さ20cm

- 5 1-7.5 Y R 3/4 褐灰色土 2-10 Y R 3/4 黄褐色土

238号土壤 (第54図)

- 1 III区204-E 径1.0×0.65mの不整楕円形 深さ25cm

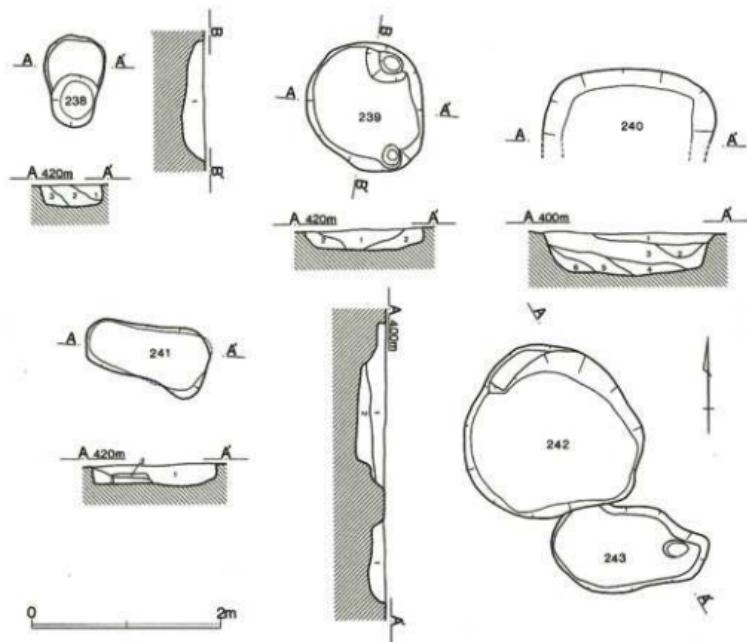
- 5 1-7.5 Y R 3/4 黒褐色土 2-10 Y R 3/4 黑褐色土 3-10 Y R 3/4 黑褐色土

239号土壤 (第54図)

- 1 III区202-E 径1.4×1.25mの楕円形 深さ20cm

- 4 須恵器坏、土師器片

- 5 1-7.5 Y R 3/4 黒褐色土 2-10 Y R 3/4 黑褐色土



第54図 土壌(6)

240号土壌 (第54図)

- 1 III区208-A 径1.8m×不明 (一部調査区外、1.0m以上) の円形 深さ45cm
- 5 1-5 Y R % 黒褐色土 2-10 Y R % 黄褐色土 3-7.5 Y R % 黑色土 焼土粒含む 4-7.5 Y R % 黑褐色土 5-10 Y R % 黄褐色土 6-7.5 Y R % 黑褐色土

241号土壌 (第54図)

- 1 III区202-F 径1.3×0.6mの不整橢円形 深さ25cm

4 須恵器坏

- 5 1-5 Y R % 黑褐色土 2-5 Y R % 黑褐色土 3-7.5 Y R % 黑色土

242号土壌 (第54図)

- 1 III区209-B 径2.0×1.85mの円形 深さ30cm

4 土師器片

- 5 1-5 Y R % 黑褐色土 2-7.5 Y R % 黑褐色土

243号土壤 (第54図)

1 III区209-B 径1.7×0.9mの不整精円形 深さ20cm

3 242号土壤に接する

5 1-5 Y R 1/2 黒色土

245号土壤 (第53図)

1 III区207-C 径1.0×0.65mの不整精円形 深さ15cm

3 236号土壤に接する

5 1-5 Y R 1/2 黒色土 2-5 Y R 3/4 黑褐色土 3-5 Y R 3/2 黑褐色土 4-10 Y R 1/2 黄褐色土

C 井戸状土壤

石御堂遺跡からは、井戸状の深い掘り込みをもつ土壤が18基検出された。すべて素掘りである。ここに示したものの中には井戸と考えるには浅いものもあるが、湧水点が高いことから深さ1m以上の掘り込みのあるものをとりあげた。

なお、土層断面図を示していないものがあるが、降雨・溜水のため崩壊したり、湧水がはげしく計測できなかつたものである。

5号土壤 (第45・55図)

1 III区7-E 径1.2×1.2mの円形 深さ1.5m以上

3 15号土壤を切る

4 板石塔婆片、桶材

8号土壤 (第43・55図)

1 I区5・6-E 径0.85×0.8mの円形 深さ1.0m以上

4 土師器片

5 1-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 2-10 Y R 3/4 黑褐色土 3-7.5 Y R 3/4 暗褐色土 4-10 Y R 3/4 黑褐色土
水分を多く含み、粘性あり

9号土壤 (第45・55図)

1 I区8-B 径0.8×0.8mの円形 深さ1.1m以上

4 板材

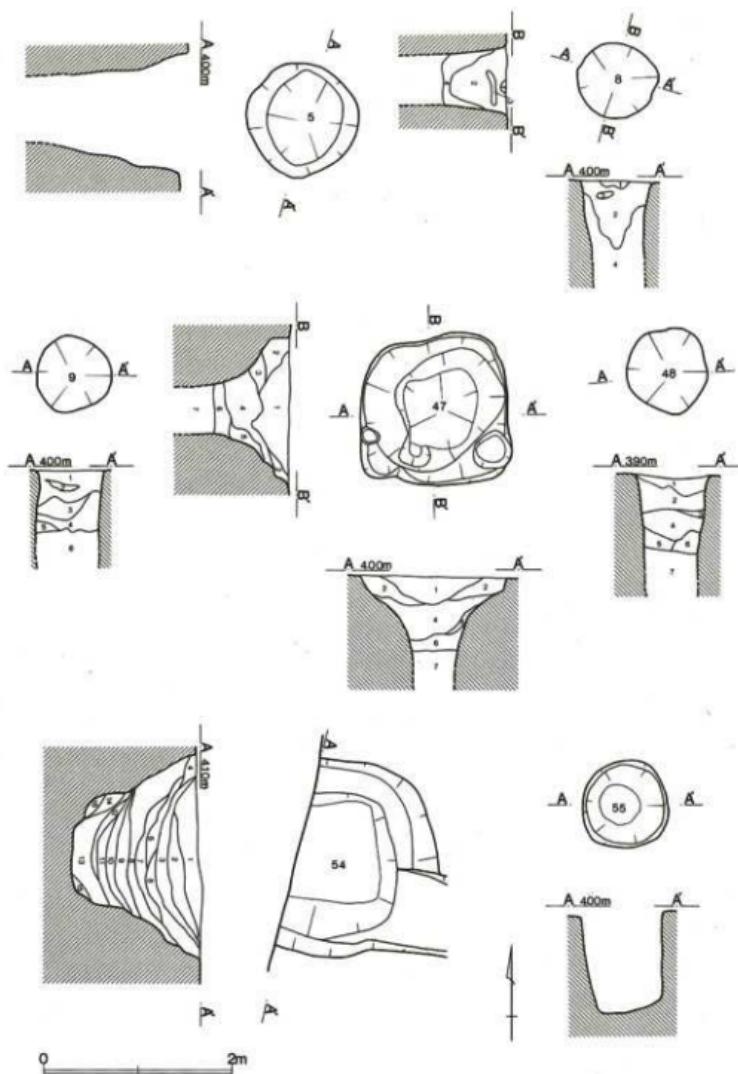
5 1-10 Y R 3/4 黑褐色土 粘性あり 2-10 Y R 3/4 黑褐色土 3-10 Y R 3/4 黑褐色土 粘性あり
鉄分粒子を含む 4-10 Y R 3/4 暗褐色土 粘性あり 鉄分粒子を含む 5-2.5 Y 1/2 黄褐色土
6-5 B G 3/4 暗青灰色土

47号土壤 (第43・55図)

1 I区5・6-E 1.6×1.6mの隅丸方形 深さ1.0m以上

3 17号土壤に切られる

5 1-10 Y R 3/4 黑褐色土 粘性あり 2-10 Y R 3/4 黑褐色土 3-2.5 Y 1/2 暗オリーブ褐色土 粘



第55図 井戸伏土壤(1)

性あり 4-10 YR 4/2 黒褐色土 鉄分・炭化物粒子多く含む 5-10 YR 4/2 暗褐色土 粘性あり 6-2.5 YG 黄灰色土 鉄分粒子多く含む 7-7.5 YR 4/2 灰褐色土 鉄分粒子多く含む

48号土壤 (第43・55図)

- 1 I 区 5-C 径 1.0 × 0.9 m の円形 深さ 1.1 m 以上
- 4 土師器片、鉄滓
- 5 1-2.5 YG 黒褐色土 2-10 YR 4/2 黑褐色土 3-10 YR 4/2 黒褐色土 4-10 YR 4/2 黑褐色土 5-5 GY 4/2 暗オリーブ灰色土 6-7.5 YG 4/2 灰オリーブ色土 7-7.5 YG 4/2 暗緑灰色土

54号土壤 (第41・55図)

- 1 I 区 1-E 径 2.1 × 不明 (一部調査区外、1.5 m 以上) の円形 深さ 1.35 m
- 3 17号溝に切られる
- 4 土師器・須恵器片
- 5 1-10 YR 4/2 黒褐色土 2-10 YR 4/2 暗褐色土 3-10 YR 4/2 黒褐色土 4-10 YR 4/2 黑褐色土 5-10 YR 4/2 黑褐色土 6-2.5 YG 黑褐色土 7-2.5 YG 黑褐色土 8-10 YR 4/2 暗褐色土 9-10 YR 4/2 褐色土 鉄分粒子多く含む 10-10 YR 4/2 褐灰色土 11-7.5 YR 4/2 灰色土 12-5 YG 灰色土 13-2.5 GY 4/2 暗オリーブ灰色土 14-10 YR 4/2 灰色土 15-10 YG 4/2 灰色土

55号土壤 (第41・55図)

- 1 I 区 1-D 径 1.0 × 0.95 m の円形 深さ 1.05 m
- 3 12・14号溝を切る
- 4 土師器片

204号土壤 (第56図)

- 1 III区 212-B 径 1.8 × 1.5 m の橢円形 深さ 1.3 m 以上
- 4 土師器片
- 5 1-7.5 YR 4/2 黒褐色土 2-7.5 YR 4/2 黑色土 3-7.5 YR 4/2 黑色土 4-7.5 YR 4/2 黑褐色土 水分を多く含む

208号土壤 (第56図)

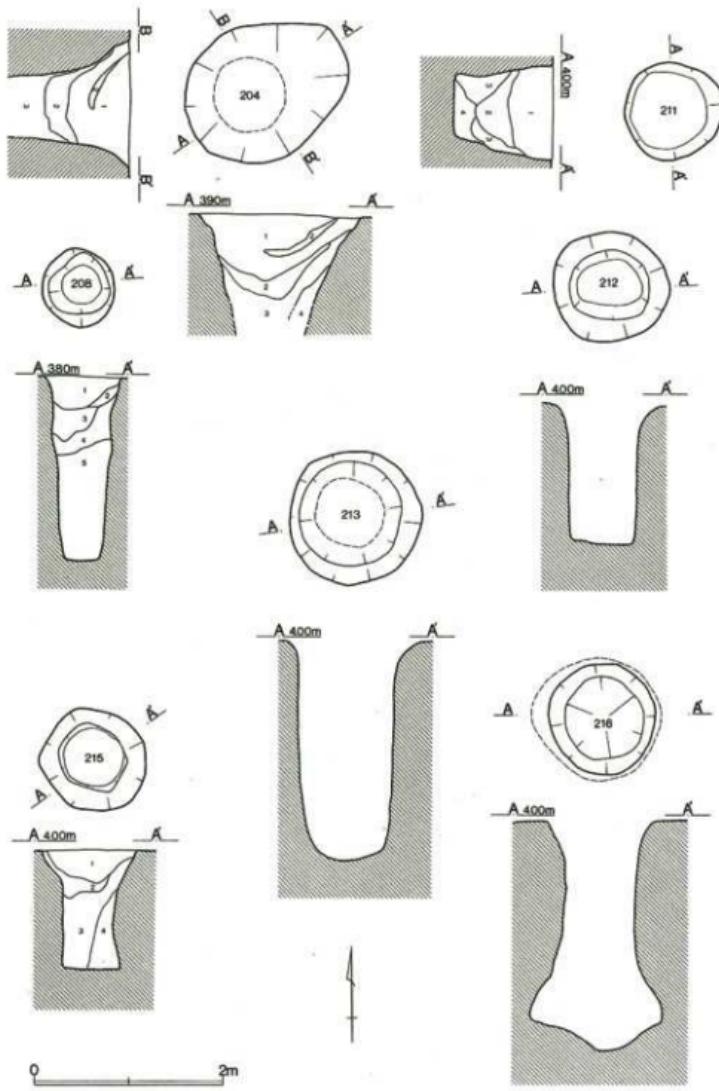
- 1 III区 212-A 径 0.85 × 0.8 m の円形 深さ 2.0 m
- 4 土師器片
- 5 1-10 YR 4/2 黒褐色土 2-10 YR 4/2 黑褐色土 3-10 YR 4/2 黑褐色土 4-10 YR 4/2 黑褐色土 5-7.5 YR 4/2 黑色土

212号土壤 (第56図)

- 1 III区 210-D 径 1.25 × 1.20 m の円形 深さ 1.5 m
- 4 土師器・須恵器片

213号土壤 (第56図)

- 1 III区 210-C 径 1.5 × 1.5 m の円形 深さ 2.3 m
- 4 土師器片



第56図 井戸状土壤(2)

215号土壤 (第55図)

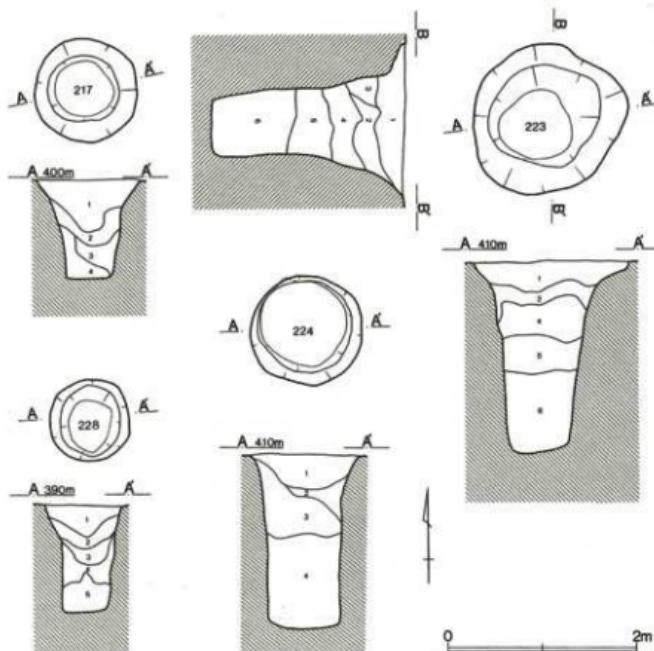
- 1 III区212-E・F 径1.1×1.1mの円形 深さ1.3m
- 4 土師器・須恵器片
- 5 1-7.5YR 5/6黑色土 烧土粒を含む 2-7.5YR 5/6黑褐色土 3-7.5YR 5/6黑色土 4-5
YR 5/6黑褐色土

216号土壤 (第55図)

- 1 III区209・210-B 径1.2×1.15mの円形 深さ2.5m
- 4 土師器・須恵器片
- 5 底面は中央が窪んで、いわゆる井戸の“目玉”となっている。窪みより開きながら立上り、底面は径1.5mまで広がる。底面端よりえぐるように立上ってゆるやかに外反して確認面に至る

217号土壤 (第57図)

- 1 III区208・209-B・C 径1.1×1.1mの円形 深さ1.05m
- 4 土師器片



第57図 井戸状土壤(3)

5 1-7.5 Y R 3/4 黒褐色土 2-10 Y R 3/4 黑色土 3-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 4-10 Y R 3/4 黑褐色土

223号土壤 (第57図)

1 III区207-C・D 径1.7×1.6 mの円形 深さ2.0 m

4 土師器片

5 1-5 Y R 3/4 黑褐色土 烧土粒を含む 2-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 烧土粒を含む 3-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 烧土粒を含む 4-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 水分を含む 5-5 Y R 1/2 黑色土 水分を多量に含む 6-5 Y R 1/2 黑色土 水分を多量に含み軟弱

224号土壤 (第57図)

1 III区207-E 径1.2×1.2 mの円形 深さ1.9 m

4 土師器・須恵器片

5 1-5 Y R 3/4 黑褐色土 2-7.5 Y R 3/4 黑褐色土 3-5 Y R 3/4 黑褐色土 4-7.5 Y R 1/2 黑色土 水分を多量に含む

228号土壤 (第57図)

1 III区215-B 径0.9×0.9 mの円形 深さ1.15 m

4 土師器片

5 1-5 Y R 3/4 黑褐色土 烧土粒を含む 2-10 Y R 3/4 黑褐色土 烧土粒を含む 3-7.5 Y R 3/4 黑色土 4-7.5 Y R 1/2 黑色土 5-7.5 Y R 1/2 黑色土

D 出土遺物

a 陶磁器

石御堂遺跡では、中・近世の遺物がI区の溝から集中して検出された。13世紀から18世紀にかけて日常に使用されていた種々の製品がみられる。

これらの産地は主に瀬戸・美濃・常滑方面であるが在地産のものも含まれている。

天目茶碗 (第58図1~3、図版24-1~3)

1は11号溝2-Bより出土した。大窯Ⅷ期のものと考えられる。2は11号溝2-Bより出土した。17世紀第2四半期。3は11号溝2'-Bより出土した。17世紀末葉のものであろう。

染付茶碗 (第58図4~6、図版24-4~6)

4は11号溝2-C、5は11号溝2-B上層、6は11号溝3-E下層より出土した。

4~6とも近世の、伊万里系統の染付と思われるが、詳細な時期は不明である。

志野織部茶碗 (第58図7、図版24-7)

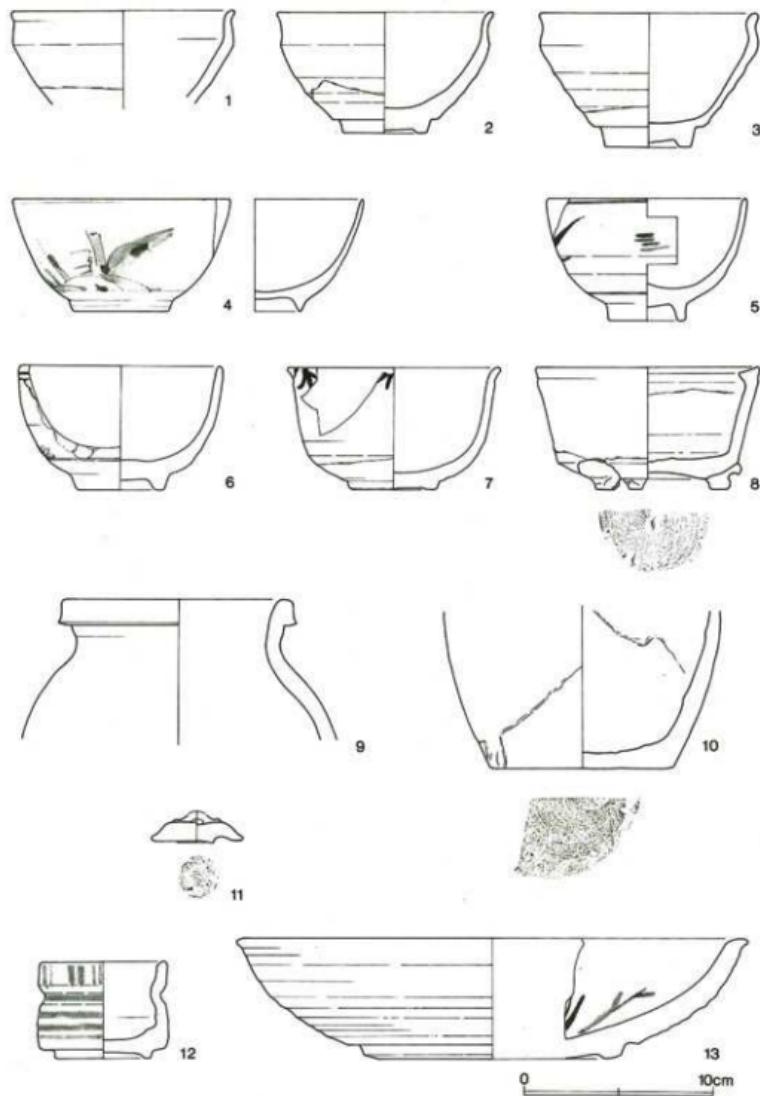
7は14号溝より出土した。17世紀第2四半期のものと思われる。

美濃灰釉香炉 (第58図8、図版24-8)

8は1号溝4-Dより出土した。15世紀中葉のものであろう。

甕 (第58図9・10、図版25-1・2)

9は17号溝2-Eより出土した。15世紀後葉の常滑のものであろう。



第58図 陶磁器(1)

10は1号溝3-D・6-Dより出土したものである。15世紀後葉の美濃のものであろう。

蓋 (第58図11)

11は11号溝3-Eより出土した。15世紀前半の美濃のものと思われる。

志野織部筒向付 (第58図12、図版25-3)

12は11号溝2-Cより出土した。17世紀初頭、志野織部最盛期のものであろう。

破損したものを二次利用したもの。

志野織部浅鉢 (第58図13、図版25-4)

13は11号溝2-B上層より出土した。17世紀初頭のものであると思われる。

表7 陶磁器(1) (第58図) 観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	天目 茶碗	口径推定 12.0	厚さ 0.4~0.6cm 底部欠 斜めに立上り胴上部で直に 立ち、口縁部外反	ろくろ水挽き整形 内面~ 外面下半部にかけて暗褐色 の鉄釉	白色微細粒・無色微細粒を 含む 2.5YR 4/6 暗赤褐色 (釉)
2	天目 茶碗	口径推定 11.6 底径 4.3 器高 6.5	厚さ 0.3~1.2cm 厚みのあ る底部よりゆるやかに外反 して立上り胴上部で内にく びれ、口縁部外反	ろくろ水挽き整形 けずり 出し高台 内面~外面下半 部にかけて赤褐色の鉄釉	明褐色粒多量・灰色砂粒・ 灰褐色石粒を含む 5 YR 4/6 赤褐色 (釉)
3	天目 茶碗	口径推定 11.6 底径 4.6 器高 7.7	厚さ 0.3~1.1cm 厚みのあ る底部より斜めに立上り胴 上部で内にくびれ、口縁部 は厚みを増して外反	ろくろ水挽き整形 けずり 出し高台 体部下半もうず 巻状に2周分けずりによる 整形 内面~体部下半にか けて赤黒色の鉄釉	乳白色石粒多量 10R 4/6 赤黒色 (釉)
4	茶碗	口径推定 10.8 底径 5.0 器高 6.0	厚さ 0.2~0.7cm 丸みをお びた高台付の底部よりゆる やかに内湾しながら斜めに 立上る	ろくろ整形 けずり出し高 台 手書き染付後上薬を施 す	高台端部に砂の付着がみら れる 5 PB 4/6 明青灰色
5	茶碗	口径推定 10.6 底径 4.0 器高 6.5	厚さ 0.3~1.3cm 厚みのあ る底部からゆるやかに内湾 しながら斜めに立上る	ろくろ整形 深いけずり出 し高台 手書き染付後上薬 を施す	高台端部に砂の付着がみら れる 5 PB 4/6 明青灰色
6	茶碗	口径推定 10.6 底径 4.5 器高 6.6	厚さ 0.4~1.1cm 厚みのあ る底部からゆるやかに内湾 しながら斜めに立上る	ろくろ整形 厚みのあるけ ずり出し高台 手書き染付 後上薬を施す	高台端部に砂の付着がみら れる 10G 4/6 明緑灰色
7	茶碗	口径推定 11.5 底径 4.3	厚さ 0.5~0.8cm 厚みのあ る底部からなだらかに内湾 して立上り口縁部外反	ろくろ水挽き整形 底部右 回転糸切り後高台けずり出 し 体部下半もけずりによ	暗褐色粒少量含む 胎土10Y R 4/6 灰白色 釉2.5Y 4/6 浅黄色

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
8	香炉	器高 6.5		る調整 口縁部に鉄絵筆書き後、長石釉を施す	
		口径推定 12.0	厚さ 0.6~1.0cm 凹凸のある底部より急に斜めに立上がる 口縁は内傾して平ら	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り 底部内面はけずりによる調整 脚は手びねりの貼り付け 体部のみ内・外面部を施す	底部が一部すすけている 褐色微細粒を含む 胎土7.5YR 5明褐灰色 釉10Y%オリーブ灰色
		底径推定 6.2	3つの脚をもつ		
		器高 6.5			
9	甕	口径推定 12.6	厚さ 0.8~1.2cm 脊部から内傾し、頸部で外反して外に開き気味の段をもち、口縁は丸みをおびる	内面に粘土接合痕わずかに残る ナデによる調整	乳白色石粒多量に含む 黒色の吹き出し釉がみられる 10R%赤褐色
10	甕	底径 9.4	厚さ 0.6~1.2cm 平らな底部より急に立上り ゆるやかに内湾する	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り 体部内外面とも赤黒色の鉄釉	褐色粒を含む 胎土5YR 5灰白色 釉2.5YR 5赤黒色
11	蓋	径推定 4.9	厚さ 0.3~1.1cm 厚みのある中央部からなだらかに端部に下りる 山型のつまみ(一部欠損)	ろくろ整形 底面右回転糸切り 上面のみ赤黒色の釉	白色石粒含む 胎土5YS 5灰白色 釉10R 1.7赤黒色
12	筒向付	口径推定 6.8 底径 5.0 器高 5.2	平らな底部より直に立上り 一組くびれをもち、さらに直に立上る	ろくろ水挽き整形 高台はけずり出し 鉄絵筆書き後長石釉	口縁部はよく磨ってあり、 二次利用品 5Y%灰白色
13	浅鉢	口径推定 27.4 底径推定 13.8 器高 6.4	厚みのある底部からゆるやかに内湾して立上り、口縁端部外反	ろくろ水挽き整形 高台は浅いけずり出し 鉄絵筆書き後長石釉	高台部下面と、口縁部上面がよく磨ってある 2.5Y灰白色

■ (第59図、図版25-5~10)

1は口縁部に灰釉を施した皿である。1号溝6-Dより出土した。15世紀後半のものであろう。

2は鉄釉皿である。16号溝2-D上層より出土した。本遺跡には少ない大窯II期のものである。

3は灰釉皿。12号溝2-Bより出土した。

4~8は長石釉を施した皿である。4は16号溝2-D、5は11号溝2-B上層、6は16号溝2-D上層、7は106号溝108-D、8は7号溝4-Eより各々出土した。3~8は大窯V期のものであろう。

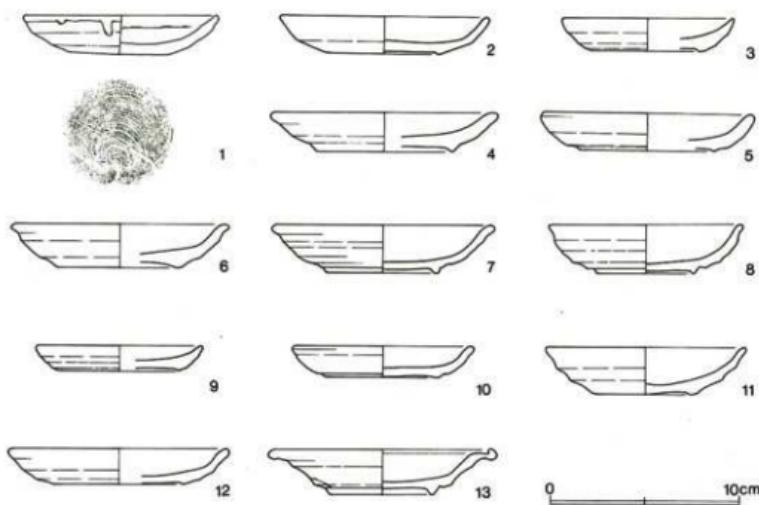
9は灰釉皿。I区7-Eより出土。

10~12は長石釉を施した皿で、10は105号溝108-D、11は11号溝、12は11号溝2-C上層より

出土。

9～12は17世紀第1四半期のものと思われる。

13は灰釉皿で、11号溝より出土した。17世紀第2四半期のものであろう。



第59図 陶磁器(2)

表8 陶磁器(2) (第59図) 観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	皿	口径 10.2 底径 5.3 器高 2.3	厚さ 0.3~0.5cm 平らな底 部からごくゆるやかに内湾して立上る	ろくろ整形 底部右回転糸切り	内・外面ともすすぐれている 灰色砂粒含む 胎土2.5Y 1/2灰黄色 色10Y 1/2オーブ 灰色
2	皿	口径推定 12.4 底径推定 6.0 器高 2.0	厚さ 0.6~0.4cm 平らな底 部から高台をへて斜めにゆるやかに立上り、脚部半ばで角度を深くする	ろくろ整形 削り込み高台 鉄釉を施釉	褐色粒を含む 胎土7.5Y 1/2明褐色 釉2.5Y 1/2黄灰色
3	皿	口径推定 9.2 底径推定 5.8 器高 1.7	厚さ 0.2~0.8cm 平らな底 部から高台をへてゆるやかに内湾して立上る	ろくろ整形 削り込み高台 灰釉を施釉	白色微細粒を含む 釉10Y R 1/2灰白色

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	皿	口径推定 12.2 底径推定 7.4 器高 2.1	厚さ 0.4~0.7cm 平らな底 部から高台をへてごくゆる やかに立上り口縁部や外 反する	ろくろ整形 底部右回転糸 切り ろくろ整形 削り出し高台 長石軸を施す	白色石粒含む 釉5YR灰白色
5	皿	口径推定 11.6 底径 5.6 器高 2.5	厚さ 0.5~0.6cm 平らな底 部から高台をへて外る気味 に立上りゆるやかに内湾す る	ろくろ整形 削り出し高台 長石軸を施す	白色微細粒を含む 釉5YR灰白色
6	皿	口径推定 11.6 底径推定 6.6 器高 2.3	厚さ 0.3~0.6cm 凹面気味 の底部から高台をへて外反 して立上り、口縁つまみ出 すように外反する	ろくろ整形 削り出し高台 長石軸を施す	黒色微細粒を含む 釉2.5YR灰白色
7	皿	口径推定 12.3 底径 6.0 器高 2.6	厚さ 0.3~0.4cm 平らな底 部より外反して立上りゆる やかに内湾し、口縁はつま み出すように外反する	ろくろ整形 削り出し高台 長石軸を施す	無色石粒含む 釉7.5YR灰白色
8	皿	口径推定 10.4 底径 5.2 器高 2.6	厚さ 0.3~0.5cm 平らな底 部より高台をへて外反して 立上りゆるやかに内湾し口 縁つまみ出るように外反	ろくろ整形 削り出し高台 体部半ばまで削り調整の痕 跡 長石軸を施す	底部に3箇所豆トテン痕 釉10YR灰白色
9	皿	口径推定 9.4 器高 1.4 底径推定 6.3	厚さ 0.2~0.5cm 平らな底 部より高台をへて斜めに立 上りゆるやかに内湾する	ろくろ整形 削り出し高台 体部半ばまで削り調整の痕 跡 長石軸を施す	底部に1箇所豆トテン痕 釉5YR浅黄色
10	皿	口径推定 9.6 底径推定 6.0 器高 1.7	厚さ 0.3~0.5cm 凹面気味 の底部から高台をへてゆる やかに内湾する	ろくろ整形 削り込み高台 灰軸を施す	釉5YR灰白色
11	皿	口径推定 10.6 底径 5.2 器高 2.5	厚さ 0.3~0.6cm 凹凸のあ る底部より高台をへて外反 気味に立上りゆるやかに内 湾する	ろくろ整形 ごく浅い削り 出し高台 長石軸を施す	底部に2箇所豆トテン痕 釉2.5YR灰黄色
12	皿	口径推定 11.8	厚さ 0.4~0.6cm 凸面気味 の底部より高台をへて浅く	ろくろ整形 浅い削り込み 高台 長石軸を施す	白色微細粒を含む 釉5YR灰白色

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
13	皿	底径推定 6.8	斜めに立上りごくゆるやかに内湾、口縁はやや外反		
		器高 1.9			
		口径推定 12.3	厚さ 0.3~0.5cm 平らな底部より高台をへて外反気味	ろくろ整形 削り出し高台	灰白微細粒を含む
		底径推定 5.5	に立上り、口縁は強く外反して、波頭様に内に入る	灰釉を施す	胎土10YR5%灰白色 釉2.5Y5%灰黄色
		器高 2.4			

縦部鉄絵皿 (第60図、図版26)

1は11号溝3-D上層より出土した。草文様あるいは文字の一部と思われる図柄である。
 2は105号溝108-Eより出土。周囲の線引きのみを残す。
 3は105号溝108-Dより出土。線引きの中に笪文様。
 4は106号溝108-Eより出土。繊細な筆書きで、描かれているのは蔓草文様と思われる。これは3の笪文様と同様に鉄絵皿の文様の中でも特に多いもので、長期に広範囲で作られたものとされている。(古川・竹本 1979)

1~4は17世紀第1四半期のものと思われる。

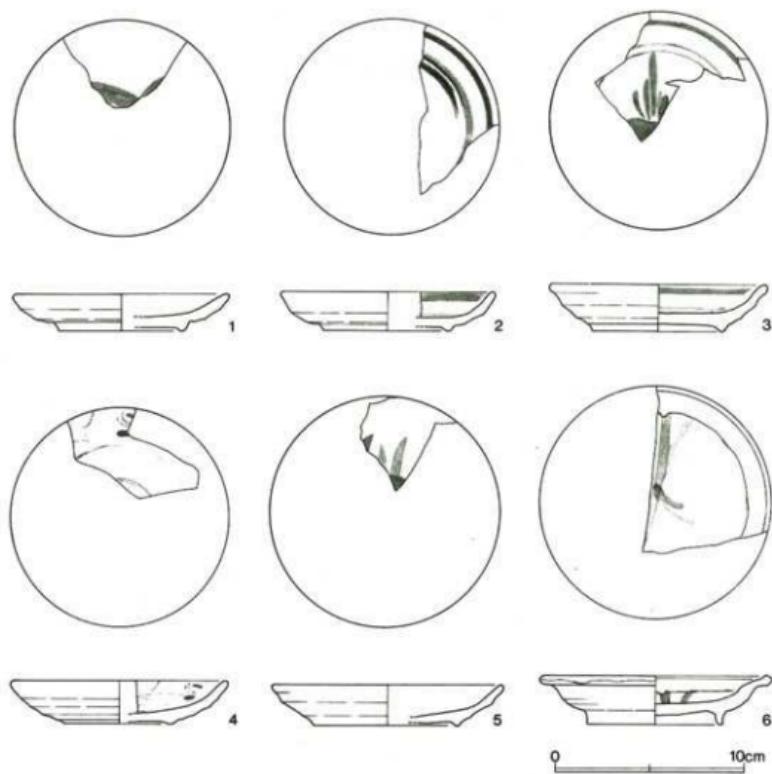
5は115号土壙より出土した。草文様であろうか。

6は11号溝3-E上層より出土した。文様はおそらく植物を描いたものであろう。本来この形式の縦部鉄絵皿は口縁部に緑釉を施すが、灰釉が施されており、略されたものであろう。

5・6とも17世紀第2四半期のものと思われる。

表9 陶磁器(3) (第60図) 観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	皿	口径推定 11.6	厚さ 0.5~0.6cm 平らな底部から高台をへて外反気味	ろくろ整形 削り出し高台	5Y5%淡黄色
		底径推定 6.7	に開き、浅く斜めに立上る	体部もほとんど削りによる調整	
		器高 2.0		鉄絵を描き、長石釉を施す	
2	皿	口径推定 11.6	厚さ 0.4~0.5cm 平らな底部から高台をへて斜めに立上り、	ろくろ整形 浅い削り出し	2.5Y5%淡黄色
		底径推定 6.8	体部半ばで角度を深める	高台 体部もほとんど削りによる調整	
		器高 2.1		鉄絵を描き、長石釉を施す	
3	皿	口径推定 12.8	厚さ 0.4~0.6cm 平らな底部から高台をへて外反気味	ろくろ整形 削り出し高台	10YR5%に近い黄橙色
		底径推定 7.0	に立上り、ゆるやかに内湾して、口縁はやや外反	体部下半削りによる調整	
		器高 2.5		鉄絵を描き、長石釉を施す	



第60図 青磁器(3)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
4	皿	口径推定 11.6 底径推定 5.8 器高 2.8	厚さ 0.4~0.5cm 平らな底 部から高台をへて浅く斜め に立上る	ろくろ整形 浅い削り出し 高台 体部下半削りによる 調整 鉄絵を描き、長石釉 を施す	2.5Y4灰黄色
5	皿	口径推定 12.4 底径推定 7.8 器高 2.2	厚さ 0.3~0.5cm 平らな底 部から高台をへて外反気味 に立上り、口縁近くで角度 を深める	ろくろ整形 浅い削り出し 高台 体部下半削りによる 調整 鉄絵を描き、長石釉 を施す	白色砂粒を含む
6	皿	口径推定	厚さ 0.3~0.7cm 凸面の底	ろくろ整形 ていねいな削	底部内面にほぼ同じ底径を

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		12.0 底径推定 7.2 器高 2.6	部より高台をへて内湾気味に立上り、口縁近くで水平に開いて口縁は波頭様に上に立つ	り出し高台 体部下半削りによる調整 鉄絵を描き長石釉 口縁部のみ灰釉を重ねる	もつ重ね焼き痕 胎土 5R右明赤灰色 口縁部 5Y左灰オリーブ色 内面 2.5Y左灰黄色

常滑甕（第61図、図版27）

1は17号溝より出土した。口縁部・肩部・底部が残っており、各々接点はないが、胎土その他より同一個体と思われる。

2は114号土壇より出土した。上半が欠損している。

1・2とも15世紀末～16世紀初頭のものと考えられる。

表10 常滑甕（第61図）観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	甕	口径 39.0 胴径 55.0 底径 14.8 器高 49.0 全て推定値	厚さ 0.9～1.3cm 口縁部 2.5cm 細かい凹凸のある 底部より斜めに開き気味に 立上り胴上半で直に立ち肩 部で内締する 口縁は内側 丸くせり出し、端面はくぼ みをもつ	内面底部近くにわずかに粘 土接合痕がみられる 体部 外側最下部には竜巻状のもの でこそぎ上げ削った痕跡 その上部に押え具のものと 思われる痕がある	乳白色石粒多量・黒色石粒 多量・黄褐色石粒を含む 焼成よし 外面にはツヤが 出ている 7.5R左に赤褐色
2	甕	底径推定 11.5	厚さ 0.9～1.1cm 平らな底 部より角度をもって外反氣 味に立上りゆるやかに内溝 する	胴部内面と外面下部に指痕 外側下部には竜巻状のもので こそぎ上げた痕跡 その上 部に押え具のものと思われ る痕がある	大粒の乳白色石粒・褐色石 粒を含む 内面胴下部に鉄 の付着がみられる 10R左暗赤灰色

押印文様（第62図）

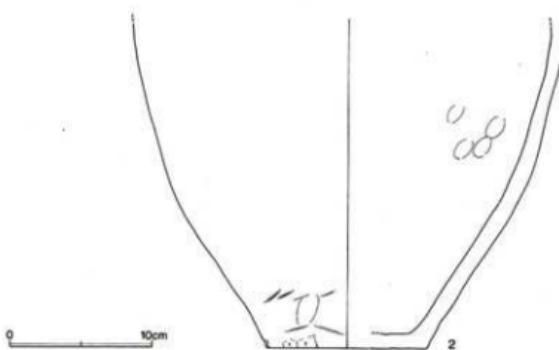
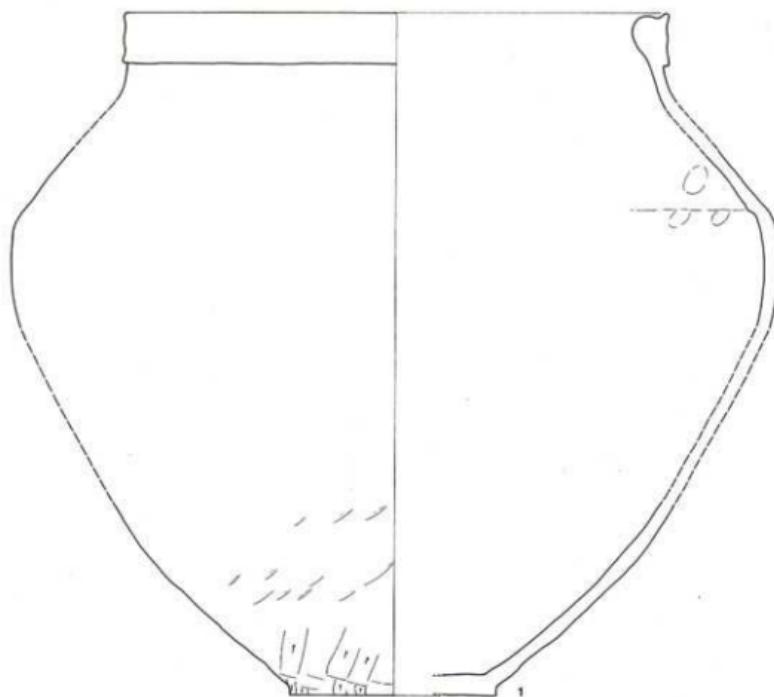
常滑甕の破片で押印文様をもつものが3点出土している。

1と3は19号土壇、2は1号溝3-Dより出土した。

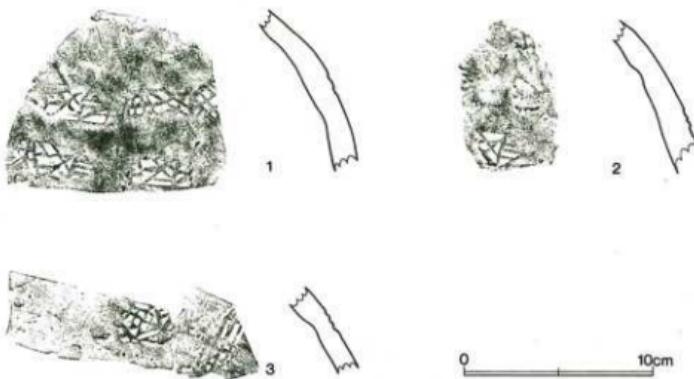
押印文様には、家紋や文字を表現するものなどがあるが、1～3は格子目と斜線を基調としている。

1の破片に表われているのは2つの押印の組み合わせたもので、その1つが2の破片に表われている。1の左下文様の右側と、2の下の文様は同一である。

押印文様は、鎌倉時代末から室町時代にかけて甕の装飾的なものとなるようである。(杉崎ほか
1981)



第61図 常滑窯



第62図 押印文様

掻り鉢（第63・64図、図版28-1・2）

第63図は内面に櫛目を施したもの、第64図は櫛目は施されていないが、用途は掻り鉢であるものとして分類した。

第63図1は1号溝4-Dと17号溝3-Dより出土した。在地の土で焼かれたものと思われる。

2は106号溝より出土した。美濃方面の産出であろう。

1・2とも17世紀後半代のものと考えられる。

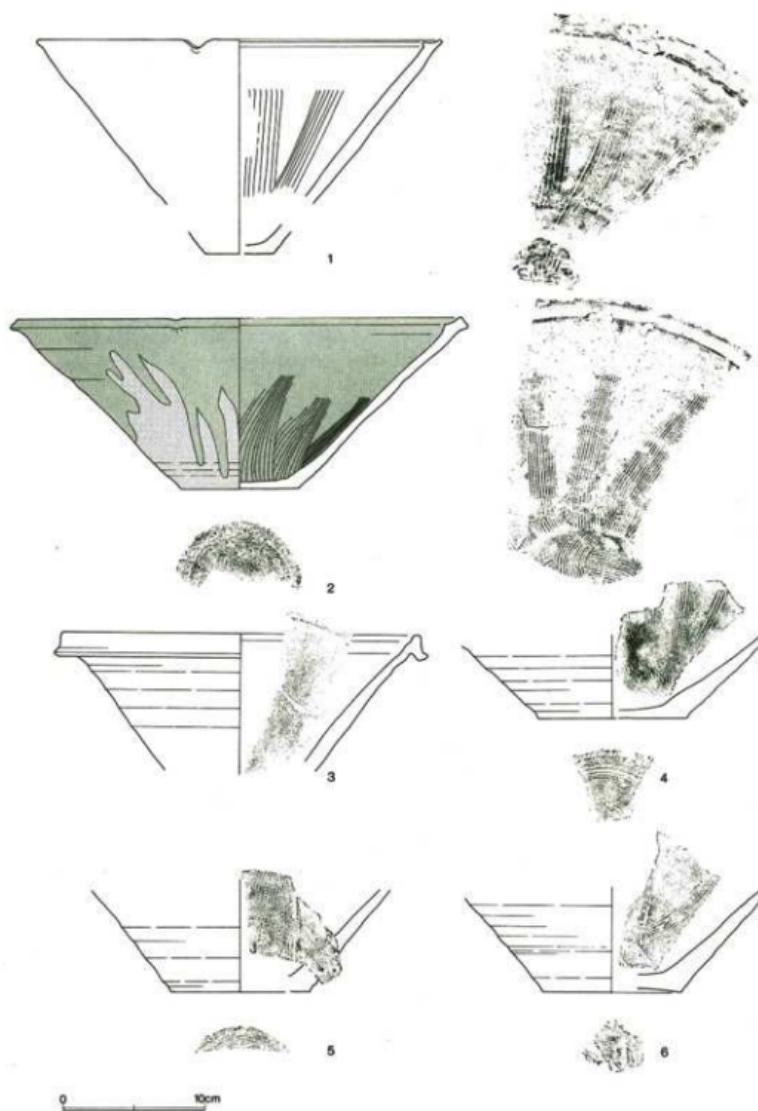
3は16号溝2-Dと17号溝3-Dより出土した。大窯V期のものであろう。

4は1号溝1-Eより出土した。大窯I期のもの。

5は16号溝3-C、6は11号溝3-D上層より出土した。いずれも大窯V期のものと思われる。

第II 掻り鉢(1) (第63図) 観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	掻り鉢	口径 29.0 底径 4.8 器高 15.5 全て推定値	厚さ0.6~1.0cm 平らな底 部より斜めに立上る 口縁 は上端をくぼめられた時、 両側に丸みをおびて突出し たものか 片口をもつ	ろくろ整形 底面と体部上 部まで櫛を引いてある 片口は簡単につまみ出して いる	黒色砂粒多量・灰色砂粒・ 無色石粒を含む 10YR 4/5褐色
2	掻り鉢	口径 31.8 底径推定 8.4 器高 12.2	厚さ0.5~0.9cm 平らな底 部より斜めに立上る 口縁 は頂部と内・外側に稜をも つ 片口をもつ	ろくろ整形 片口は簡単に つまみ出している ほぼ全 面に鬼板輪がかかる 大ま かな櫛引き	乳白色砂粒多量に含む 10R 4/5暗赤褐色

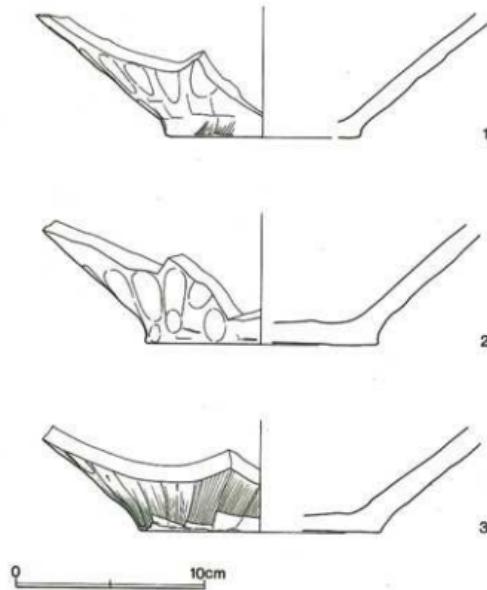


第63図 摘り跡(1)

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
3	擂り鉢	口径推定 25.6	厚さ0.6~1.1cm やや外反 気味に口縁にいたり、口縁 は折返し	ろくろ整形 細かい備目を 入れている 暗灰色の鉄軸 を施す	白色微細粒・乳白色石粒を 含む N 3 (YR) 暗灰色
4	擂り鉢	底径推定 10.6	厚さ0.5~1.5cm 平らな底 部より浅く斜めに立てる	ろくろ整形 底部回転糸切 り 灰色の軸を施す	白色石粒を含む 7.5 YR 灰色
5	擂り鉢	底径推定 10.0	厚さ0.6~1.1cm 平らな底 部より角度をもって斜めに 立ち上る	ろくろ整形 底部回転糸切 り 褐灰色の鉄軸を施す	乳白色石粒多く含む 5 YR 灰褐色
6	擂り鉢	底径推定 9.8	厚さ0.6~1.5cm 凹面の底 部より角度をもって斜めに 立てる	ろくろ整形 底部右回転糸 切り 灰色の軸を施す	灰白色粒を含む N 4 (YR) 灰色

第64図-1は1号溝
3-D・4-Dと11号
溝3-Dおよび17号溝
2-Eより出土。

2は9号溝3-C、
3は1号溝3-Dより
各々出土している。
1~3いずれも15世
紀末~16世紀初頭にか
けての大窯にともなう
ものであろう。



第64図 擂り鉢(2)

表12 挖り鉢(2)(第64図)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	掘り鉢	底径推定 12.4	厚さ1.0~1.1cm 凹面気味の底部より外反して斜めに立てる	底部の円盤に体部を接合し細い板状具とユビでの押えその上にユビナデ上げ痕	内面はよく磨られている白色砂粒多量に含む 2.5YR 4/6灰赤色
2	掘り鉢	底径推定 10.4	厚さ0.8cm 平らな底部より外反して斜めに立てる	同 上 体部最下部に一部刷毛目がみられる	内面はよく磨られている底部に砂付着 白色砂粒・乳白色石粒・灰色砂粒多量に含む 2.5YR 4/6におい赤褐色
3	掘り鉢	底径推定 12.8	厚さ0.8~1.2cm 凹面気味の底部より外反気味に斜めに立てる	底部の円盤に体部を接合し接合部は板状具で押え、その上部を刷毛であらかじめ調整ユビ痕もわずかに見られる	内面はよく磨られている白色石粒・乳白色石粒・黒色砂粒含む 7.5R 4/6におい赤褐色

鉢付土鍋(羽釜)(第65図1、図版28-3)

105号溝108-Cより出土した。10×5cm程の破片ではあるが、出土例が少ないので復元して紹介する。室町時代のものであろう。

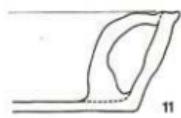
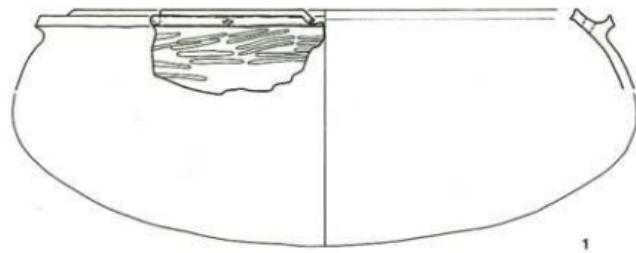
焰烙(第65図2-12)

1は1号溝4-D、2は106号溝108-D、3は16号溝2-D上層、5は17号溝3-D、6は6号溝2-D上層、7は16号溝2-D、8は1号溝3-D、9は11号溝2-C、10は17号溝3-D、11は11号溝2-C上層、12は11号溝2-B下層より出土した。

9を除いては、内耳付近のみの破片であるが、内耳の型態の変化が追えるので紹介しておく。

表13 土鍋・焰烙(第65図)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	鉢付 土鍋	口径推定 27.0 脚部径推定 33.5	厚さ0.5cm 口縁部よりなだらかに下りて鉢をもつ 径0.4cmの貫通孔が2ヶ所にある(間隔5.0cm)	口縁一鉢にかけては横ナデ 脚部は横方向のタキ目 脚部内面は横ナデ	白色砂粒・黒色砂粒を含む 10YR 4/6灰白色
2	焰烙	器高 4.6	厚さ0.5~0.7cm 内耳は体部半ばに付く 外面焼け	底部円盤に体部を接合し、 ユビ押えによる整形 体部上半はナデ	黒色砂粒を含む 5YR 4/6明褐色
3	焰烙	器高 5.6	厚さ0.5~0.9cm 内耳は体部半ばに付く 外面焼け	同 上	黒色砂粒・褐色粒を含む 7.5YR 4/6におい褐色
4	焰烙	不明	厚さ0.4~1.0cm 内耳は体部下半に付く 外面焼け	ユビ押えによる整形 体部上半はナデ	黒色砂粒・白色微細粒含む 10YR 4/6灰黃褐色土



0 10cm

第65図 土鍋・培壘

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
5	焙烙	不明	厚さ0.7~1.5cm 内耳は体部下半に付く 外面焼け	ユビ抑えによる整形 体部上半はナデ	乳白色石粒・金雲母多量に含む 5 YR 5/4明褐色
6	焙烙	器高 5.6	厚さ0.6~0.8cm 内耳は体部下半に付く 外面焼け	同 上	白色微細粒・黒色砂粒を含む 10 Y R 5/4褐灰色
7	焙烙	器高 5.5	厚さ0.5~0.8cm 内耳は体部最下に付く 外面焼け	同 上	白色微細粒を含む 10 Y R 5/4褐灰色
8	焙烙	器高 5.7	厚さ0.5~1.0cm 内耳は体部最下に付く 外面焼け	同 上	白色微細粒・褐色粒含む 5 Y 5/4灰色
9	焙烙	口径 38.2 底径推定 31.6 器高 5.2	厚さ0.8~1.0cm 内耳は体部最下~底部に付く 外面焼け 3方に内耳が鋭角二等辺三角に配置される	同 上	乳白色石粒・金雲母含む 10 Y R 5/4暗赤褐色
10	焙烙	器高 5.5	厚さ0.5~1.0cm 内耳は底部に付く 外面焼け	同 上	白色石粒・灰色砂粒含む 10 Y R 5/4褐灰色
11	焙烙	器高 5.3	厚さ0.5~0.9cm 内耳は底部に付く 外面焼け	同 上	黒色砂粒・淡黄色粒含む 10 Y R 5/4に近い黄橙色
12	焙烙	器高 6.0	厚さ0.7~1.1cm 内耳は底部に付く 外面焼け 口縁は丸みをもつ	同 上	黒色砂粒・白色微細粒含む N 3 暗灰色

b 木製品

本遺跡中、特にI区は青色粘土層まで掘り込んだ深い溝が多く、水分を含んだ土層中から木製品が多数出土した。

それらの主だったものの樹種の同定を依頼し、その結果を付篇1に載せた。各木製品の説明文中のISFはサンプルNoで、付篇および写真図版内のNoと照合する。

楕 (第66図1~4、図版29-2)

1 は16号溝より出土。底径7.2cm。体部外面と高台部は黒漆塗の上に朱漆の線引き文様。体部内面はくすんだ赤漆塗。樹種キハダ、ISF13。

2 は16号溝より出土。口径推定17.0cm。外面朱漆、内面黒漆塗わずかに残る。外面の一部に焼けこげ痕。木目が整って美しく、大きさから見て鉢としてもよい。樹種クリ、ISF12。

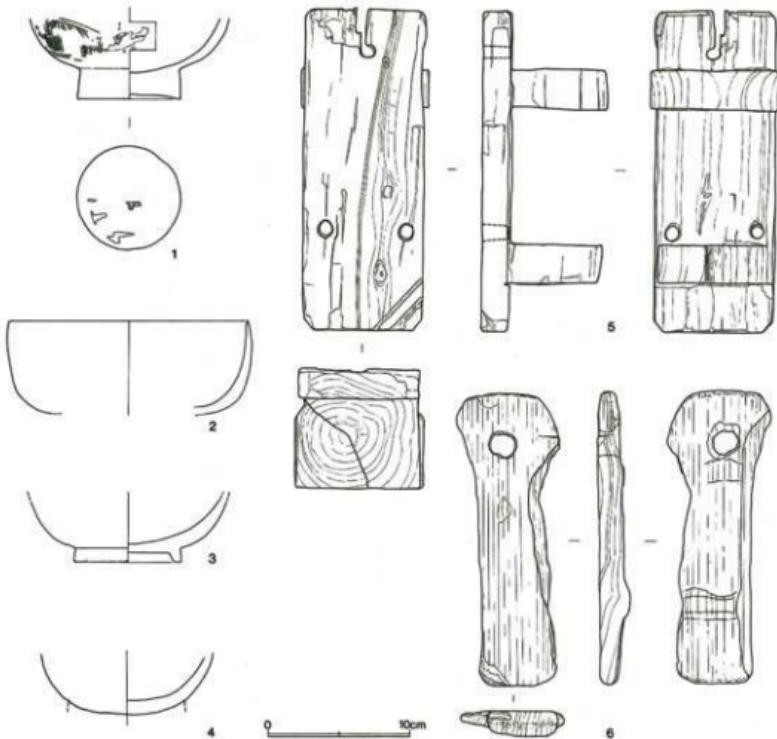
3 は16号溝より出土。底径7.6cm。内・外面・底部とも黒漆塗。樹種クリ、ISF14。

4は13号溝より出土。内面朱漆、外面黒漆塗。高台が付いていたようである。樹種ブナ類、ISF 10。

下駄 (第66図 5・6、図版29-1)

5は11号溝より出土。長さ22.7cm・幅8.7cm(歯の一部9.2cm)・高さ8.5~8.9cm。角材を鋸様のもので切り込み、歯を作り出している。四隅は面取りされており、後部右隅に2条併列して装飾的線刻が施される。貫通孔は3つあり、先端部の孔はほぼ中央にあけられている。後ろ側の歯一部欠損。樹種スギ、ISF 6。

6は16号溝より出土。長さ23.8cm、幅は現存7.4cm。歯は作り出しであるが残存状態はよくない。貫通孔は先端部1つのみ残る。樹種ケヤキ、ISF 29。



第66図 木製品

桶材（第67図1～5、図版30）

1は16号溝より出土した。両端に丸みをもって調整が施してあり、3箇所に釘によるものと思われる深さ2.5～3cmの小穴がみられる。木蓋の一部と考えられる。樹種スギ、ISF7。

2は16号溝2-Dより出土。両端がやや丸みをおびており、桶の底の一部であろう。樹種トネリコ、ISF18。

3は11号溝3-C下層より出土。両端部を丸尖りに調整してある。桶材の一部。樹種スギ、ISF15。

4は5号土壙より出土した。桶材の一部であろう。樹種スギ、ISF20。

5は16号溝2-Dより出土した。桶材の一部。樹種モミ類、ISF17。

男根型木製品（第67図6）

6は11号溝3-Dより出土した。男根信仰に関わる遺物であろうか。樹種グミ類、ISF4。

箸状木製品（第67図7、図版30）

7は224号土壙より出土。箸あるいは、薬莢屋根等に用いるとめ串のいづれかであろう。樹種スギ、ISF28。

加工材（第67図8・9、図版30）

8・9とも11号溝より出土した。8は図の下部左側より下端にかけて加工痕をもつ。樹種クリ、ISF30。

9は断面が湾曲しているが、その凸面に加工痕(刃物のくい込んだ痕跡)をもつ。樹種ヒノキ類、ISF2。

板材（第68図1～3・5、図版30）

1は16号溝より出土。両面とも刀物の当たった痕跡がみられる。上端に径0.4cmの方形の貫通孔がある。樹種ヒノキ類、ISF8。

2は13号溝より出土。両端をきれいに切りそろえてある。樹種ヒノキ類、ISF11。

3は11号溝2-Bより出土。腐蝕がはげしく加工痕は観察できない。樹種ヒノキ類、ISF27。

5は11号溝2-Cより出土。腐蝕が進んでおり、加工痕は観察できない。樹種スギ、ISF5。

角材（第68図4・9、図版30）

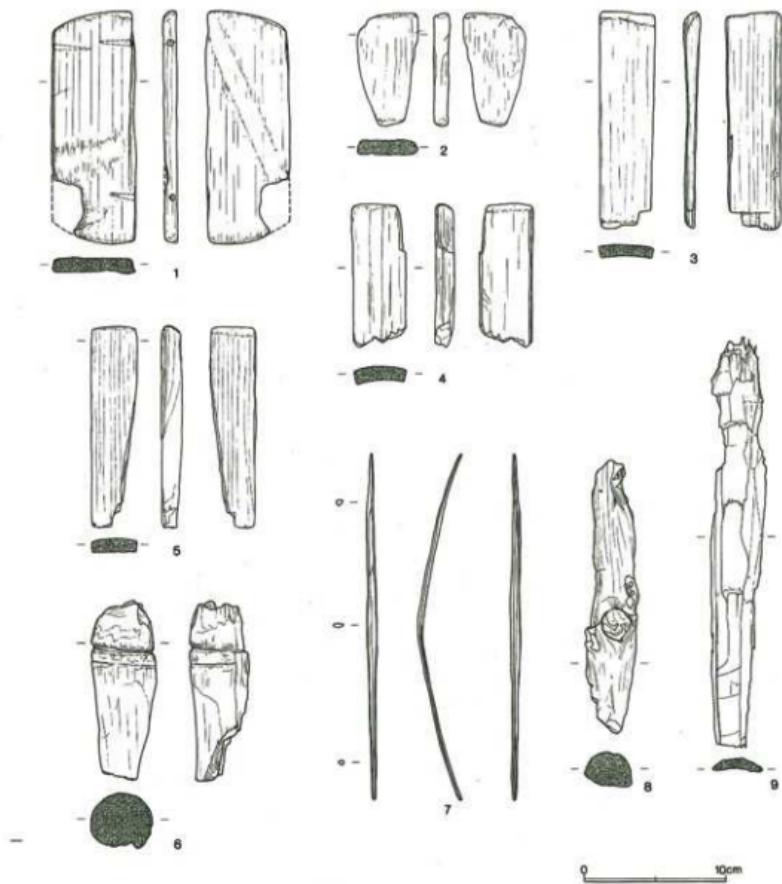
4は11号溝2-Bより出土した。一端に調整痕が見られる。樹種スギ、ISF25。

9は9号土壙より出土した。片方の端部近くに径0.6cmの貫通孔がある。樹種モミ類、ISF9。

特殊加工木製品（第68図6・7、図版30）

6は11号溝2-Bより出土した。両端を山型にあらかじめ削り落してある。付け札等に用いられたものであろうか。樹種スギ、ISF26。

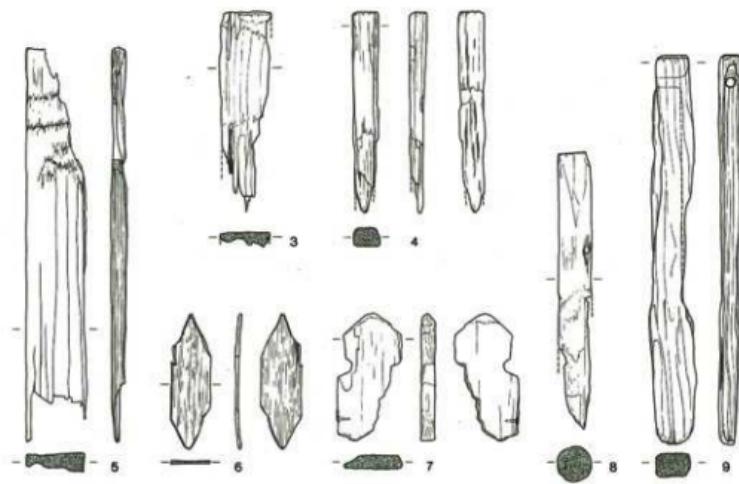
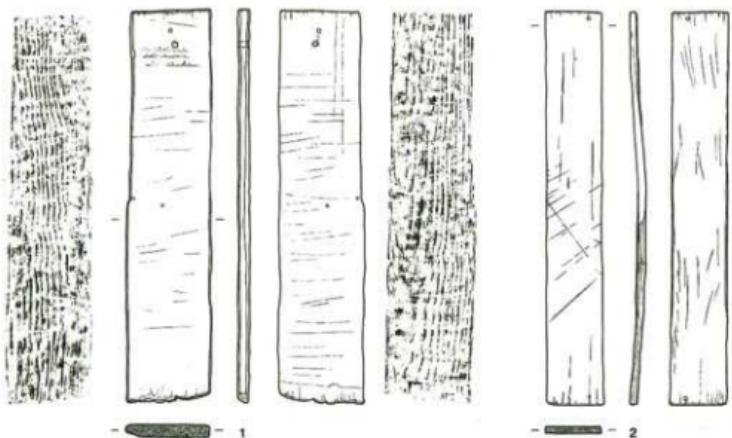
7は16号溝2-Dより出土した。上端に稜を作るように加工が施され、端部から3.5cmの部分をえぐって段をもたせている。現存下端部に深さ約1cmの穿孔がある。付け札、あるいは人形（ひとがた）であろうか。片面に焼けた痕跡がある。樹種クロマツ、ISF19。



第67図 木製品(2)

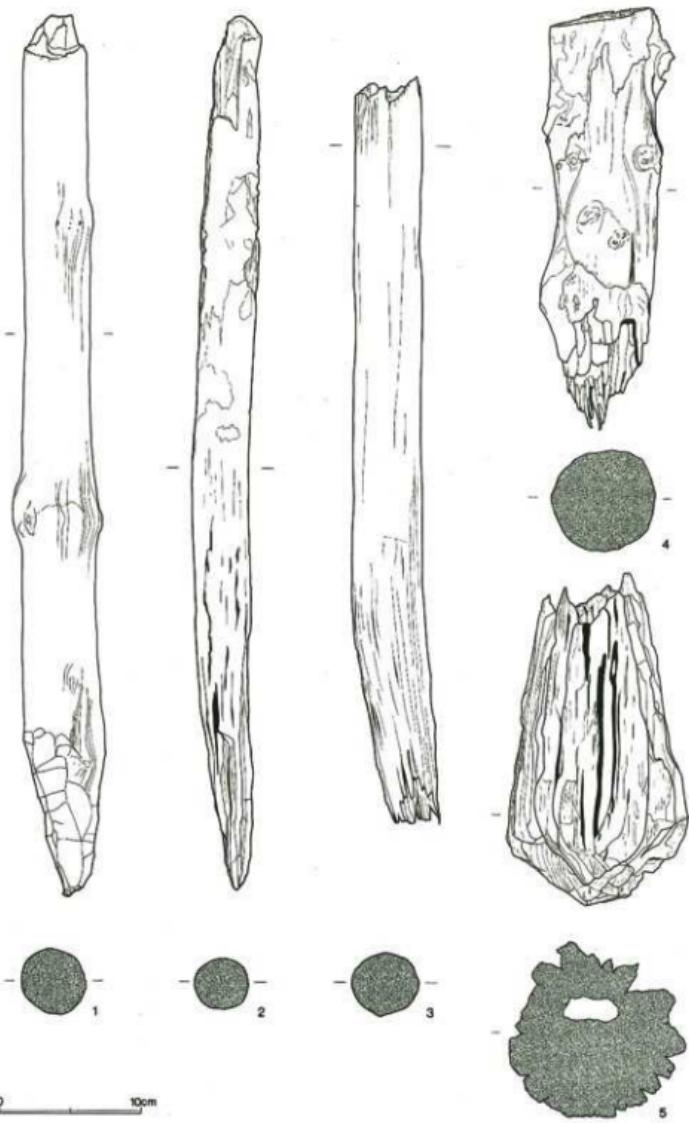
丸材 (第68図 8、図版30)

8は11号溝より出土した。図の上端部近くに刀物で削いた痕跡がある。上端は鋸様のもので切り落としている。樹種ヒノキ類、ISF 1。



0 10cm

第68図 木製品(3)



第69図 木製品(4)

杭 (第69図 1 ~ 4、図版31)

1 ~ 4 は11号溝より出土した。

1 は先端部より12cmの範囲に大まかに削って調整した痕跡がみられる。樹種ニワトコ、ISF23。

2 は腐蝕がはげしく加工痕は観察できないが、図の下部は先細りになっており、おそらくこちらが先端部であろう。樹種ネムノキ、ISF22。

3 も2と同様である。樹種クリ、ISF21。

4 は図上端に鋸様の道具による切断痕を残す。下端部は腐蝕しているが、樹皮をよく残している。

樹種スギ、ISF 3。

柱材 (第69図 5、図版31)

5 は89号ピットより検出された。下端部には何箇所も、大まかな調整痕を残す。芯部は腐蝕している。

c 石製品

硯 (第70図)

硯は17号溝4-Dより出土した。厚さ1.9cm。裏面に細い線刻で「住好説生」と読める稚拙な文字と、「す」と読める達筆な文字が刻まれている。石質は粘板岩。

板石塔婆 (第71図)

1 は106号溝108-Dより出土した。第63図2の擂り鉢を押しつぶす形で検出されている。年不詳阿弥陀種子。

2 は105号溝108-Eより出土。キリークの左部分が残っている。年不詳阿弥陀種子。

3 は11号溝2-B上層より出土した。キリークの左下端である。年不詳阿弥陀種子。

4 は16号溝2-D上層より出土した。キリークの左下端部である。年不詳阿弥陀種子。

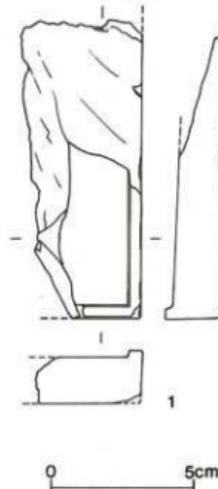
5 は16号溝2-D上層より出土。年号部分で、「天文」(室町時代1532~)と読める。

6 は11号溝3-D上層より出土。上端は蓮座の下部で、右4文字は梵字である。右上オン、右下ア、左上シャ、左下ナウ。左下の欠損している文字は年号の「亨」と思われる。亨徳(室町時代1452~)か亨禄(室町時代1528~)のどちらかと考えられる。

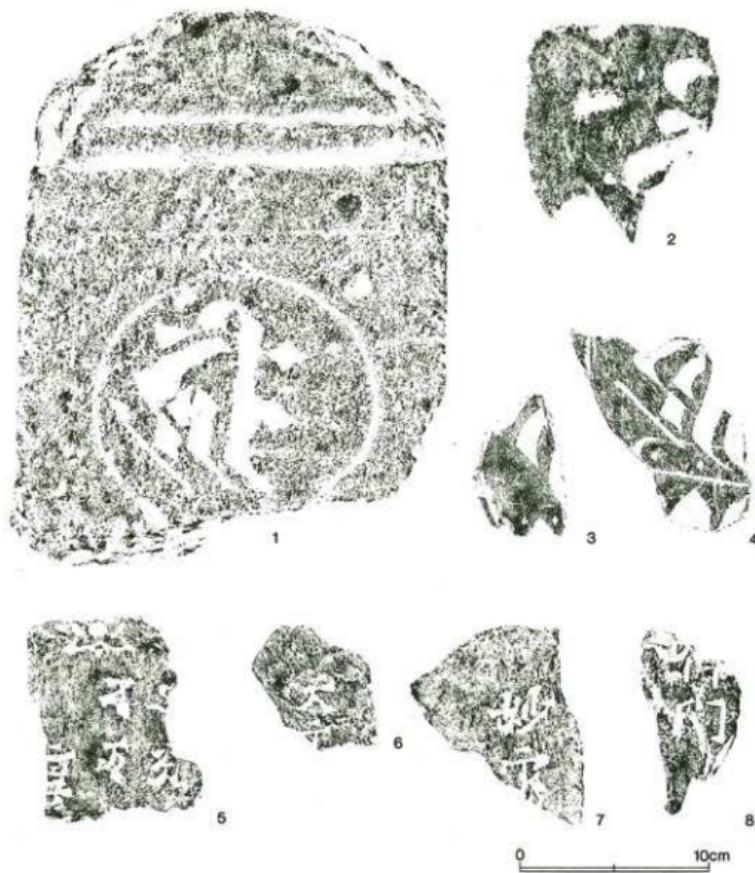
7 は11号溝2-D下層より出土。「妙口」は法名であろう。

8 は11号溝2-B上層より出土。人名の「圓門」と読める。

(浜野一重)



第70図 石製品(1)



第71図 石製品(2)

砥石 (第72・73図、図版32)

石御堂遺跡からは、14点の砥石と1点の陶製の砥石が出土している。

砥石はすべて砂岩を利用しており、現在使われている仕上げ用の砥石と同様の使われ方をしているものと考えられる。形態や使われ方の特徴から、後張遺跡(註1)のI類a・bとしたものにあたると思われる。

註1 立石盛洞ほか 1983 「関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告—IV— 後張 本文編II」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第26集



第72図 石製品(3)

14例のうち6例には、タガネで石を切り出したときの痕が残っており、原材料を一定の大きさや形に整えてから砥石として使用したのであろう。刃つぶし用に使用した痕跡が残っているのは3点のみであった。

陶製の砥石は、常滑の甕の破片の割れ口を磨って用いられたもので、めずらしいものである。刃つぶし用の使用痕が残っているが、他のきれいに磨られた部分は、果たして刀物を砥ぐために使われたものかどうか疑問が残る。

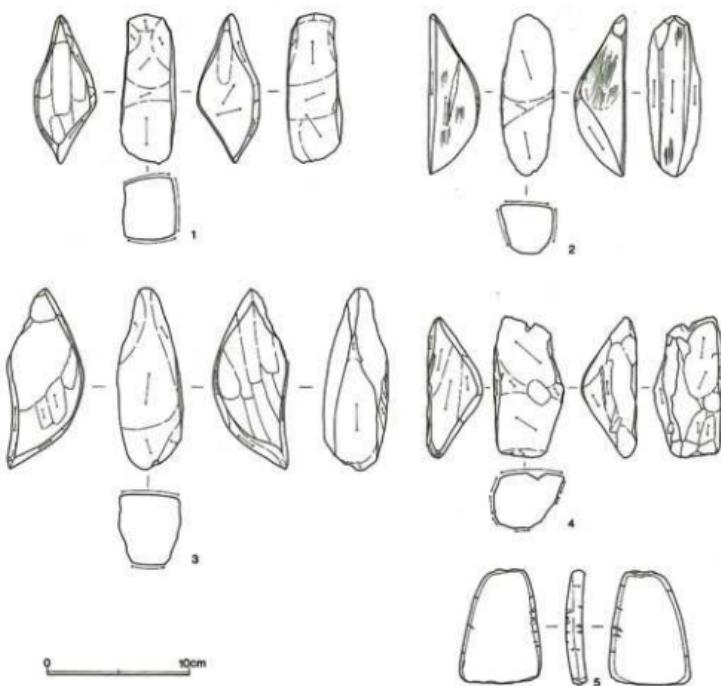
砥石の観察表の見方は次の通りである。

- 砥石の面の名称は、実測図における配置と照合させ、**□—Ⓐ—Ⓑ—Ⓖ**とする。
- 計測値はすべて最大値である。

表14 石製品(3)(4) (第72・73図) 観察表

図版 No	出土遺構	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	形態の特徴	備考
第72図-1	46号土壤 S.2	11.9×3.3	2.7	120	砂岩	A・B・C・D面を使用 中央部断面は台形 B面は一面A・C・D面は、小さく数面が矢印方向に使用されている C・D面には、刃つぶし用の使用痕がみられる	両端が使用後に破損している
第72図-2	1号溝 (7-D)	9.4×3.1	2.3	94	砂岩	A・B・C・D面を使用 中央部断面はほぼ正方形 A・C面は一面、 B・D面は、小さく数面が矢印方向に使用されている C面には、刃つぶし用の使用痕がみられる	両端が使用後に破損している
第72図-3	1号溝 (3-D)	4.4×2.0	2.8	25	砂岩	A面及びC面のみが残る A面には、矢印方向の使用痕がみられる C面には、砥石として用いるために整形したときタガネ痕が残っている	大きな砥石の一部
第72図-4	1号溝 (4-B)	5.6×3.4	2.4	63	砂岩	A・B・C・D面を使用 中央部断面は不整四角形 D面は一面、A・B・C面は、小さく数面が矢印方向に使用されている	両端が使用後に破損している
第72図-5	1号溝 (2-B) 上層	5.4×4.7	2.8	75	砂岩	A・B・D面を使用 中央部断面は不整長方形 A面は一面、B・D面は、小さく数面が矢印方向に使用されている	両端及びB面の一部とC面が、 使用後に破損している
第72図-6	1号溝 (2-C)	7.1×2.8	1.2	43	砂岩	A・B・C・D面を使用 中央部断面は長方形 各面とも、小さく数面が矢印方向に良く使われており、特	

図版 No.	出土遺構	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	形態の特徴	備考
第72図-7	10号溝 (3-B)	8.7×4.4	3.8	175	砂岩	にD面には、湾曲した状態の使用痕がみられる	
第72図-8	11号溝 (2-C) 下層	8.7×3.6	4.2	145	砂岩	A・B・D面を使用 中央部断面は不整多角形 各面とも、小さく數面が矢印方向に良く使用されている D面の一部にはタガネ痕がかすかに残る	
第72図-9	11号溝	8.7×4.0	3.7	125	砂岩	A・B面を使用 中央部断面は不整	A面の一部は、

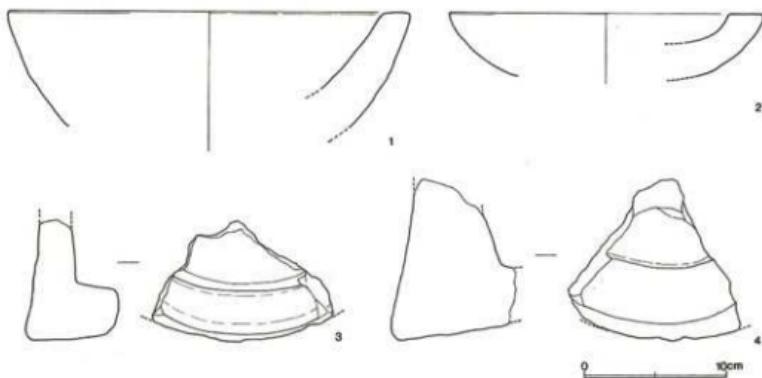


第73図 石製品(4)

図版No	出土遺構	大きさ(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石質	形態の特徴	備考
	(2-C) 下層					四角形 B面は一面、A面は、小さく數面が矢印方向に使用されている D面にはタガメ痕が残る	使用後に剥離している
第72図-10	11号溝 (3-D) 上層	8.2×4.4	3.8	180	砂岩	A・B・C面を使用 中央部断面は不整多角形 各面とも小さく數面が矢印方向に使用されている D面の一部にも使用痕がみられる	D面は、使用される前か使用途中でこわれたと思われる
第73図-1	11号溝 (2-D) 上層	10.6×3.8	4.4	200	砂岩	A・B・D面を使用 中央部断面は、縦長の四角形 D面は一面、A・B面は、小さく數面が矢印方向に使用されている C面とD面の一部にはタガネ痕が残る	
第73図-2	16号溝 (7-D)	11.5×3.8	3.5	148	砂岩	A・B・C・D面を使用 中央部断面は台形に近い B面は一面、A面は、小さく數面が矢印方向に使用されている B面の一部とC面及びD面には、多数の条痕が残る 刃つぶしに用いたものであろうか	
第73図-3	16号溝 (1-D) 上層	12.9×4.7	5.1	315	砂岩	A・B面及びC面の一部を使用 中央部断面はほぼ台形 各面とも、小さく數面が矢印方向に使用されている D面にはタガネ痕が残る	C面からB面にかけての一部は使用途中でこわれた可能性がつよい
第73図-4	106号溝 (108-D)	10.0×5.0	3.9	196	砂岩	A・B・C・Dの各面を使用 中央部断面は不整台形 各面とも、小さく數面が矢印方向に使用されている	各面に、使用後剥れたと思われる小さいきず痕がある
第73図-5	17号溝 (2-E)	2×5.8	0.9 1.2			常滑焼のカメの破片を利用したもので破片の長辺の両側面(C面・D面)が良く應られており、さらにその縁の部分は、刃つぶし用の砥石として用いられている。	色調…暗赤褐色 焼成は良好

石皿・石臼(第74図、図版32)

石皿と石臼が、2点ずつ出土した。



第74図 石製品(5)

表15 石製品(5) (第74図) 観察表

図版No	出土遺構	大きさ(cm)	完存率	石質	形態の特徴	備考
第74図-1	16号溝	口径推定 内径 24.6 外径 28.6 現存高 8.2	口縁の 約3/4	安山岩	自然なふくらみをちらながら外び らきに立ちあがる こね鉢のよう な形 底部に近づくにつれてかな り器壁が厚くなる 口端部で厚さ 約2cm、現存最下部で厚さ約3.4 cm	
第74図-2	114号土 壙 (106 -E)	口径推定 内径 17.6 外径 22.4 現存高 4.5	口縁の 約3/4	安山岩	底面は平らで、自然に外びらきに 浅く立ちあがる 器壁の厚さはほ ぼ一定しているが、中心部がやや 厚くなる可能性がある	全体に比較的薄手
第74図-3	11号溝 (2-C) 下層	底部径推定 外径 28.2 内径 19.8 現存高 5.6	底部径の 約3/4	安山岩	石臼の破片 底部は中心部がやや うすくなっており、あげ底状にな っていると思われる	全体的に厚手
第74図-4	16号溝 (2-D) 上層	底部径推定 外径 30.2 内径 19.4 現存高 8.9	底部径の 約3/4	安山岩	石臼の破片 底部はかなり厚く、 中心部にむかってあげ底状にう すくなっている 最も厚い部分が 約7cm、残存部の最も薄い部分が 5.5cmほどである	

(小野美代子)

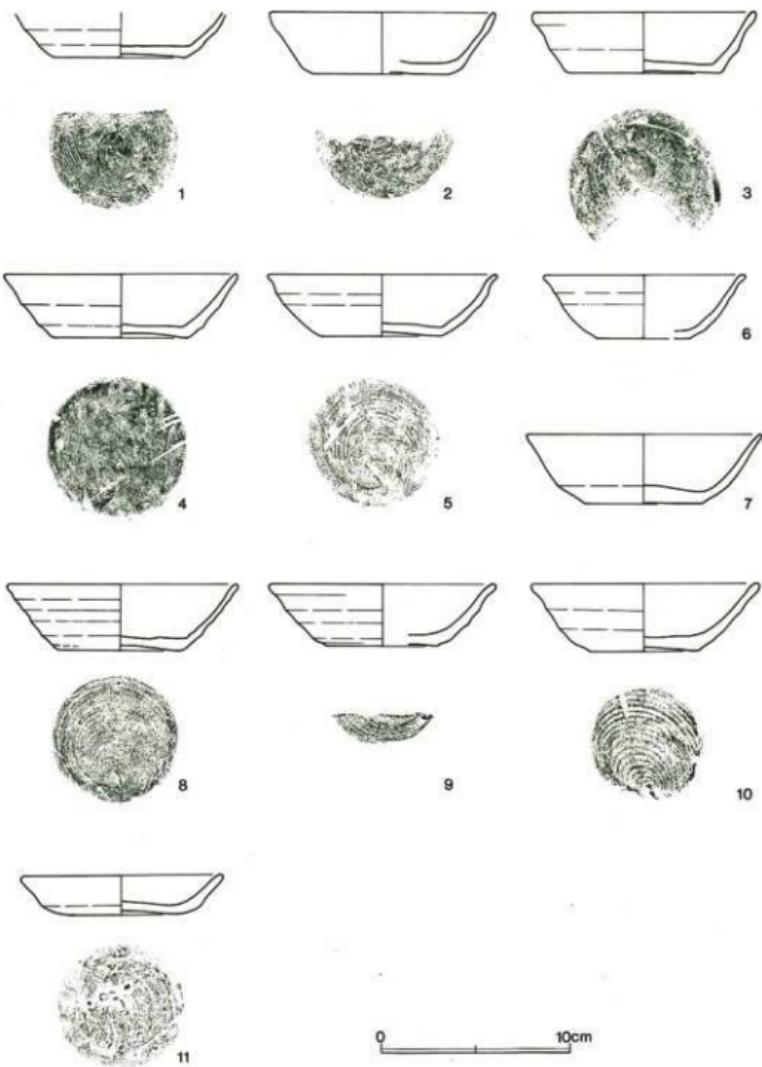
(2) 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺物としては須恵器の坏が主にIII区の土壤より出土している。(第75図、図版33)

9~13世紀にわたるものが出でてたり、時代をまたぐことになるが、一括して紹介しておく。

表16 須恵器杯 (第75図) 観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	坏	底径 7.0	厚さ0.2~0.4cm 凹面気味の底部よりやや内湾して立上る	ろくろ水挽き整形 底部は右回転糸切り後、縁辺部1cm程度箇調整 中央部にも巻き状の箇度	灰色石粒・無色石粒・乳白色石粒を含む 10YR 4/4に近い黄橙色
2	坏	口径推定 12.1 底径推定 7.2 器高 3.4	厚さ0.3~0.6cm 細かい凹凸のある底部より角度をもって斜めに立上る	ろくろ整形 底部は縁辺部に2cm程度の箇調整痕を残す	黒色砂粒・乳白色砂粒を含む 7.5YR 4/4褐灰色
3	坏	口径推定 12.0 底径 8.0 器高 3.2	厚さ0.3~0.6cm 凹面気味の底部より角度をもって斜めに立上る	ろくろ整形 底部はわずかに回転糸切り痕を残す	磨耗がはげしい 黒色砂粒・赤褐色砂粒・灰色石粒を含む 2.5YR 4/4灰白色
4	坏	口径 12.4 底径 7.0 器高 3.4	厚さ0.3~0.6cm 凹面の底部より角度をもって斜めに立上る	ろくろ水挽き整形 底部は右回転糸切り	磨耗している 灰色砂粒・乳白色石粒を含む 7.5YR 4/4明褐灰色
5	坏	口径 12.2	厚さ0.3~0.6cm 凹面の底部より斜めに立上り口縁近くで外反する	ろくろ水挽き整形 底部は整った右回転糸切り	黒色砂粒・乳白色石粒を含む 7.5YR 4/4明褐灰色
6	坏	口径推定 10.8 底径推定 5.0 器高 3.4	厚さ0.2~0.4cm 平らな底部より角度をもってやや内湾気味に立上る	ろくろ整形 底部は縁辺部の箇調整痕のみを残す	白色砂粒・黒色砂粒・灰色石粒を含む 7.5YR 4/4灰色
7	坏	口径推定 12.6 底径 6.3 器高 3.7	厚さ0.3~1.0cm ほぼ平らな底部より斜めに立上る	ろくろ水挽き整形	磨耗がはげしい 赤褐色砂粒・乳白色石粒・金雲母を含む 7.5YR 4/4に近い橙焼成温度が低いものと思われる
8	坏	口径 12.2 底径 6.4	厚さ0.3~0.6cm 凹面の底部より斜めに立上る	ろくろ水挽き整形 底部右回転糸切り	乳白色石粒・黒色砂粒を含む 5YR 4/4灰色



第75圖 須惠器坏

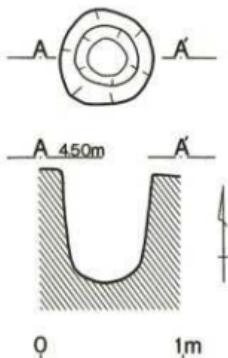
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
9	壺	器高 3.6 口径推定 12.0 底径推定 6.0 器高 3.3	厚さ0.4~0.5cm 凹面気味の底部よりゆるやかに内湾して立上り、口縁部は外反する	ろくろ整形 底部回転糸切り	白色石粒・灰色石粒を含む N 4 灰色
10	壺	口径 11.9 底径 5.7 器高 3.6	厚さ0.4~0.7cm 凹面の底部より開き気味に斜めに立上る	ろくろ整形 底部右回転糸切り	白色微細粒多量・乳白色砂粒・黒色砂粒を含む N 5 灰色
11	壺	口径推定 10.6 底径推定 5.5 器高 2.1	厚さ0.3~0.5cm 凹面の底部より丸みをおびて斜めに立上る	ろくろ整形 底部右回転糸切り 底部内面にユビナデ痕	褐色粒を含む 10YR 5/6灰黄褐色 内・外面とも焼けている

(3) 古墳時代

古墳時代の遺構は、II区103-Fより検出された116号土壙のみである。

116号土壙は、径0.7×0.7mの円形で深さ75cmの規模をもち、その底面より3個体の土師器壺が出土した。この他にこの項では3点の土師器を紹介するが、I区の遺構からは、磨滅した土師器片がまんべんなく出土しており、古墳時代の集落があったことを推察させる。

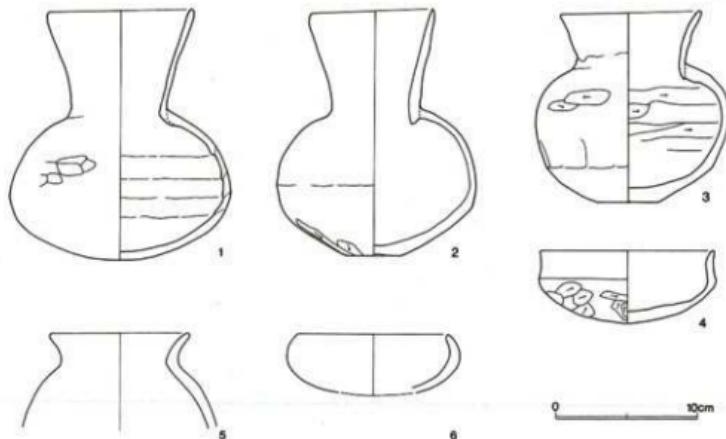
古墳時代の遺物は、土師器の他に、石製模造品、土玉が出土した。



第76図 116号土壙

表17 土師器(第77図)観察表

番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
1	壺	口径 10.5 胴部径15.8 器高 17.8	厚さ0.5~0.7cm 丸底から横に浅くはり出し胴部半ばで内湾し頸部で外傾して立つ	胴部内面には粘土接合痕が頸著に残る 頸部で上下を接合させ、簡単に調整してある 胴部に一部箇削りが観察できる	磨耗がはげしく、外面の調整はほとんど不明 暗褐色石粒・黒色砂粒・乳白色石粒・白色微細粒を含む 7.5YR 3/6橙色
2	壺	口径 8.8 胴部径13.9	厚さ0.3~0.9cm 凹面の底底部より横に浅くはり出し	頸部より上は内外面とも横ナデ 胴部は箇削りのよう	磨耗している 頸部内面～外面～底部にかけて朱彩の



第77図 土師器

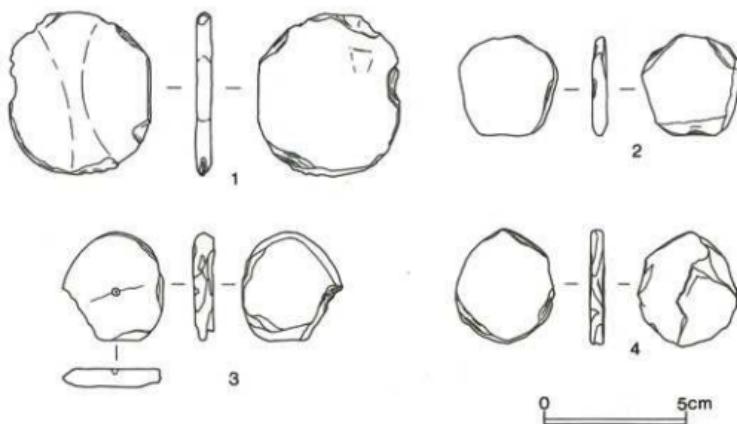
番号	器種	大きさ(cm)	形態の特徴	手法の特徴	備考
		底径 3.8 器高 13.5	胴部半ばで内窪し頸部で直に近く立つ	だが下部に痕跡を残すのみ 頸部で上下を接合させている	痕跡がかすかに見られる 赤褐色粒・黒色砂粒・白色微細粒を含む 5 YR 4/6 橙色
3	壺	口径 10.1 胴部径13.9 底径 4.2	厚さ0.5~1.0cm 平らで厚みのある底部より横に浅くはり出し体部下半で内窪し、頸部で外反して立つ	頸部で上下を接合させてい る 脇部外側上半は範削り 下半に範痕跡 内面は範削り	脇部下半を除き外面全面に 朱彩 黒色砂粒・暗褐色粒 白色微細粒を含む 7.5 YR 4/6 浅黄橙色
4	壺	口径推定 12.5	厚さ0.4~0.9cm 丸底から浅く立ち上り脇部上半で内傾して立つ	脇部上半は内・外面とも横ナデ、内面底部にかけては範ナデ 外面段より下 2.5 cmは範ナデ、底部にかけて範削り	黒色砂粒・白色微細粒・赤褐色粒を含む 7.5 YR 4/6 に近い橙色
5	壺	口径推定 10.0	厚さ0.5~0.8cm 頸部はくの字にくびれる	磨耗が激しく不明	暗赤褐色粒・白色砂粒・灰色砂粒を含む 5 YR 4/6 橙色
6	壺	口径推定 10.8 器高推定 4.4	厚さ0.4~0.7cm 丸みのある脇部から上半部で内傾する	内面と外面脇上半部はナデ 下半部は範削りと思われる 磨耗しており不明確	白色砂粒・暗褐色石粒含む 10 R 4/6 赤色

石製模造品（第78図）

1・2は11号溝2-B上層、3は7号土壌、4はI区4-Eより出土した。

3のみ中央部に穿孔（貫通していない）をもつ。縁辺部はすべて簡単な磨りによる調整。

祭祀に関連する、鏡を模したものと考えられる。石質はすべて緑泥片岩。



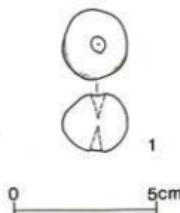
第78図 石製模造品

土玉（第79図）

1号溝より出土した。これも石製模造品と同時期の、祭祀に関わる遺物と考えられる。

両端より、深さ0.8cmの貫通しない穿孔が施されている。

(浜野一重)



第79図 土玉

(4) その他の遺物

縄文土器（第80図）

石御堂遺跡において、1片だけだが縄文土器が出土しているので、簡単にふれておきたい。
この土器片は、深鉢の頸部と思われる。

併行な2本の沈線が頸部から肩部にかけてめぐっており、その内部には烈点文が2列入っている。
又、この上方の沈線から縦方向に沈線が出ており、この内部にも烈点文がみられる。

胎土の粒子は密で、白色砂粒・雲母などを含む。焼成は良く、色調は赤褐色である。

安行III c式土器と考えられる。

(小野美代子)

瓦 (第81図)

10号溝3-Bより出土した。

近世後半代のものと思われる。

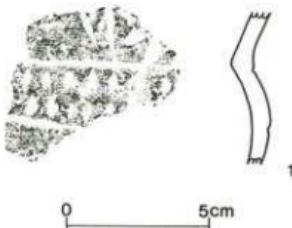
古銭 (第82図、図版33)

1は106号溝108-Dより出土、2は表採である。双方とも皇宋通宝(隸書体、初鋤は北宋の宝元2年-1039年)と思われる。

3は16号溝2-Dより出土した。永楽通宝である。初鋤は明の永楽6年(1408年)。

4は17号土壙より出土。寛永通宝である。

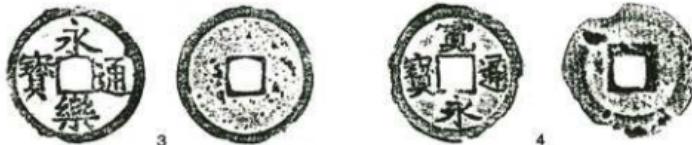
(浜野一重)



第80図 繩文土器拓影図



第81図 瓦



第82図 古銭拓影図

4 結語

陶磁器について

石御堂遺跡からは、13世紀から18世紀にかけての陶磁器が多数出土した。

本文中では、それらの中からまとまりのあるものを中心に基種及び用途別に分類して紹介したが、この項では時期別に分類して紹介し、まとめをしたいと思う。(註1)

1) 13世紀前半

この時期のものは、16号溝1-D上層より出土した外面に灰釉を施した常滑の壺の口縁部破片1点のみである。直な頸部からきつく外反して、口縁は短く直に立ち、端部に稜をもつ。

2) 13世紀後半

外面に灰釉を施した四耳壺の破片が2-Dと、1号溝4-Dより出土した。いずれも丸みを帯びた肩部片で、後者は耳を付けている。

他に、やはり外面に灰釉を施した、非常によく焼き締まった締腰の瓶子の腰部片が1号溝4-Dより出土している。

3) 14世紀

常滑壺の破片が数点ある。1片は大壺の口縁部片で、縁帶は幅2.5cmと狭くその下部は鋭くえぐれる形をとる。口縁端面は平らで内面側に一段下がり、大きな丸みをもって頸部へ移行する。鉄分のせいか赤褐色の器面に、緑色の自然釉が縁帶部のみかかる。11号溝3-C上層より出土した。

他は胴部片である。

4) 15世紀前半

第58図-8の筒形香炉と、同図11の蓋(茶入れの蓋であろうか)が該期のものである。8は1号溝4-D、蓋は11号溝3-Eより出土した。

他に、内・外面に灰釉を施し、口縁端を折り返して2つの段をもたせた折縁深皿の口縁部片が、1号溝7-D、17号溝4-Dと、8-Bより4片出土している。この折縁深皿は、日常雑器として古瀬戸の全期間を通じて作られていたものである。(橋崎ほか1976)

該期のものとしては、第65図-1の土師質の鈎付土鍋も含まれる。これも西日本方面よりの移入品と思われ(加藤1982)、前述の陶器類と共に当時の流通の様相を知る手がかりとなろう。

5) 15世紀後半

この時期になると、瀬戸では実用的な平碗・小皿類・折縁深皿・片口・各種鉢類が増加して、日常生活と密着したものが作られるようになる。(橋崎ほか1976)

当遺跡においてもその傾向は顕著であり、遺物量も増加している。

まず瀬戸のものとしては、第59図-1にあげた灰釉小皿と、その同類の破片が12片、主に1・2・17号溝より出土している。また、105号溝108-Dからは底部回転糸切りで、小さな付高台をもつ灰釉締腰香炉片が出土した。

最も少土量が多いのは、酸化焰焼成によって黄緑色となった灰釉のかかる鉢類の破片で、1・11・17・105号溝より20片近く発見されている。この釉の色調が該期の特徴といえる。(檜崎ほか1976) 他には、折縁深皿口縁部片、鉄釉瓶子底部片等がある。常滑のものとしては、第58図-9の壺のみで、17号溝より出土している。

15世紀末から16世紀にかけては、陶器生産の中心が瀬戸から美濃へ移り、それまでの窯業と異なる半地上式の大窯による窯業が隆盛となる。

大窯の操業は15世紀末より17世紀の頭初まで続くが、この間を5期に分けて編年がなされている。(檜崎ほか1976、井上喜久男氏の御教示による)

6) 大窯 I 期

63図-4と64図-1~3の擂り鉢の他、胴部は指による整形で、口縁のみナデによって端面を作り出している粗い作りの擂り鉢(こね鉢)の破片が20片ほど出土している。出土遺構は主に1・11・17号溝である。

これらに他に、第61図の常滑の壺2点も15世紀末~16世紀初頭のものと思われ、常滑の変遷を細分化した赤羽一郎氏の考えに従えば第5段階に属する(赤羽ほか1977)。また第61図-1は、「日本陶磁全集8 常滑・渥美」(中央公論社1977)の図53の常滑大壺に似る。

7) 大窯 II 期

この時期のものは出土数が少ない。16号溝より出土した第59図-2の鉄釉皿をはじめとしてやはり鉄釉を施した擂り鉢・天目茶碗の口縁部片が2点ずつ出土したのみである。鉄釉皿は16号溝、その他は11号溝より出土した。

また該期には、美濃系のものに他に中国陶磁も數片出土している。削り出し高台をもつ碗と思われるものの底部、染付皿、鉄釉天目茶碗、青磁器のいずれも破片である。

当遺跡からは大窯III・IV期(16世紀中葉~後半)の陶磁器は出土していない。このことが何らかの意味をもつ事象であるか、今のところ明らかにし得ない。

8) 大窯 V 期

当遺跡より出土した陶磁器は、この時期以降にまとまりを見せている。

大窯V期のものとしては、第58図-1の鉄釉天目茶碗、第59図-3の灰釉小皿、同図4~8の長石釉皿、第63-図3・5・6の鉄釉擂り鉢がある。長石釉を施した皿の出土が多いのは、美濃においてこの時期が志野の最盛期にあたることを反映しているといってよいだろう。

また、この時期に伴うものとして唐津系の陶器の皿・碗・壺の破片が数点出土している。該期に唐津系陶器が伴うのは、文禄・慶長の役(1592・1597)で秀吉の朝鮮出兵に随行した西国大名が、朝鮮人陶工を連れ帰り、唐津ほかの地で窯業を興した(古川ほか1979)ことを反映しているのではなかろうか。

9) 17世紀第1四半期

16世紀末から17世紀頭初を境として、美濃の窯は大窯から連房式登窯へと変遷する。いわゆる織部はこの窯によって焼かれたものである。

第58図-12の筒向付、同図13の浅鉢（あるいは盤）と、同器種の破片数点、第59図-9の灰釉皿、10~12の長石釉皿、第60図1~4の織部鉄絵皿等が該期のものである。これらは志野織部と呼ばれている。

織部の鉄絵皿の文様は朝鮮民窯系の鉄絵の描き方に似ており（古川ほか1979）、8)の項で述べた朝鮮人陶工の影響をうけたものと推察される。

10) 17世紀第2四半期

この時期のものとしては第58図-2の鉄釉天目茶碗、同図7の志野織部茶碗、第59図-13の灰釉皿、第60図5・6の織部鉄絵皿の他に、いわゆる織部の特徴である銅緑釉を施した向付の破片が数点出土している。

11) 17世紀後半~末葉

17世紀後半のものとしては、第63図-1・2の擂り鉢があげられる。

また17世紀末葉のものでは、第58図-3の鉄釉天目茶碗と、同器種の破片数点を数えるのみである。最近の県内の報告では久保山遺跡（酒井ほか1983）でグリッドより出土した鉄釉天目茶碗があり、酒井清治氏はこれを17世紀後半に比定している。当遺跡出土の、相前後する時期の天目茶碗とは、口縁付近の形態が多少異なるようである。

12) 18世紀初頭

この時期のものは、わずかに5片出土しているのみである。4片は鉄釉を施し、口縁部を外につまみ出した形態をもつ天目茶碗片であり、1片は長石釉を施し、削り出し高台をもつ碗の底部片である。

以上、石御堂遺跡より出土した陶磁器の変遷をたどってみた。まとめてその流れを追ってみると、まず13世紀鎌倉時代に端緒が見出される。それから14世紀を過ぎるまでは常滑系のものが中心であり、15世紀室町時代に入ってから、瀬戸の日常雑器の生産量が増加すると同時に当地にも流入してきており、常滑系のものは減少する。16世紀大窯による陶器生産が開始し、その中心が瀬戸から美濃に移る時点での当遺跡における陶器の量は減少し、16世紀中葉~後半にかけては全くないといえる。

しかし、16世紀末から17世紀にかけては、日常雑器の中に茶陶も混えて器種もふえ、量においてもピークを迎える。そして再び減少傾向をたどり18世紀初頭以降の陶器は全くみられなくなってしまうのである。

このような出土陶磁器の変遷をみて言えることは、前述したように、時代的背景や生産地の事情をそのまま反映しているということである。そのことは、当時の瀬戸・美濃あるいは常滑という陶器生産地と当地（あるいはより広く関東）との流通が密であったという事実を物語っているのではないだろうか。

石御堂遺跡は、古墳時代から中・近世にわたって生活が営なされた土地であるが、遺構・遺物の中心は中・近世のものであり、天目茶碗等の茶陶も出土していることから、溝等の遺構は武士階級の住居に関連するものではないかと考えられる。

「遺跡の概観」の項にも記したが、古墳時代における毛長川対岸の武藏伊興遺跡ほかとの関わりや、奈良・平安時代における灰釉陶器の流入経路の問題等を考える時、それに続く中・近世における流通をも意識しなければならないであろう。

(浜野一重)

註1 陶磁器の産地および年代については、井上嘉久男氏の御教示による。

参考文献

- | | | |
|-----------------|------|---|
| 橋崎彰一・九原常雄 | 1976 | 『日本陶磁全集9 瀬戸・美濃』中央公論社 |
| 赤羽一郎・小野田勝一・九原常雄 | 1977 | 『日本陶磁全集8 常滑・渥美』中央公論社 |
| 古川庄作・竹本紀明 | 1979 | 『やきものデザイン〈3〉織部の絵模様』岩崎美術社 |
| 宮石宗弘ほか | 1981 | 『瀬戸市史 陶磁史篇二』 |
| 藤澤良祐 | 1981 | 『古瀬戸中期様式の成立課程』『東洋陶磁』第8号 |
| 加藤緑 | 1982 | 『博物館ノートNo.7』大田区立郷土博物館 |
| 大三輪龍彦・斎木秀雄ほか | 1982 | 『研修道場用地発掘調査報告書』鎌倉市鶴岡八幡宮 |
| 酒井清治・山下秀樹・大塚孝司 | 1983 | 『東北新幹線埋蔵文化財発掘調査報告－I－ 久保山』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第29集 |

IV 付 篇

1 石御堂遺跡出土木材の樹種

埼玉県川口市東本郷字石御堂の石御堂遺跡より出土した木材等36点について樹種の鑑定を行なった。当遺跡は荒川の自然堤防の上に立地し、溝・土壙・ピットなどの遺構があり、調査されたI~III区のうち、木材のほとんどがI区から見つかっている。今回調査した木材36点のうち、30点が木製品、残り6点が流木で、すべて中・近世のものである。以下に樹種毎に結果を示し、若干の考察を加えた。

(1) 樹種鑑定結果

1. モミ類 *Abies* sp. マツ科 図版 35-1~3 (ISF-17)

ISF-9(角材)、ISF-17(湾曲した板材)

垂直・水平樹脂道のない針葉樹材で、放射仮道管がなく、放射柔組織の壁は厚く多数の単型孔をもつことなどから、マツ科モミ属の材であることがわかる。日本に自生するモミ属のうち、モミ(*Abies firma*)は本州、四国、九州の暖帯および温帯に分布し、ウラジロモミ(*A. homolepis*)は本州、四国の山地に、アオモリトドマツ(*A. mariesii*)は本州の亜高山帯に、シラベ(*A. veitchii*)は本州、四国の亜高山帯に、そしてトドマツ(*A. sachalinensis*)は北海道に分布している。このことより、本標本はモミの可能性が高いと考えられる。モミは樹高30m、幹径1mにたっする常緑針葉樹で、材は木理通直で加工容易であるが、割れやすく狂いがでて保存性も低い。用途としては、天井板、戸板などの建築材、家具、戸棚、曲物、茶道具箱、船材、下駄材、包装箱材、鍛冶用木炭などがある。

2. クロマツ *Pinus thunbergii* Parlat. マツ科 図版 35-4~6 (ISF-19)

ISF-19(板材)

垂直・水平両樹脂道をもつ針葉樹材で、樹脂道の分泌細胞が薄壁であること、分野壁孔が窓状であること、放射仮道管の内壁の肥厚がかなり鋸歯状を呈していることなどから、マツ科マツ属のクロマツの材であることがわかる。クロマツは本州以南の海岸沿いに主として分布する常緑針葉樹で、樹高35m、幹径1mにたっする高木である。古くから沿海地の防風、飛砂防止のために各地で植栽されたほか、街道の並木としても用いられてきた。その材は木理通直で樹脂多く、重硬で水湿に耐え強靭で、柱材、梁材、床板、土台材、橋梁材、基礎杭、枕木、杭木、器具材、船舶材などに用いられる。

3. スギ *Cryptomeria japonica* D.Don スギ科 図版 36-7~9 (ISF-3)

ISF-3(幹)、ISF-5(板材)、ISF-6(下駄)、ISF-7(板材)、ISF-15(湾曲した板材)、ISF-20(角材)、ISF-25(板材)、ISF-26(板材)、ISF-28(弓状加工品)。

垂直・水平樹脂道と共に欠く針葉樹材で、放射仮道管も仮道管内壁のらせん肥厚も持たないこと、分野壁孔はスギ型で普通1分野に2個であることなどより、スギ科のスギの材であることがわかる。スギは樹高40m、幹径2mにたつする日本特産の常緑針葉樹で、本州、四国、九州の山地に分布する。日本では林業上もっとも広く植栽されている樹種で、登呂遺跡にみられるように古くから多方面で用いられてきた。材は木理通直で割裂性が大きく加工が容易であり、柱や梁、板など各種の建築材、板戸や腰板などの建具材、橋梁などの土木材、電柱、船舶材、車両材、漆器木地や農具、箸、曲物などの器具材、家具材、機械材、樽桶材、下駄材、楽器材などに用いられる。また樹皮は屋根葺用としても用いる。

4. ヒノキ類 *Chamaecyparis* sp. ヒノキ科 図版36-10~12 (ISF-27)

ISF-1(杭)、ISF-2(杭)、ISF-8(板材)、ISF-11(板材)、ISF-24(湾曲した板材)、ISF-27(角材)。

垂直・水平樹脂道と共に欠く針葉樹材で、放射仮道管も仮道管内壁のらせん肥厚も持たないこと、分野壁孔はヒノキ型で1分野に普通2個であることなどからヒノキ科ヒノキ属 (*Chamaecyparis obtusa*) またはサワラ (*C. pisifera*) の材であることがわかる。ヒノキは本州、四国、九州の山地に分布する常緑針葉高木で、わが国ではスギに次いで重要な造林樹種である。材は木理通直で特有の芳香と光沢を持ち、耐朽性も耐湿性も共に高く、柱や土台、天井板、鶴居などの建築材、浴槽、漆器木地、家具材、船舶材、橋梁材、枕木などに用いられる。サワラは本州、九州の山地に分布する常緑針葉高木で、その材はヒノキより軽軟で保存性も低く、構造用の建築材としては用いられない。用途としては、天井板や長押などの装飾材、建具材、家具材、飯びつや漆器木地などの器具材、水桶、浴槽、樽、下駄、曲物、経木などがある。両樹種ともその樹皮は屋根葺に用いられる。

5. ヤナギ類 *Salix* sp. ヤナギ科 図版37-13~15 (IS-5)

IS-5(流木)

中位の大きさの道管が比較的均一に分布する散孔材で、放射組織は単列異性、道管の穿孔は單一、道管と放射柔細胞との壁孔は比較的大きく蜂巣状に分布するなどから、ヤナギ科ヤナギ属の材であることがわかる。日本には約40種のヤナギが分布しているが、木材の構造より種を識別するのは困難である。ヤナギ類は水湿地の陽光地に生育する落葉高木または低木で、その材は軽軟で、強度は低いが韌性があり、器具材、バルブ材のほか、黒色火薬用木炭、研磨炭として用いられる。枝条は編物、結束材料、桶のたがとして用いられる。

6. ブナ類 *Fagus* sp. ブナ科 図版37-16~18 (ISF-10)

ISF-10(椀)。

春材部には多数の道管が分布し、夏材部には径の小さい道管が少數分布する散孔材で、広放射組織をもつこと、放射組織は同性であること、道管と放射柔細胞との壁孔はレンズ状で大型であることなどより、ブナ科ブナ属のブナ (*Fagus crenata*) またはイヌブナ (*F. japonica*) の材であることがわかる。ブナは日本の山地帯を構成する主要な落葉広葉樹で、樹高25m、幹径1mに達する。イヌブナは本州以南の太平洋側の丘陵帯から山地帯にかけて分布する落葉広葉樹で樹高20m、幹径50cmに達する。材は堅硬で緻密であるが加工性は中程度、変色および腐れが入りやすい。用途としては、漆器木地、家具、椀、工具の柄、杓子、下駄の歯、船舶材などに用いられる。

7. クリ *Castanea crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 図版38-19-21 (ISF-12)

IS-4(流木)、ISF-12(椀)、ISF-14(椀)、ISF-21(杭)、ISF-30(杭)。

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じ、夏材部では薄壁で角ばった小道管が火炎状に配列する環孔材で、道管の穿孔は単一、放射組織は単列同性であることから、ブナ科のクリの材であることがわかる。クリは北海道西南部以南の温帯から暖帯にかけて分布する落葉広葉樹で、樹高20m、幹径1mに達し、陽光地に生育する。材はやや堅硬で割裂容易、耐朽性、保存性がいずれも高く、耐湿性もそなえ、枕木、坑木、杭、土台、床柱などの建築材、船舶および車両用材、箱や漆器木地などの器具材、家具材、薪炭材、梢木などとして用いられる。

8. ケヤキ *Zelkova serrata* Makino ニレ科 図版38-22-24 (ISF-29)

ISF-29(下駄)

年輪のはじめに大道管が一列に並び、夏材部では小道管が多数集合して接線方向につながる環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管の内壁にらせん肥厚があること、放射組織は異性で1~8細胞幅くらい、しばしば大型の結晶細胞を特に上下端に持つことなどから、ニレ科のケヤキの材であることがわかる。ケヤキは本州から九州にかけての暖帯から温帯に広く分布する落葉広葉樹で、樹高35m、幹径2mにたっする。材は堅く強靭で、木理は光沢があり美しく、耐朽性、保存性、耐湿性はいずれも高い。用途としては、神社仏閣などの柱や梁、門と扉、大黒柱、床板などの建築材、簾笥や火鉢などの家具材、漆器の盆や椀、臼と杵、太鼓の胴、橋の欄干や橋板、船舶材、彫刻材、下駄材など、多方面に用いられている。

9. ネムノキ *Albizia julibrissin* Durazz. マメ科 図版39-25-27 (ISF-22)

ISF-22(杭)

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた小道管が夏材部では比較的少數散在している環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は夏材部で連合翼状となり、時に結晶細胞をもち、放射組織は同性で2細胞幅くらい、などのことからマメ科のネムノキの材であることがわかる。ネムノキは本州、四国、九州の暖帯から温帯にかけての陽光地に生育する落葉広葉樹で、樹高10m、幹径30cmにたっする。材は軟らかく脆く、耐朽性、保存性は共に低い。用途としては、桶や柄、馬糞などの器具材、屋根板、下駄材、箱材などがある。

10. キハダ *Phellodendron amurense* Rupr. ミカン科 図版40-28~30 (ISF-13)

ISF-13 (漆塗挽)

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた小道管が夏材部では多数複合して斜め接続方向につながる環孔材で、道管の穿孔は単一、道管の内壁にはらせん肥厚があり、放射組織は同性で3細胞幅くらいであるなどからミカン科のキハダの材であることがわかる。キハダは全国の温帯に主として分布する落葉広葉樹で、樹高25m、幹径1mに達する。木材は強靱で柔らかく加工容易で、家具材、建築内装材、旋作物、薪炭材などに用いられる。また樹皮は胃腸薬および染料として用いられる。

11. センダン *Melia azedarach* Linn. センダン科 図版39-31~33 (ISF-16)

ISS-3 (流木)、ISF-16(柱材)。

大道管が年輪のはじめにやや疊に並び、そこからやや急に径を減じた小道管が夏材部で放射方向に長い小集団をなして散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、小道管にはらせん肥厚があり、木部柔組織は周囲状または連合翼状、結晶をもつ隔壁柔細胞を持ち、放射組織は同性で1~4細胞幅くらいなどのことから、センダン科のセンダンの材であることがわかる。センダンは樹高20m、幹径80cmにたっする落葉広葉樹で、伊豆半島以西の暖帯に分布する。しかし古くから植栽されており本来の天然分布は明らかでない。材は堅硬で木理は明瞭、加工容易なため、壁板や腰羽目などの建築装飾材、家具材、器具材、楽器材、下駄材、寄木細工などに用いられる。樹皮および果実は漢方薬として用いられる。

12. グミ類 *Elaeagnus* sp. グミ科 図版40-34~36 (ISF-4)

ISF-4 (くびれのある丸材)。

大道管が年輪のはじめに並び、そこからやや急に径を減じた小道管が単独で夏材部に散在する環孔材で、傷害ゴム道があること、道管の穿孔は単一で、道管の内壁にらせん肥厚があること、放射組織は1~8細胞幅くらいで同性であることなどから、グミ科のグミ属の材であることがわかる。日本にはグミ属の樹木は十数種自生しており、現在の分布から考えて、アキグミ(*Elaeagnus umdeyllata*)、マメグミ(*E. montana*)、ナツグミ(*E. multiflora*)のいずれかである可能性が高い。これらはいずれも樹高2~3mになる落葉低木で、材はねばり強いため、炉の自在、農具の柄などに利用される。

13. トネリコ類 *Fraxinus* sp. モクセイ科 図版41-37~39 (ISF-18)

IS-2 (流木)、ISF-18(板材)。

年輪のはじめに大道管が並び、そこから順次径を減じた厚壁の小道管が数個複合して散在する環孔材で、道管の穿孔は単一、木部柔組織は周囲状で年輪界付近の夏材部では時として連合翼状に配列する、放射組織は同性で2細胞幅くらいである、などのことからモクセイ科トネリコ属の材であることがわかる。この属の樹種は、放射組織があきらかに幅広いヤチダモ(*Fraxinus mandshurica*)

などを除いて、トネリコ (*F. japonica*)、シオジ (*F. spaethiana*)、マルバアオダモ (*F. sieboldiana*) などは、材構造がたがいに似ていて識別は困難である。これらの樹種は樹高10~30m、幹径30~100cmになる落葉中大高木で日本の温帯を中心に分布している。材は弾力があり耐朽性も高く、建築材、器具材、楽器材、土木用材、船舶材、車両材、鐵作材、下駄材、薪炭材などに利用される。

14. ニワトコ *Sambucus sieboldiana* Bl. スイカズラ科 図版41-40~42 (ISF-23)

IS-1(流木)、ISF-23(杭)。

春材部ではやや小型の道管が単独または数個集合して散在し、夏材部では順次径を減じた小道管が接線方向に配列する散孔材で、年輪のおわりに小道管が帶状に配列し、道管の穿孔は單一、放射組織は異性で1~5細胞幅くらいなどから、スイカズラ科のニワトコの材であることがわかる。ニワトコは本州以南の温帯および暖帯に分布する落葉広葉樹で、樹高8m、幹径25cmにたっする。材は軽軟で、太い髓をもち、小細工、寄木、木象はめに用いられる。また花と枝葉とは薬用に供される。

15. 竹類 *Phyllostachys* sp. イネ科 図版42-43~44 (IS-6)

IS-6

直径35mm、節間長8cm位の竹類の茎で、節部には小丸の根の脱落痕が全周にあること、不整中心柱で、維管束は2本の大道管がめだら、維管束の周囲を厚膜纖維がとりかこんでいること、などからイネ科のタケ属の地下茎であることがわかる。タケ属で現在の川口市付近でよく見られるものにモウソウチク、マダケ、ハチクなどがあるが、地下茎での区別はむずかしい。いずれも中国原産といわれ、モウソウチクは18世紀中頃の渡来という。またマダケは日本原産とする考え方もある。いずれも若い茎(竹の子)を食用とする他、秤を細工物、建具、器具など、さまざまに用いる。

(2) 考察

今回調査を行なったのは木製品を中心にわずか36点であったので、これのみで、江戸時代の木材文化を明らかにするのはむずかしい。しかし、ある程度は傾向が見られるので、簡単に考察してみる。木製品は表18にあるように、杭材、板、角材、柱材などの建築材、檜、下駄、その他にわけられる。その各々についてみてみよう。

杭材は7点出土し、うちヒノキ類、クリが2点づつ、それにスギ、ネムノキ、ニワトコが各1点づつである。クリは繩文時代以来、一貫して、杭や土木用材に重用されてきており、この傾向が中・近世もつづいていたことがわかる。それ以外の樹種は、現在の埼玉県内の農村地と同様に、当時の川口市付近の集落の内外に、ごく普通に生育しており、手近なものとして利用されたことが考えられる。建築材と考えられるものは、圧倒的にスギ・ヒノキ類が多く、これは、つい最近までの我々の生活感覚と全く一致するものである。ただモミ類の当時の川口市付近での生育はあまり考えら

れず、秩父地方などからの運搬の可能性が考えられる。楓は、クリ2点、ブナ類、キハダが各1点あり、特にブナ類、キハダの材はやはり山地からの運搬を示している。下駄はスギ、ケヤキ各1点で、近年までの木材の使用傾向と矛盾しない。その他のうちグミ類については、この類の材は通常、使用されることが少ないとから、その用途と相まって興味ある出土である。今後の検討が期待される。一方、流木については、わずか6点の調査結果しか得られていないが、いずれも当時の川口市付近の農村地の樹種として、その存在が十分に考えられるものである。

能城修一（東京大学農学部森林植物学教室）

鈴木三男（金沢大学教養部生物学教室）

表18 用途別樹種・標本数一覧

杭 材	7点	楓	4 点	流 木	6点	板・柱・角材等	15点	下 駄	2点	その他	2点
ヒノキ類	2	クリ	2	クリ	1	スギ	6	スギ	1	スギ	1
クリ	2	ブナ類	1	ヤナギ類	1	ヒノキ類	4	ケヤキ	1	グミ類	1
スギ	1	キハダ	1*	ニワトコ	1	モミ類	2				
ネムノキ	1			センダン	1	クロマツ	1				
ニワトコ	1			トネリコ類	1	トネリコ類	1				
				竹類	1	センダン	1				

*漆塗